

令和7年度
自己点検・自己評価報告書



吉備国際大学

評価委員

(敬称略)

所 属	職 名	氏 名
高梁市大学連携室	室 長	大森 恭二
高梁市教育委員会	教育長	福本 和宏
高梁商工会議所	会 頭	島 一郎
岡山県立高梁高等学校	校 長	澤 顕義
順正学園	監 事	讃岐 洋子

自己点検・自己評価報告

建学の理念・教育目標の具現化	1	理学療法学科	44
学生確保	2	作業療法学科	47
教育の充実（教育改善・向上）.	4	心理学部 心理学科	51
教育の充実（学生支援の充実）.	6	農学部	54
教育の充実（キャリア支援の強化）.	8	地域創成農学科	57
教育の充実（図書館の活用）.	10	醸造学科	60
教育の充実（学修環境の整備）.	11	海洋水産生物学科	62
研究推進	11	外国語学部 外国学科	65
大学運営（持続可能性の追求）	15	アニメーション学部	
大学運営（職能開発の強化）	16	アニメーション学科	70
大学運営（人権・安全への配慮の充実）.	18	人間科学部 人間科学科	73
大学運営（法人部門との連携の円滑化）.	19	通信教育部心理学部	
大学運営（財政基盤の確立）.	19	子ども発達教育学科	80
大学運営（適正な会計処理の実施）	20	社会学研究科	82
内部質保証	20	保健科学研究科	85
地域連携・地域貢献の推進	22	（通信制）保健科学研究科	88
国際化の推進	26	心理学研究科	90
社会科学部	30	（通信制）心理学研究科	92
経営社会学科	34	地域創成農学研究科	94
スポーツ社会学科	37	（通信制）連合国際協力研究科	96
看護学部 看護学科	41	留学生別科	98
		外部評価	101

I. 建学の理念・教育目標の具現化について

1. 大学の使命・目的及び教育目標の周知徹底

吉備国際大学は、開学以来「学生一人ひとりのもつ能力を最大限に引き出し引き伸ばし、社会に有為な人材を養成する」という建学の理念のもと、地域密着型総合大学として、地域に根差した人材の育成に取り組んできた。また、国際化時代を予見し、開学当初から留学生を積極的に受け入れるとともに海外の大学と教育交流協定を締結し、教育・文化交流を図ることにより、学生に国際性を備えた豊かな人間性を身につけさせることに努めてきた。本学の教育の特色と強みはこれからも「地域連携・地域貢献」と「国際化」にある。

開学30周年を迎えた2020年に、建学の理念をより具体的に実現するべく、吉備国際大学ブランドビジョン「実践的な知識を自ら学ぶ力、多様化する社会で生きぬく力、自分の可能性を信じる力を引き伸ばします。」を新たに策定した。このブランドビジョンにより、本学が育成する能力を具体的な三つの力で表し、各学科においてそれぞれをディプロマ・ポリシーに明確に定めて教育を行っている。本学はこのブランドビジョンを教育目標と定めて全教職員が共有し、それを具現化する質の高い教育を展開して、学生の三つの力を引き伸ばす。

教職員に対する周知

〈今年度の取り組み状況〉

- (1) ガルーン(学内グループウェア)トップページのバナー、ネームホルダー、名刺など至る所にブランドビジョンを表示して全教職員で教育目標を共有した。
- (2) 令和7年4月12日に自己点検・自己評価会議を実施して前年度の自己点検・自己評価を行い、その結果を受けて今年度の目標・計画の作成を行った。
- (3) 内部質保証における改善課題として、「地域連携・地域貢献」と「国際化」をどのように授業に取り入れられるかを全学に提示し教育目標の更なる周知徹底に取り組んだ。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

令和4年度認証評価を受けて、令和5(2023)年度を1年目とする第三期中期目標・中期計画ではブランドビジョン「実践的な力を自ら学ぶ力、多様化する社会で生きぬく力、自分の可能性を信じる力を引き伸ばします。」を教育目標と定めて5年間の計画を策定した。教育目標を達成するための本学の教育の特色は「地域連携・地域貢献」と「国際化」にある。

吉備国際大学地域連携・地域貢献活動報告会は今年度で3回目の開催となった。本年度は高梁市並びに学生2名を含む大学からの報告及び今後の展望について講演を行い、高梁市と大学の意思疎通が深まった。高梁市石田市長、福本教育長からも今後の展望に賛同する非常に前向きな意見の表明を頂いた。

「国際化」については第31回吉備国際大学高校生英語スピーチコンテスト、第17回吉備国際大学日本語スピーチコンテストを開催したほか、留学生と高梁市立有漢中学校の国際交流会を開催して学外にアピールした。

〈次年度への課題〉

建学の理念に基づくブランドビジョンを教育目標と定めて全教職員が共有し、それを具現化する質の高い教育を展開して、学生の三つの力を引き伸ばす。

教職員に対する周知としては、ガルーントップページのバナー、ネームホルダー、名刺など至る所にブランドビジョンを表示するとともに内部質保証活動における教育での新たな取り組みとも連動して全教職員で教育目標を共有する。また、教育目標に基づき4月に自己点検・自己評価会議を実施して令和7(2025)年度の自己点検・自己評価を行うとともに、令和8(2026)年度の目標・計画の作成を行う。

ステークホルダーに対する周知

〈今年度の取り組み状況〉

- (1) 学生便覧や大学案内、ホームページ等のメディアの内容を充実させて周知した。
- (2) 学長をはじめとして、オープンキャンパスや保護者会、入学前説明会、入学宣誓式、学位記授与式さらに高梁学生応援協力会など学内外のイベントでの挨拶やインタビュー等の機会に、本学のブランドビジョン(教育目標)と、その目標を達成するための2つの柱が「地域連携・地域貢献」と「国際化」であることを発信した。

<p>〈今年度の結果についての点検・評価〉</p> <p>「地域連携・地域貢献」では令和8年2月22日に地域連携・地域貢献活動報告会を開催し、本学の地域連携・地域貢献活動を学外へ広くアピールした。</p> <p>「国際化」については第31回吉備国際大学高校生英語スピーチコンテスト、第17回吉備国際大学日本語スピーチコンテストを開催したほか、留学生と高梁市立有漢中学校の国際交流会を開催して学外にアピールした。</p>
<p>〈次年度への課題〉</p> <p>ステークホルダーに対する周知としては、学外に対して学生便覧や大学案内、ホームページ等のメディアの内容を充実させて周知する。またオープンキャンパスや保護者会、入学前説明会、入学宣誓式、学位記授与式等の可能な機会を捉えて説明する。2026年度に向け高梁高校から新たに課題解決教育への支援依頼があった。機会をとらえてさらに建学の理念、本学教育の2本の柱を様々なステークホルダーに周知する。</p>

<p>II. 学生確保について</p>
<p>1. ブランディングの強化</p>
<p>ブランドの周知と定着</p>
<p>〈今年度の取り組み状況〉</p> <p>ブランドビジョン＝教育目標である3つの力を伸ばすため大学全体で取り組んでいるのが「地域連携・地域貢献」と「国際化」であり、これが本学の教育の特色であることをあらゆる機会を通じて周知する。ホームページでは本学の取り組む「地域連携・地域貢献」と「国際化」の具体的な最新の内容を発信した。</p> <p>各学部・学科の発信するSNSを通して、取り組む「地域連携・地域貢献」と「国際化」について、その趣旨、狙い、成果を含めて詳細を説明した。</p>
<p>〈今年度の結果についての点検・評価〉</p> <p>地域と連携した行事や研究の状況、国際交流の行事や留学の状況について、都度ホームページに掲載し広く発信している。</p> <p>学生参画を推進するために、機会をとらえて各種委員会に学生の参加を求めた。</p>
<p>〈次年度への課題〉</p> <p>2025年度開催できなかった「ブランディング実行委員会」を継続、活動強化するための方策を再度検討する。委員は各学科及び各部署の若手・中堅層を中心とし、職位を問わずまた学生の意見も含めて優れた意見を改革に反映できる体制を検討・構築しブランディングを推進する。</p>
<p>2. 入学者受入れ方針（AP）の明確化</p>
<p>APに沿った学生の受入れ</p>
<p>〈今年度の取り組み状況〉</p> <p>(1) 専願入試(A0総合選抜・指定校・特別推薦)入試において、各学科のアドミッションポリシーの周知度を確認するための質問を追加した。</p> <p>(2) 一般選抜前期A方式(A-II)について、科目試験に加え小論文による選抜を行い、学力の3要素を多面的・総合的に評価した。</p> <p>一般選抜前期C方式(C-II)について、科目試験に加え外部英語検定試験を利用し、「聞く」「読む」「話す」「書く」の英語4技能を評価した。</p>
<p>〈今年度の結果についての点検・評価〉</p> <p>(1) 本学独自の入試問題である推薦総合選抜・一般選抜の科目試験について、現役・既卒に不利にならないように実施できた。令和7年度入試から「情報」が科目として大学入学共通テストに導入された。本学では選択科目として大学入学共通テスト利用入試で活用した。</p> <p>A0総合選抜、指定校、特別推薦の専願入試について、各学科・専攻のアドミッションポリシーの理解度を面接時に確認した。</p> <p>(2) 2026年度入試において、一般選抜A-II方式で11名、一般選抜C-II方式で4名の志願があった。</p>

<p>〈次年度への課題〉</p> <p>(1) 今年度の入試においても、面接時に各学科・専攻でアドミッションポリシーの確認をしてきたが、2027年度以降も質問項目として取り入れていく。</p> <p>(2) 今年度の一般選抜前期A-II、C-II方式について、志願者は少数であったが、2027年度も科目試験、小論文、調査書を選考方法とするA-II方式(総合評価型)と、科目試験と英語4技能を問う外部英語検定試験を利用したC-II方式を継続して実施していく。</p>
<p>3. 収容定員の充足</p>
<p>収容定員充足に向けた募集活動</p>
<p>〈今年度の取り組み状況〉</p> <p>(1) ブランドビジョンを柱に各学部・学科・専攻の情報発信を行い、入学定員充足を目指した。</p> <p>(2) オープンキャンパス参加者を増やして、専願入試(A0総合選抜、指定校、特別推薦)の入学者を昨年以上に確保するために高校訪問、進学ガイダンスや出張講義、独自の学校見学会などを行い、4月～8月までの広報活動を強化した。</p> <p>(3) Web広告やダイレクトメール等を積極的に活用し、受験生等をホームページ等へ誘導してオープンキャンパスへの参加、受験に結びつける。本学のホームページやインスタグラムでの情報発信を充実した。</p> <p>(4) 「高梁市・順正学園特別奨学金制度」「南あわじ市入学奨励金制度」、岡山キャンパス外国語学部の学生を対象に創設した「伊藤奨学金等の給付型奨学金制度」の周知浸透を進めた。</p>
<p>〈今年度の結果についての点検・評価〉</p> <p>(1) ホームページにより、学部・学科・専攻の情報発信を積極的に行った。また、奨学金制度などの新着情報も発信した。</p> <p>(2) 高校生対象の高校内ガイダンスの会場型ガイダンスに積極的に参加したことにより、昨年度より接触者数も増えた。(カッコ内は昨年度)</p> <p>高校内ガイダンス【入試広報室】83校(90校)、高校内ガイダンス・出張講義【教員】132校(99校)、会場型ガイダンス【入試広報室】46会場(36会場)接触者数(参加者数)3,500名(2,570名)であった。</p> <p>オープンキャンパスを全7回実施し、参加者数(カッコ内は昨年度)は、受験生・高校生1,073名(1,134名)であった。</p> <p>(3) 学部・学科・専攻の新着情報を発信した。イベント情報なども関連部署からの情報を速やかに発信した。</p> <p>(4) 「高梁市・順正学園特別奨学金制度」「南あわじ市入学奨励金制度」、「伊藤奨学金等の給付型奨学金制度」については、開設当時からリーフレットを作成し、校内ガイダンスやオープンキャンパス、高校訪問時に周知し、またホームページにも開示し、積極的にPRを行った。</p>
<p>〈次年度への課題〉</p> <p>(1) 2027年度募集に向けて、昨年度と同様にホームページの内容を充実させ、各学部・学科・専攻の新着情報を発信していく。</p> <p>(2) 2027年度入試の学生確保は、オープンキャンパスの参加者数を増やして、年内入試で入学者確保するために、引き続き高校訪問、進学ガイダンスや出張講義などを行い、更なる広報強化を行う。</p> <p>(3) Web広告やダイレクトメール等を活用し、オープンキャンパスへの参加、受験に結びつける。</p> <p>(4) 引き続き、ホームページやインスタグラムを利用して最新の情報発信を行い、入学者確保に繋げていく。</p>
<p>改組等による適切な学科編成</p>
<p>〈今年度の取り組み状況〉</p> <p>アニメーション文化学部アニメーション文化学科を、アニメーション学部アニメーション学科へと名称変更を行なった。アニメーション業界全般に関わる知識と技術を学ぶ学部学科として、その特性をより受験生に明確に周知することに注力し、定員充足に向けて努めた。</p> <p>また、農学部を改組し、令和8年度より、地域創成農学科の名称を農業資源生物学科へ変更するとともに、アクアグリーンフィールド学科を新設する手続きを行なった。</p> <p>アニメーション学部アニメーション学科、農学部農業資源生物学科及びアクアグリーンフィールド学科とともに、今年度当初よりオープンキャンパスや高校訪問の場でPRするための</p>

リーフレットの作成、ホームページ内にバナーを設置するなど募集活動に注力した。また、「高梁市特別奨学金制度」「南あわじ市入学金制度」についても併せて広く周知を行なった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

名称変更を実施したアニメーション学部アニメーション学科については、初年度の入試において定員充足には至らなかったが、今後は学科の特色や教育内容をより分かりやすく伝える広報施策を一層強化し、ホームページやオープンキャンパス、高校訪問などを通じた周知活動を継続的に行うことで、学科の理解促進と志願者層の拡大につなげていく。

〈次年度への課題〉

令和9年度より、外国語学部外国学科を改組し、社会科学部外国学科とし、入学定員40名、収容定員160名で開設する計画である。
また、新学科開設に併せて既設学科の入学定員の見直しを行い、定員充足を図る。

III. 教育の充実について

1. 教育改善・向上

ブランドビジョン実現のための教育課程の見直しと充実

〈今年度の取り組み状況〉

“地域連携・地域貢献”と“国際化”を2つの柱とした全学的な教育プログラムの策定を全学教養教育科目を中心に引き続き検討を進めている。特に「吉備国際大学アセスメントプラン」に基づく「アセスメントプラン実施計画」は、見直しを行いながら、確実に実施できるようになっている。また、検証結果から導き出された“課題”を“改善”へと繋げるための見直しも図っている。今後は各委員会での議論を活性化し、内部質保証委員会の改善指示のもと改善案を策定し実行した。

“地域連携・地域貢献”については、高梁市や南あわじ市との連携を含め、課題解決型(PBL)の授業を取り入れ、本学のDPにある「自己効力感」を高めることができる内容を引き続き検討している。また、これからの社会に必要とされる情報教育と語学教育については、今後も教育内容の充実と履修者増の取組みを実施するとともに、情報教育については、BYODを推し、文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」の受講者増加を目指した。

“国際化”については、令和8年度より経営社会学科とスポーツ社会学科で短期留学プログラムが盛り込まれたカリキュラムを開設予定とした。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

全学教養科目や専門教育科目を中心に、学生の課題解決力、行動力、ICT活用力・語学力・コミュニケーション力・プレゼンテーション力等の育成を図る取り組みが行われている。全学教養科目については、必修科目以外の選択科目の履修率を向上させるために、各学期初めのオリエンテーション時に大学生として身につけるべき能力や育成科目受講の必要性等についての口頭説明やチラシ配付による受講の奨励により、数理データサイエンスAI科目では、大学全体では「数理・データサイエンス・AI基礎・応用」の履修者が204名(前年比151.6%)であり、関心を持って受講する学生が増加傾向にあることは評価できる。

〈次年度への課題〉

“地域連携・地域貢献”と“国際化”を2つの柱とした全学的な教育プログラムの策定を全学教養教育科目を中心に検討をさらに進めていく必要がある。また、英語コミュニケーション力の育成を目指す関連科目の受講率の向上に取り組む必要がある。

学修支援の強化

〈今年度の取り組み状況〉

学修時間の延伸に向けた方策を検討し、1年次から学修習慣を身につけさせるよう取り組むとともに、将来の目標を明確にできるように積極的に卒業生の事例や社会の第一線で働いている人の事例、国試対策の成功例の導入などを取り入れていくことを検討した。外国人留学生の学修支援として、「KIUグローバル人材養成留学生就職促進プログラム」を大学ホームページや

オリエンテーションなどを通じて学内外に情報発信し、留学生の日本国内への就職支援や留学生募集などに役立てた。退学者対策についても、引き続き入学段階及び入学後の対人・学修などに関する不安など、各段階で精神的に問題を抱える学生への有効な支援方法を検討した。

「KIUグローバル人材養成留学生就職促進プログラム」についてはホームページに公開し、幅広く情報発信を行っており、本年度は7名が参加している。そのうち「2025年度留学生受け入れ促進プログラム」が採択された留学生は5名である。引き続き留学生の就職活動支援や留学生募集を推進した。

また、退学者対策の一環として実施している授業欠席学生への指導については、連続2回欠席者に対してチューター・ゼミ担当教員から継続的に実施して効果を得た。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

(1) 学修時間延伸の方策については、各学科の取り組みにより計画的に進められている。

(2) 国家試験の結果（合格率）

看護師： 87.5%（全国平均94.1%） 保健師： 73.3%（全国平均89.9%）

理学療法士：92.6%（全国平均94.9%） 作業療法士：100%（全国平均96.6%）

公認心理師：25.0%（全国平均60.0%）

作業療法士は、前年に引き続き合格率100%だが、看護師(昨年100%)、保健師(昨年89.5%)、理学療法士(昨年100%)、公認心理師(昨年100%)の合格率は昨年を下回った。

(3) 外国人留学生を対象とした文部科学省「留学生就職促進教育プログラム認定制度」については、本年度7名の受講者があり、1名が修了した。今後とも日本国内での就職を希望する優秀な留学生の就職支援として活用が期待される。

(4) 退学者数・除籍者数等(通学制学部・大学院の合計)

※R8年度は3月31日時点(受理分)、令和6年度は同時期の数値

	退学者数	除籍者数	合計	退学率	除籍率	退学・除籍率
令和6年度	31	18	49	2.3%	1.3%	3.6%
（うち留学生）	8	10	18	3.1%	3.9%	7.0%
令和7年度	32	2	34	2.2%	0.1%	2.4%
（うち留学生）	6	1	7	2.3%	0.4%	2.6%

留学生の退学・除籍者が前年より11名減となり、前年度に引き続き対策による効果を得ている。しかし、昨年度と同様に入学時より問題を抱えた学生が増加してきており、1年次から2年次の早い段階で休学や退学となるケースがある。

〈次年度への課題〉

外国人留学生の学修支援として新たに構築し、文部科学省に認定された「KIUグローバル人材養成留学生就職促進プログラム」については、受講者が少ない状況であり、今後留学生に周知し受講者を増やす必要がある。

退学者対策については、入学段階及び入学後の対人・学修などに関する不安など、各段階で精神的に問題を抱える学生への有効な支援方法を検討する必要がある。

学修成果の可視化の推進と教育改善

〈今年度の取り組み状況〉

アセスメントプランに基づき、三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価と改善に向けた取組を実行する。アセスメントプランの内容については毎年検証し、見直しを図った。

また、「PROGテスト」のデータを活用し、DPの達成度、各種アンケート結果との相関性など、データの分析と検証を行い、教育改善の基礎データとする。併せて学生へのフィードバックを丁寧に行い、学生が自らの能力を確認し、大学生活や将来の目標設定、就職活動に役立てられるようにした。学修ポートフォリオについては、継続して実施し、就職活動に結びつけられるようキャリア教育との連携を検討した。ルーブリック評価については、卒業論文、演習等以外にも範囲を広げ、活用を促進した。

「PROGテスト」のデータにより、教育改善の基礎データを作成した。また、令和8年度以降は、1年と4年の対比を行う予定である。なお、結果については、学生にフィードバックさせた。学修ポートフォリオについては、本年度も継続して行っている。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

アセスメントプランは、毎年、実施時期や点検内容、アンケート実施方法等について見直しを行った上で、計画通り実施できていることは評価できる。特に、「PROGテスト」については、

これまで学生アンケート等の自己評価が中心であった学生の能力に関する評価について、客観的なテストにより測れるようになったことで、学修成果の可視化としてより正確に検証できるようになった。

〈次年度への課題〉

「PROGテスト」のデータを活用し、DPの達成度、各種アンケート結果との相関性など、データの分析と検証を行い、教育改善の基礎データとする。令和8年度には1年次と4年次のテスト結果を時系列的に比較し、能力の伸長を確認して学修成果の可視化を進める。また学生へのフィードバックを丁寧に行い、学生が自らの能力を確認し、大学生活や将来の目標設定、就職活動に役立てられるようにする。

学修ポートフォリオについては、継続して実施し、就職活動に結びつけられるようキャリア教育との連携を検討する。

教育改善の取組みへの学生の参画

〈今年度の取り組み状況〉

各種アンケート結果について、学生へのフィードバックの方法を検討し実施した。また、カリキュラムについて、卒業する学生に意見を聴取する機会を設け、教育改善に取り組んだ。

授業アンケート結果について、学生へのフィードバックの方法を検討したが、昨年度に続き閲覧のみの公開となった。引き続きホームページ等での公開に向けて検討する。また、学生に意見を聴取する機会については本年度は、「教育課程編成に係る学生との意見交換会」を実施した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

教育課程編成に係る学生との意見交換会については、今年度初めて実施し授業内容の改善などカリキュラム全般についての意見・要望の聴取が出来た。

〈次年度への課題〉

今年度の意見交換会において、学生からカリキュラム等について、意見要望が提出された。長期的に対応していかなければならない意見・要望もあることから各学科とも改善・修正した点を相互に確認しながら継続性を持って対応していくことが必要である。

大学院教育の転換と受入れの拡大

〈今年度の取り組み状況〉

メディアを活用した授業手法など社会人が受けやすい体制づくりを行うなど、学部からの進学者のみならず、社会人の学位取得、学び直しやリスキリングなど、様々なニーズに対応した教育課程や授業方法を検討している。

大学院(通信制)連合国際協力研究科では本年度より会場を岡山駅前キャンパスの実施として、ハイフレックス(オンライン+対面)での授業を実施した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

大学院(通信制)連合国際協力研究科は、ハイフレックス(オンライン+対面)での授業を実施することにより、国内在住のみならず海外在住の方(アメリカ、中国、南アフリカ、ウズベキスタンなど)から、学生を受け入れることができたことは評価できる。

〈次年度への課題〉

通学制の大学院についても、社会人の受け入れを視野に入れた検討が必要だと考える。引き続き通信制、通学制ともに様々なニーズに対応した教育課程や授業方法を検討していく。

2. 学生支援の充実

学生の意見・要望への対応の強化

〈今年度の取り組み状況〉

学生から友人関係やクラブ活動等でのトラブルや悩みの相談があった場合は、速やかにチューター等と連携し、情報共有を行うとともに解決に向けて対応策を協議し、大きなトラブルに発展することなく解決している。

〈今年度の結果についての点検・評価〉
トラブルの内容によっては学生だけでなく保護者や一般市民を含めた対応が必要になるケースもあり、丁寧かつ厳しく取り扱わなければならない場合にも適切な対処がとれ、概ね円満に解決できている。
〈次年度への課題〉
次年度も同様の対応をとる方針であるが、より迅速に対応すれば早期に解決できたであろう事案もあり、優先順位の見極めが課題である。
学生の相談体制の見直しと充実
〈今年度の取り組み状況〉
留学生の対応について、事件事故に巻き込まれないようオリエンテーションで説明するとともに、問題発生時には警察や関係機関と協力して、留学生が不利益にならないよう配慮し、適切に対応を行った。
〈今年度の結果についての点検・評価〉
オリエンテーション等でも事件・事故の当事者にならないようわかりやすく説明を行ったが、日本語が不慣れなことや文化の違いより、諸問題が発生した。
〈次年度への課題〉
言葉や冊子等で説明しても理解できない学生に対して想定外の事案が想定されることから、より細かなケアが必要とされる。
課外活動の活性化（クラブ活動）
〈今年度の取り組み状況〉
学生委員会及び伊賀祭実行委員が自立して活動ができるよう学生課で支援している。体育部会も会長を選出し、活動の体制を整えることができた。また、学生委員会が伊賀祭実行委員と相互に協力して伊賀祭を成功させた。
〈今年度の結果についての点検・評価〉
それぞれの団体の代表者に対する指導をより細かくしたことで、以前より学生自らが主体性を持って行動できている。今後、団体間の連携がより一層強化できれば、自治組織としての主体的な活動に期待できる。
〈次年度への課題〉
学友会組織やクラブ代表者の親睦会等を開催することでより一層の連携が図ることができる。
課外活動の活性化（地域社会との連携）
〈今年度の取り組み状況〉
インターナショナルフェスティバル「1Day Asia in たかはし」を開催した。開催場所を高梁総合福祉センターとしたことにより、在住外国人も含め多くの地域住民の参加があった。
〈今年度の結果についての点検・評価〉
学生の実行委員が非常に良く機能し、日本人学生も留学生も垣根なく、各々の役割を果たすことができた。
〈次年度への課題〉
核となって動く学生の指導や育成が必要で、開催場所も市内で調整しなければならないことから根本的な実施の見直しを検討しなければならない。
キャンパス間交流の充実
〈今年度の取り組み状況〉
高梁市栄町商店街において開催されたカレーフェスタに、南あわじ志知キャンパスの学生と高梁キャンパスの留学生が参加した。高梁キャンパスの伊賀祭においても、南あわじ志知キャンパス、岡山キャンパスの学生が参加・出店を行った。南あわじ志知キャンパスのさなぶり

祭・くにうみ祭にも、高梁キャンパス並びに岡山キャンパスの日本人学生や留学生が多数参加・出店し、有意義な交流ができた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

違うキャンパスの学生が協力することで一つのイベントを盛り上げ、それぞれのキャンパスの魅力が相互に見出すことができたことは大きな成果である。

〈次年度への課題〉

南あわじ市⇄岡山県の移動に時間がかかりスケジュールがタイトになることから、できるだけ余裕を持って行動できる日程の調整が課題である。

3. キャリア支援の強化

キャリア教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

学生の主体的・積極的なキャリア形成を支援していくため、1年次から3年次までのキャリア教育授業において以下の方策を重点的に実施してきた。

- (1) キャリアとは何か、大学で何を習得していくのかを自分で考えて実行できるように、情報提供や実践的なキャリア教育を行った。
- (2) 社会的及び職業的自立に必要な能力である基礎的・汎用的能力(人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、キャリア・デザイン能力)を高める演習やグループワークを行った。
- (3) 就職活動に必要な情報の収集、各種書類の作成、試験や面接に関する知識やスキルを教授し、主体的に進路を決定する力の向上を図った。
- (4) 1年次の「キャリアデザインⅠ」では留学生クラスを設け、日本での生活や制度に関する情報、対人関係や就労に必要な知識とスキルを教授した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- (1) 1年次の「キャリアデザインⅠ」では、初回に「キャリアとは何か」を教授し、自分の将来の生き方をイメージさせ、大学4年間の目標やそれを実現するための生活を考えることができるよう講義や演習を実施した。また、入学後に実施したPROGテストのフィードバックを行い、自己理解や進路選択の資料として活用した。
- (2) 「キャリアデザインⅠ」の中で、自己理解を深める演習を繰り返し行った。また、外部講師として卒業生やボランティアセンター職員を招聘し、社会と繋がっていく自分をイメージしながら実際にキャリア実践に繋がる活動をしていくことを勧めた。さらに2年次の「キャリアデザインⅡ」においても、自分の社会人基礎力や就職基礎力を自覚し高めていくための演習やグループワークを実施した。
- (3) 就職活動に必要な情報収集をする学生のために、3年次の「キャリア実践Ⅰ」の初回に情報サイト会社6社の登録を行った。また、中小企業同友会と連携し県内企業による職業理解教育、業界・企業研究、岡山県労働局による労働基準に関する基礎教育を実施した。各種書類の作成や面接については、キャリアサポートセンターにおいて履歴書やエントリーシートの添削及び面接練習等を実施し、Microsoft Teamsを利用したオンライン面接練習や就職相談にも対応した。
- (4) 行政書士を招聘し、地域での生活や日本での生活マナー、日本の法律を踏まえた働き方やルールについて指導した。また、本年度から、留学生の就職支援活動を行っている企業から講師を招聘し、日本での就職状況や今後の具体的な活動について指導した。

〈次年度への課題〉

- (1) 本年度の講義内容を継続するが、次年度からは講義や演習の資料配付、授業後の課題配信をユニバーサルパスポート等を使用したオンラインで実施する。授業開始前に資料を配信し、学生自身がアクセスして入手することで、主体的に授業に取り組む姿勢を促進する。
- (2) 1年次のキャリアデザインⅠでは、社会人基礎力を高めていくため、人間関係の構築に必要なスキルやコミュニケーションに関する演習を増やしていく。2年次のキャリアデザインⅡでは、キャリアビジョンを明確にし、将来自分が目指していく目標を立てる機会を設け、振り返りを実施する。
- (3) 就職情報サイト会社の登録は、本年度と同様に各学科教員指導の下、3年次キャリア実践Ⅰの初回に実施する。また、県内企業による職業教育、岡山県労働局に労働基準に関する基礎教育は継続し、各種書類の作成や面接に関する支援も、引き続きキャリアサポートセンターの

スタッフが随時実施する。

(4) 本年度初めて招聘した就職関連会社スタッフの講義が好評であったため、次年度も継続して依頼する。日本で生活や就職活動に必要な法律等については、引き続き行政書士に講義を依頼する。

キャリア支援における連携体制の構築

〈今年度の取り組み状況〉

学生及び採用企業のニーズや社会情勢の把握に努めながら、「就職率100%」並びに「就職・進学率90%以上」を目指し、以下の対策を重点的に実施し取り組んできた。

(1) 企業や病院からキャリアサポートセンターに届いたオープンカンパニー及びインターンシップ、学内における企業説明会等の情報をユニバーサルパスポートにて学生へ周知した。キャリアサポート委員をはじめとする各学科教員にも情報を共有し、学生の参加促進を依頼した。

(2) 進路相談、面接練習、書類添削等の支援は、対面だけでなくオンラインも活用して実施してきた。集団面接やグループディスカッションが想定される場合は、複数名が参加して練習を行った。また、キャリアサポートセンターへの来室が難しい場合は、Microsoft Teamsを用いたオンラインでの支援やチャットの活用で遠隔支援の充実を図った。

(3) 「キャリア実践Ⅰ・Ⅱ」では、就職に関する知識・情報提供とともに、実際の就職活動において必要な実践的スキルを指導した。エントリーシートや履歴書の作成に関しても授業内で指導し、各自で作成することを課題とした。また、就職活動におけるAIの活用方法について教授し、就職活動において適切に活用するよう指導した。

(4) 「KIUグローバル人材養成留学生就職促進プログラム」では、教務課、経営社会学科担当教員と連携して学生支援を進めてきた。プログラム履修学生が受講するキャリア教育科目においては、学科担当教員が個々に学習支援を行った。また、昨年度から留学生担当を担っているスタッフがキャリアカウンセラーの資格を取得し、就職に関する個別相談や添削指導、就労やビザに関する情報提供等を実施した。

(5) 企業や公的機関の単独説明会、学内インターンシップ等説明会&業界研究会(参加企業8社)等、キャリアサポートセンターが実施するイベントやセミナーについて、学生課・留学生課へ情報提供を行い、学生支援に取り組んだ。岡山キャンパス、南あわじ志知キャンパスにおいても、同様に単独説明会やセミナーを開催した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

学内での単独説明会は昨年度を上回る申し込みがあり、4年次だけでなく1年次から参加する学生が増えてきた。この企画を継続することにより、学生の企業研究及び業界研究が進み、早期の就職内定にも繋がった。

2026年度の就職率は3月末現在97.3%(昨年同時期97.8%)であり、最終的な就職率は昨年同様の高い数値となる見込みである。以下の取組が効を奏したと考えられる。

(1) 企業や病院から届いたオープンカンパニー及びインターンシップの情報をユニバーサルパスポートにて学生へ周知した。キャリア教育科目や就職ガイダンスにおいても、情報サイト会社担当者が申し込み方法等を説明する機会を設けて早期に就職活動準備を促した。

(2) キャリアサポートセンターが導入している求人検索NAVIの面談予約から申し込みのあった学生に対して、進路相談をはじめ面接練習、履歴書添削等をオンラインも活用して実施し、予約以外の学生にも臨機応変に対応し、昼休み時間も対応した。

(3) 3年次春学期のキャリア実践Ⅰ・Ⅱでは、就職に関する知識・情報提供とともに、実際の就職活動において必要な実践的スキルを指導した。

(4) 「KIUグローバル人材養成留学生就職促進プログラム」は、教務課、経営社会学科担当教員と連携して進め、対象となった学生の職業意識や就職活動に関する知識・技術の向上に繋がっている。また、昨年度からキャリアサポートセンターに外国人スタッフが配置され、留学生に対して就職に関する個別相談や添削指導、就労に関する情報提供等を行った。

(5) キャリアサポートセンターが実施しているイベントや企業等の単独説明会は、新たにできた学生会館で実施した。参加申し込みをしていない学生も休憩時間等に立ち寄ることができる場所になり、企業等の情報をパネルで展示する等、学生への情報提供方法も充実した。

〈次年度への課題〉

(1) インターンシップやオープンカンパニーへの参加促進を強化していく。キャリア教育授業内だけではなく、ユニバーサルパスポートや求人検索NAVIからの告知、各学科のキャリアサ

ポート委員からの紹介等を行う。

(2) 学内で実施される単独説明会等の案内をユニバーサルパスポートで配信しているが、見ていない学生も多い。各学科の専門性に関連のある企業やイベントの情報は、各学科のキャリアサポート委員からも学生に案内をするよう依頼する。

(3) 就職支援、進学等の支援について現段階の予約時間(対応時間)を見直し、より多くの学生対応ができるよう取り組んでいく。

(4) 留学生を採用できる企業の開拓及び学内での企業単独説明会を実施する。留学生対象の就職ガイダンスも実施していく。

4. 図書館の活用

図書館環境の充実

〈今年度の取り組み状況〉

(1) 図書館資料 2025年度における図書館資料の整備状況は、以下のとおりである。

蔵書冊数は248,300冊(内洋書38,199冊)、年間受入図書冊数は1,746冊であり、所蔵雑誌種数については843種(内外国雑誌396種)、年間受入雑誌種数69種となった。電子的情報資源として、電子ジャーナル種数は22,058種(内国外20,400種)、電子書籍は221点(内国外73点)、検索環境整備の指標となるメタデータ件数は769件であった。

購入図書を選書にあたっては、利用実態を踏まえ、利用頻度の高い分野並びに学修・研究支援上必要性の高い資料を優先的に購入している。また、教員や学生からの推薦・希望を受け付けることとし、教育研究に資する図書の充実などに努めている。図書購入は複数キャンパスで実施しているが、同一図書を重複して購入すると予算の効率的活用を妨げる可能性があるため、各キャンパス間での情報共有と調整を重視してきた。図書の除籍や雑誌の継続・廃棄などに関しては、図書館運営・研究紀要編集委員会において審議されている。学修ニーズを反映した資料構築を維持し、書架スペースの合理的な活用と適切な資料保存環境を保つため、年2回の除籍を進めた。除籍決裁後には、学生・教職員へ向けて無償譲渡を実施した。

(2) 利用数 入館者数(延べ人数) 30,580人、図書貸出冊数 1,928冊、学術機関リポジトリ利用数(アクセス数)77,690件であった。

(3) 機器更新状況 パソコンの機器更新については、計画に基づき更新作業を実施した。

(4) ラーニングコモンズ 企画展示では、教員からの依頼を受け、認知症支援の啓蒙活動の一環として、高梁市地域包括支援センターによる「認知症サポーター企画展示」【期間：10月2日～10月30日】を開催した。また、障害・福祉事業への理解促進を目的として、社会福祉法人旭川荘によるアート展「旭川荘アートギャラリー展」【期間：11月4日～11月27日】を開催した。

さらに、アニメーション学科主催の作品展を実施し、第一期【期間：12月9日～12月22日】は、点描画作品二人展「点・てん・展」、第二期【期間：2026年1月20日～2月2日】、第三期【期間：2026年2月3日～2月16日】は、アニメーション学科学生による個展を開催した。一般公開をすることで、多くの来場者に作品を鑑賞してもらおう機会を創出した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

(1) 図書館資料 受入図書冊数としては増加がみられない場合であっても、利用頻度を重視した選書を行っている。また、図書館システムの活用により、購入申請段階で重複を検出・回避できている。電子資料数は増えており、総合的な資料提供量としてはむしろ増えている。提供資料の質的確保を図っている。

(2) 利用数 電子資料の利用は年々増加しており、資料提供は紙媒体に限られず、電子書籍やデータベースの導入によって情報提供の質・量ともに拡充している。したがって、貸出冊数や入館者数のみを指標とする従来の評価方法では、現行のサービス実態を十分に反映しているとは言えない。今後は、電子資料の利用状況も含めた、より総合的な評価指標の整備が求められる。

(3) 機器更新状況 老朽化機器の解消、電子資料閲覧の利便性向上、およびセキュリティリスクの低減が図られた。

(4) ラーニングコモンズ 来館者から寄せられた意見・感想を収集し、依頼者へ報告のうえ、今後の企画展運営の参考とした。学科主催の作品展においては、学生が同学科の個展を鑑賞したことをきっかけに、自身も契機となり、個展を開催したいという意欲が高まった。その後、学生は自主的に企画立案に取り組み、準備を進め開催した。外部刺激を自身の成長につなげ、主体性・実行力・創造性をもって形にした姿勢は、学修成果として大きな価値がある。

〈次年度への課題〉
(1) 図書館資料・(2) 利用数 電子資料の利用が年々増加しており、紙媒体の資料購入が抑制される傾向がある。利用者のニーズに合致した資料を適切に提供することが今後の指標となる。 (3) 機器更新状況 今後も引き続き更新状況を検証し、適切な機器管理に努める。 (4) ラーニングコモンズ 企画展示を今後も発展・継続していくことを目指す。
5. 学修環境の整備
施設・設備の整備
〈今年度の取り組み状況〉
高梁キャンパスでは、7・11・14号館の空調機器の一部更新を行った。また、人間科学部人間科学科心理学専攻で使用するシールドルームの設置を行った。 岡山キャンパスでは、1号棟2階大講義室で使用するプロジェクター2台の更新を行った。 南あわじ志知キャンパスでは、令和8年度に開設するアクアグリーンフィールド学科教員の使用する研究室及び一部の演習室を整備した。
〈今年度の結果についての点検・評価〉
高梁キャンパスでは、7・11・14号館の空調機器の一部更新を10月に完了している。また、人間科学部人間科学科心理学専攻で使用するシールドルームの設置は3月に完了した。 岡山キャンパスでは、1号棟2階大講義室で使用するプロジェクター2台の更新は6月に完了した。 南あわじ志知キャンパスでは、令和8年度に開設するアクアグリーンフィールド学科教員の使用する研究室及び一部の演習室を3月に完了した。
〈次年度への課題〉
南あわじキャンパスの講義室、演習室、実習室及び体育館の電灯がLED化されていないので、更新を進める。 各キャンパスとも施設設備の修繕を要する箇所があるので、優先度を決めて適切に対応していく。

IV. 研究推進について
1. 研究力の強化
科学研究費補助金及び公的研究費への応募促進
〈今年度の取り組み状況〉
6月25日(水)に開催した「コンプライアンス教育・研究倫理教育研修会」において、科研費採択者による講演「科研費採択者体験談～私の研究計画調書、こんな工夫をしました～」を実施した。また、7月23日(水)には「令和8年度公募 科学研究費助成事業 公募要領等説明会」を開催し、制度理解の促進を図った。 公的研究費および民間研究費については、募集通知が届き次第、全教員へ周知しており、関係教員が継続的に応募している。 学内共同研究費については、5件の研究に対して配分を行い、科研費応募を見据えた予備調査や継続調査を支援した。
〈今年度の結果についての点検・評価〉
科研費採択者による体験談講演および公募要領説明会を計画どおり実施し、教員の科研費制度への理解促進と申請意欲の向上に努めた。しかし、科研費申請件数は長期的に減少傾向にあり、課題が残る。 公的研究費・民間研究費の募集情報を適宜周知し、関係教員が継続して応募している点は評価できる。 学内共同研究費を5件に配分し、科研費申請を見据えた予備調査・継続調査を支援したことは、研究基盤の強化に寄与したと評価できる。

<p>〈次年度への課題〉</p> <p>学科ごとに設定する科研費申請件数の目標値を確実に運用し、進捗確認や学科内での情報共有を含む組織的な申請促進体制を構築する必要がある。</p> <p>若手教員・新任教員を中心に、研究計画調書作成支援やメンタリング制度など、申請スキル向上のための体系的支援策を強化する。</p> <p>学内共同研究費の成果を可視化し、科研費申請への接続をより明確にすることで、研究力強化の好循環を生み出す必要がある。</p>
<p>研究部門自己点検・自己評価の実施と評価結果による見直し</p>
<p>〈今年度の取り組み状況〉</p> <p>研究部門では、学内の研究実績を体系的に整理し、「研究部門自己点検・自己評価報告書」として3月に取りまとめた。さらに、この報告書について外部評価委員による評価を受け、その結果を研究活動の活性化に活用している。</p>
<p>〈今年度の結果についての点検・評価〉</p> <p>研究部門では、年間の研究実績を取りまとめる体制と、外部評価委員による評価を受ける仕組みが一体的に機能しており、客観的視点からの助言や指摘を得る体制が一定程度確立している。</p> <p>研究実績の可視化が進んだことで、学内研究者の活動状況を把握しやすくなり、研究推進に向けた基礎データとして活用できる環境が整備された。</p>
<p>〈次年度への課題〉</p> <p>研究成果の可視化を学内にとどめず、ウェブ掲載や広報資料などを通じて学外へ発信し、大学全体の研究力アピールを強化することが求められる。</p> <p>自己点検・自己評価の結果や外部評価の内容を踏まえ、研究支援制度の改善や若手研究者育成施策など、組織的な研究力強化につながる仕組みづくりをさらに進める必要がある。</p>
<p>研究成果の積極的な発言と研究交流の推進</p>
<p>〈今年度の取り組み状況〉</p> <p>各教員が学会発表および研究論文の発表に取り組んでおり、その最終的な成果は研究部門自己点検・自己評価の際に取りまとめている。</p> <p>全教員が年2回(3月・9月)researchmap を更新し、研究成果を学内外に向けて発信している。</p> <p>3月12日(金)に順正学園学術研究会を開催し、順正学園内における研究交流の促進を図っている。</p>
<p>〈今年度の結果についての点検・評価〉</p> <p>各教員が継続的に学会発表や論文発表に取り組んでおり、研究成果の外部発信が個々のレベルで着実に進んだ。これらの成果は研究部門自己点検・自己評価報告書に集約され、大学全体の研究活動の可視化に寄与している。</p> <p>全教員による researchmap の年2回更新が定着し、研究成果の公開性・透明性が向上した。学外からの研究者情報へのアクセスが容易になり、共同研究や地域連携の基盤強化につながっている点は評価できる。</p> <p>順正学園学術研究会(3月12日開催)を通じて、学園内の研究交流を促進する機会を確保した。学内研究者が成果を共有し、学際的な連携の可能性を広げる場として機能している。</p>
<p>〈次年度への課題〉</p> <p>researchmapの質を高めるため、教員向けの研修やサポート体制を整備し、研究成果の記述内容やキーワード設定の最適化を促す必要がある。</p> <p>学術研究会を単発のイベントで終わらせず、成果のフォローアップや共同研究への発展を促す仕組みを検討することが求められる。</p> <p>研究成果の発信を地域連携や社会実装へとつなげるため、外部機関との情報共有や共同研究提案につながる仕組みづくりを進めることが今後の重要な課題である。</p>
<p>2. 社会実装の推進</p>
<p>産学官連携研究の推進</p>

〈今年度の取り組み状況〉
<p>学部単位で産学官が連携する研究会の設置を目指していたが、今年度中の実現には至らなかった。</p> <p>9月24日(水)のFD・SD研修会において、岡山県企業と大学との共同研究センター長・佐藤兼郎氏より、同センターの活動紹介が行われ、本学教員に対して産学官連携への参画が呼びかけられた。</p> <p>11月27日(木)に開催された「第30回 岡山リサーチパーク研究・展示発表会」において、人間科学部人間科学科(作業療法学専攻)の教員が研究発表を行った。</p>
〈今年度の結果についての点検・評価〉
<p>学部単位での産学官連携研究会の設置については、構想段階から具体化に至らず、体制整備や関係機関との調整が十分に進まなかったことが明らかとなった。研究会設置に向けた課題の整理や、学部内での合意形成プロセスに改善の余地がある。</p> <p>「第30回 岡山リサーチパーク研究・展示発表会」での発表を通じて、大学の研究活動を地域に発信する機会を確保できた点は、社会実装に向けた取り組みとして意義がある。ただし、活動が個々の教員に依存しており、組織的な連携推進には課題が残る。</p>
〈次年度への課題〉
<p>学部単位の産学官連携研究会設置に向け、目的・役割・運営体制を明確化し、学部内での合意形成を進める必要がある。特に、教員にとっての参加メリットや研究支援制度との連動を示すことで、実現可能性を高めることが求められる。</p> <p>産学官連携の機会を拡大するため、地域企業や行政との接点を増やす仕組みを計画的に整備することが課題となる。</p>
研究成果の地域社会への実装
〈今年度の取り組み状況〉
<p>地域貢献教育研究活動助成金については3件、SDGs教育研究活動助成金については3件の申請に対して配分を行い、地域志向研究および持続可能な社会づくりに資する研究活動を支援した。</p>
〈今年度の結果についての点検・評価〉
<p>採択された研究は農学部・人間科学部をはじめ複数の学部にもたがり、地域課題の解決や教育効果の向上に寄与する内容が多かった。これにより、大学としての社会実装力の向上に一定の成果が認められる。また、研究者の地域連携に対する意識が高まり、地域社会との協働を促進する基盤づくりに貢献した点は評価できる。</p>
〈次年度への課題〉
<p>助成金による研究成果を地域社会および学内外へ効果的に発信する仕組みを強化し、社会実装の可視化を一層進める必要がある。また、研究成果を地域で実装するプロセスには多くの教育的要素が含まれているため、それらを体系的に整理し、授業や教育プログラムへ還元する仕組みを構築することが求められる。</p>
3. 研究倫理・コンプライアンスの充実
研究倫理の確立とコンプライアンスの厳正な実施
〈今年度の取り組み状況〉
<p>① 6月25日(水)にコンプライアンス教育・研究倫理教育研修会を開催した。今年度もコンプライアンス違反、研究倫理違反はなかった。</p> <p>② 「公的研究費の不正使用防止に関する基本方針」、「公的研究費の使用に関する行動規範」、「公的研究費の不正使用防止計画」を教職員に周知すると共に「コンプライアンス教育・啓発活動実施計画 2025年度版」に基づきコンプライアンス教育・啓発活動を実施し、コンプライアンス違反ゼロを継続した。</p>
〈今年度の結果についての点検・評価〉
<p>コンプライアンス教育・研究倫理教育については、研修会を開催すると共に、ガールーンでの掲示等を活用して啓発のメッセージを発信した。また、学生に対する研究倫理教育は、演習科目等の授業で行うことをシラバスに記載し、各学科の授業の中で行っている。なお、コンプ</p>

ライアンス教育・研究倫理教育研修会において確認テストを行った結果、点数が低い教員がいたため、コンプライアンス推進責任者兼研究倫理教育責任者からの指導を行っている。

〈次年度への課題〉

コンプライアンス関連規程および研究倫理関連規程の周知と違反の予防を図る。研究倫理教育を一層充実させ、倫理違反ゼロを継続する。また、コンプライアンス教育・啓発活動を充実させ、コンプライアンス違反ゼロを継続する。

研究インテグリティの確保

〈今年度の取り組み状況〉

令和7年4月1日付けで、研究インテグリティの確保に関する規程を制定し、研究インテグリティ・マネジメント委員会を設置。また、安全保障輸出管理規程を制定し、輸出管理委員会を設置している。学内への研修(周知)に関しては、検討するにとどまった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

研究インテグリティの確保等に関する一連の規程等を整備することはできたが、実際の運用に当たって学内への研修(周知)をする必要がある。

〈次年度への課題〉

研究環境の変化とリスクマネジメントの必要性から、これまでの研究インテグリティの取組を基盤とし、研究セキュリティも含めた取組の進展が求められている。安全保障輸出管理も併せ、技術流出リスクに対する多様なリスクマネジメントが求められていることから、研究活動のリスクを正しく評価し、リスクに備えるため、継続的な情報収集と啓発活動が必要である。

研究データポリシーの策定

〈今年度の取り組み状況〉

令和7年4月1日付けで、研究データポリシー、オープンアクセスポリシーを制定し、10月7日(火)に学術機関リポジトリ運用指針(ガイドライン)と登録申請について教員向けに案内をして

〈今年度の結果についての点検・評価〉

「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針(国のOA基本方針)」(関係府省申合せ)において求められる学術論文及び根拠データの公開のための基盤を整え、本学の機関リポジトリにおいて学術論文及び研究データの収載とメタデータの付与が推進できるように案内できた。

〈次年度への課題〉

「学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針(国のOA基本方針)」(関係府省申合せ)において求められる学術論文及び根拠データの公開のため、本学の機関リポジトリにおいても公開可能であることを引き続き啓発する。

動物実験への倫理的配慮

〈今年度の取り組み状況〉

11月26日(水)に実験動物慰霊祭を実施した。また、教育訓練(動物実験規則説明講習会)については、対象者が確定した後に行う予定であったが、対象者はなく実施しなかった。

動物実験の自己点検評価を行い、外部検証を受審した結果、動物実験の実施体制に若干の見直しが必要であるとの指摘を受けた点について、見直しを行った。

2月26日(木)に動物実験内部監査を行い、動物実験が適切に行われていることを確認した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

実験動物慰霊祭の実施、動物実験の自己点検評価、動物実験内部監査を行い、動物実験の実施体制の見直しを行い、動物実験が適切に行われていることを確認できた。

〈次年度への課題〉

動物実験の自己点検評価、動物実験内部監査、動物実験に関する教育を確実にし、動物実験の基本指針と倫理的配慮を徹底する。

4. 安全への配慮等
化学物質の管理
〈今年度の取り組み状況〉
<p>① 環境マネジメントシステムの運用と連携して化学物質の管理を行い、適正に管理されていることを確認した。</p> <p>② 化学物質について、使用者がリスク管理を徹底し、事故等の未然防止に努めた。</p> <p>③ 毒劇物、麻薬類、放射性物質等については、該当する物質がある場合には、管理簿を作成して管理している。</p> <p>なお、6月5日(木)高梁警察署によって、爆発物の原料となり得る化学物質の保管状況調査があったが、適切性が確認された。</p>
〈今年度の結果についての点検・評価〉
化学物質の実験上の安全への配慮については、環境マネジメントの一環として化学物質の管理を行っている。
〈次年度への課題〉
実験の安全管理について、法令遵守を基本として、徹底する。
組換えDNA実験等の安全管理
〈今年度の取り組み状況〉
組換えDNA実験安全管理規程の確実な遵守を呼びかけた。 規程に従って組換えDNA実験を行っている。
〈今年度の結果についての点検・評価〉
組換えDNA実験安全管理規程を確実に遵守し、DNA実験等の安全管理に努めた。
〈次年度への課題〉
今後も組換えDNA実験安全管理規程を確実に遵守し、DNA実験等の安全管理に努める。

V. 大学運営について
1. 持続可能性の追求
SDG's 達成を目指した活動の推進
〈今年度の取り組み状況〉
<p>(1) 持続可能性を志向した活動の推進</p> <p>① 学内で行われている研究活動をSDGsの各ゴールに紐付けし、持続可能性に寄与する研究を推進する。</p> <p>② 大学の組織活動をSDGsのゴールに紐付け、全学的に持続可能性を志向した取り組みを進める。</p> <p>③ SDGs教育研究活動助成金を配分し、SDGsに関連する研究を支援する。</p> <p>(2) 持続可能性に寄与する人材の育成</p> <p>すべての授業をSDGsのゴールに紐付け、持続可能性の視点を踏まえた教育を行うことで、持続可能な社会の実現に貢献できる人材を育成する。</p> <p>(3) SDGs活動の情報公開</p> <p>SDGsへの取り組みを測定・評価し、大学の歩みと成果を分かりやすく可視化するための仕組みを整備するとともに、情報公開のシステムを構築する。</p>
〈今年度の結果についての点検・評価〉
<p>(1) 持続可能性を志向した活動の推進</p> <p>① 研究活動のSDGsゴールへの紐付けについては、現在検討中である。</p> <p>② 組織活動のSDGsゴールへの紐付けについても、引き続き検討中である。</p> <p>③ 3件の研究に対してSDGs教育研究活動助成金を配分し、教育研究活動を推進した。</p> <p>(2) すべての授業をSDGsのゴールに紐付け、シラバスに明記するとともに、持続可能性に寄与する人材の育成を目指して教育を実施している。</p>

(3) SDGs活動の概要はホームページで公開している。評価システムの構築については、現在検討中である。

〈次年度への課題〉

(1) 持続可能性を志向した活動の推進

① 研究活動および組織活動のSDGsゴールへの紐付けは今年度「検討中」にとどまっております、体系的な整理が進んでいない。併せて、教職員への周知や紐付け作業を支援する体制の構築が課題である。

② SDGs助成金の配分は実施できているものの、採択件数の拡大や研究成果の可視化が十分ではない。助成制度の周知強化と成果発信の仕組みづくりが求められる。

(2) 全授業でSDGsゴールをシラバスに明記しているが、紐付けの深さや教育内容との整合性にはばらつきが生じる可能性がある。形式的な紐付けにとどまらず、教育内容に根差した質の高い紐付けへと改善することが次年度の課題となる。

(3) SDGs活動の公開は行っているものの、現状はホームページでの掲載にとどまり、情報の体系的や更新頻度に課題が残る。大学全体の取り組みを一元的に整理し、継続的に更新できる情報公開体制の整備が必要である。

環境マネジメントの推進

〈今年度の取り組み状況〉

(1) エネルギー消費量の削減

① 2023年度から5年間にわたり年平均1%以上のエネルギー消費量の削減を目指して取り組んでいる。エネルギー消費量は着実に削減できており、本年度の目標である2022年度比3%削減は達成できる見通しである。

② 機器更新時に省エネ機器を設置するとともに、キャンパス内の電灯のLED化を更に促進し、エネルギー消費量を削減した。機器更新時にはエネルギー消費量の削減を念頭に省エネ機器に更新する事を進めた。また電灯のLED化は、教室の更新は高梁キャンパスにおいてほぼ完了しており、今年度では部分的な更新に留まった。

③ 環境教育等による啓蒙活動を充実し、教職員および学生の省エネ意識を向上させ、エネルギー消費量削減行動を推進した。環境の話題を取り扱う授業において教育を推進した。

④ 2030年温室効果ガス排出量-46% (2013年度比)に向けた取組を行った。省エネ活動の推進及び省エネ機器の導入、再エネの活用などを通じて、目標達成を目指した。

(2) 環境マネジメントシステム (EMS) 活動の確実な実施

① 全キャンパスにおけるEMS活動の推進と情報収集に継続的に取り組み、環境負荷の低減を目指した。年2回、各専攻・学科から情報収集を継続的に行った。

② 教授会やガールーン掲示板を通じて、全学的にEMS活動の周知と取り組みの推進、活動実績の公表を行った。

(3) EMS教育の推進

新入生をはじめとし、全学生に対してオリエンテーション時などの機会を活用してEMS教育を実施し、学生のEMS活動への参加を促進した。春学期、秋学期の新入生・在学生オリエンテーション時にEMS教育を実施した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

環境マネジメントについては、例年通りデータの収集と解析を行った。新入生と在学生に対するEMS教育は継続して実施しており、環境意識の醸成に繋がっていると思われる。

〈次年度への課題〉

環境マネジメントの取り組みを継続して推進し、年平均1%以上のエネルギー消費の削減を達成する。新入生と在学生に対するEMS教育を継続して行う。

南あわじ志知キャンパスの教室及び体育館の電灯LED化が進んでいないので、設備更新を進めエネルギー消費量の削減を行う。

2. 職能開発の強化

FD・SDの充実

〈今年度の取り組み状況〉

建学の理念を踏まえ、教育目的および教育目標（ブランドビジョン）の実現に向けて、FD・SD活動を推進してきた。授業内容や教育方法の改善に取り組むとともに、教育研究活動等を

適切かつ効果的に展開するため、組織的な研修機会を設けた。今年度は以下の研修会を実施し、教職員の資質向上および能力開発を図った。

1. 全学FD・SD研修会

[日時]

令和7年9月24日(水) 14時00分～15時30分

[方法]

Microsoft Teamsによるオンライン開催

[対象者]

吉備国際大学に所属する教職員及び大学院博士後期課程在学学生

[目的]

現在、生成AIは急速に進化しており、その応用範囲はますます拡大している。こうした変化は、大学における教育および研究の現場にも影響を及ぼしており、利用指針に基づく適切な活用が求められている。本研修会では、生成AIに関する基礎的知識、適切な使用方法および関連リスクについて理解を深めるとともに、具体的事例を通じて、責任ある効果的な活用の視点を提供する。本研修会を通じて生成AIへの理解を一層深め、今後の教育活動に活用することで、本学の教育目標（ブランドビジョン）の実現に寄与することを目的とする。

[内容]

講演テーマ 生成系AIについての利用指針

講師 佐藤匡氏（情報教育センター分室長、外国語学部 外国学科 教授）

講演テーマ 生成AIの利活用と留意点

講師 小林朝雄氏（吉備国際大学 非常勤講師、元くらしき作陽大学 教授）

2. 学科別FD研修会

[日時]

2025年度秋学期

[方法]

研修内容は、各学科・専攻のFD・SD推進委員が学科長・専攻長と協議のうえ検討し、各学科・各専攻の状況を踏まえ、特色に応じたFD研修会を以下の手順により実施した。

(1) 実施案の提出

研修内容が決定した後、各学科・専攻のFD・SD推進委員は、同委員会へ実施案を提出

(2) 学科別FD 研修会の実施

実施案に沿って学科別FD研修会を開催

(3) 実施報告の提出

研究会の実施後、各学科のFD・SD推進委員は同委員会へ実施報告を提出

※欠席者に対しては動画資料や資料配布等の代替措置を講じ、全教員が参加できるように配慮

[対象者]

各学科の教員

[目的]

学科別FD研修会を開催し、学科（人間科学科は専攻）の特色に沿った内容について組織的な研修を実施し、教育および授業内容・方法等の改善を目的とする。

[内容]

各学科の実施内容は以下の通り。

- ・経営社会学科
テーマ 教学IRデータにもとづく、学習成果の把握と教育活動の点検
 - ・スポーツ社会学科
テーマ 新カリキュラムにおける初年次教育について
 - ・看護学科
テーマ 看護学教育モデル・コア・カリキュラム改定に伴う本学科のDPや独自性の検討
 - ・人間科学科
テーマ 人間科学科における学科共通科目の効果的な運用について
 - ・アニメーション文化学科
テーマ ゼミ等における欠席しがちな学生に対する指導法と就職支援について
 - ・地域創成農学科・海洋水産生物学科・志知キャンパス事務（合同開催）
テーマ 進む少子化を見据え、農学部教育魅力を高めるための方策を議論しよう
 - ・外国学科
テーマ 心身の不調を抱える学生への指導・支援方法
- 以上の通り、研修会を実施した。さらに、SD研修の一環として、研究推進部門が中心とな

り、コンプライアンス教育および研究倫理教育研修会を開催した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

春学期には全学FD・SD研修会を、秋学期には学科別FD研修会を開催した。全学FD・SD研修会では大学全体に共通する課題を取り上げ、学科別FD研修会では各学科・各専攻の特色に応じた課題をテーマとした。これらの組織的な研修機会を通じて、教職員の資質向上および能力開発に努めた。

全学FD・SD研修会では、生成AIに関する基礎的知識、適切な使用方法および関連リスク等についての理解を深めることを目的として、具体的な事例を交えた研修を実施し、今後の教育活動への活用を促した。学科別FD研修会では、専門分野の特性を踏まえ、各学科・各専攻の特色に応じた研修会を開催した。各学科・各専攻のFD・SD推進委員が学科長・専攻長と協議のうえ、テーマ・内容・方法を検討し実施した。また、実施案および実施報告書はFD・SD推進委員会において共有し、今後の研修の改善に資するよう活用している。

以上のとおり、教職員の資質向上および能力開発に資する研修会を実施した。

〈次年度への課題〉

建学の理念、教育目的および教育目標(ブランドビジョン)を実現するため、FD・SDの充実を図る。職能開発の強化については、FD・SD推進委員会が中心となり、教育研究および授業の改善、本学の特色である地域連携・地域貢献、国際化、さらには大学運営に必要な知識の習得および情報共有等に関して、全学または学科別の組織的な研修機会を設け、教職員の資質および能力の向上に取り組んでいく。

3. 人権・安全への配慮の充実

労働環境の整備、充実

〈今年度の取り組み状況〉

私立学校法の改正に伴い、内部統制システムの体制整備を行う一環として「公益通報等に関する規程」を一部改正した。また、規程に則り、コンプライアンス窓口を法人本部総務部総務課及び大学庶務部庶務課に設置して体制を整備した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

「公益通報等に関する規程」を一部改正するとともに、あらたに「コンプライアンス推進規程」を制定した。また、それらの規程に則り、窓口の設置、運営を適切に行っている。今年度は、窓口への通報はなかった。

〈次年度への課題〉

引き続き、コンプライアンス窓口を適切に機能させるとともに、可能な限り通報の必要がないよう労働環境の整備、充実に努める。

人権関連の研修の充実

〈今年度の取り組み状況〉

令和7年度岡山県大学人権・同和教育懇談会に参加し本学の取り組みについて報告を行うとともに他大学の状況について情報収集を行い、人権教育推進委員会で学内の情報共有を行った。

また、キャンパスハラスメントについても例年どおりポスターによる啓発活動を行うとともに、ハラスメント防止研修会において相談対応法などの内容を含めることで、教職員全員がハラスメント相談員という意識を持ち、ハラスメントか否かにこだわらない相談対応を心がけている。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

人権教育については、毎年研修会を実施し、教職員に意識を持たせることが必要である。キャンパスハラスメントについても教職員全員がハラスメント相談員という意識を持ち、ハラスメントか否かにこだわらない相談対応を心がけることが評価できる。

〈次年度への課題〉

人権に関して配慮が必要な事項が多様化する中、学生及び教職員に対して適切な教育、研修が必要となってきている。本学でも障がい学生、LGBTQ等の学生、外国人留学生など、多様な

学生を受け入れており、必要な対応ガイドラインなどの整備や人権教育により、差別のない環境づくりが今後の課題となる。

引き続き、キャンパス・ハラスメントの防止、排除に向けた啓発活動を行い、適切に対応ができるようにする。

4. 法人部門との連携の円滑化

管理運営機関の連携と相互チェック

〈今年度の取り組み状況〉

改正私学法及び新寄附行為に則り、法人の管理運営機関を適切に整備し運営した。理事会には学長が理事として就任し、学園の意思決定において大学を代表して意見を述べた。また、学園協議会により設置校間に共通する重要事項を協議し、相互の連携強化と業務の円滑化を図った。大学協議会は総長が招集し、議長となって大学の教学に関する重要な事項の決定について理事会との意見調整を行い意思決定の円滑化を図った。

さらに、これらの理事会、評議員会、学園協議会及び大学協議会等の構成により相互チェック体制を整備し、適切に機能させた。

監事は、理事会及び評議員会に出席して学園の業務及び財産の状況や理事の職務の執行状況を把握するとともに意見を述べる。その他、会計監査人や内部監査部門と連携して監査業務を実施し、その結果を理事長に報告した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

6月開催の定時評議員会において、理事、監事、評議員及び会計監査人を選任し、新たな管理運営体制を適切に整備した。

定時評議員会のほか、理事会、評議員会を必要に応じて開催し、学長が理事として、校長が評議員としてそれぞれ出席し、学園の意思決定において設置校を代表して意見を述べている。

また、5月と12月に学園協議会を開催し、設置校間に共通する議題を協議するとともに連携強化を図っている。さらに、これらの会議体を適切に運営することで相互チェック機能を果たしている。

監事は、理事会、評議員会に出席するとともに、常勤監事1名は、法人本部に週2日出勤して、監査計画に基づき監査している。監査の実施にあたっては内部監査部門である法人本部総務部や会計監査人と連携して業務を行っている。

〈次年度への課題〉

次年度も引き続き、それぞれの管理運営機関を適切に運営するとともに、法人部門と設置校の管理運営機関の連携に努め、意思決定の円滑化と相互チェックを機能させガバナンス強化に努めていく。

5. 財政基盤の確立

中期的な計画に基づく財務運営と安定した財務基盤の確立

〈今年度の取り組み状況〉

決算をもとに中期財務計画を見直し、学園の今後の財務状況の推移を的確に把握する。また、計画にもとづき安定した財務基盤の確立に取り組んだ。

学納金のほか外部資金獲得による収入の増加、人件費及び経費の削減による支出の抑制を推進し、収支バランスの改善を図った。

特に、学納金収入について、大学のブランディングにもとづいた広報活動を展開するとともに、より魅力ある学部学科への再編を含めた募集戦略、高梁市・順正学園特別奨学金制度をはじめとする本学独自の学生支援の充実等により、定員確保を目指して学生募集を強化した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

令和6年度決算をもとに第二期中期財務計画を策定した。収支改善の取り組みとしては、各設置校のブランディングの推進及びそれに基づく広報活動の強化、また、独自の奨学制度や応援学費など学生支援を充実し、定員確保を目指して学生募集に取り組んでいる。

令和8年度には吉備国際大学農学部にあくアグリーフィールド学科を開設するとともに、地域創成農学科を農業資源生物学科へと名称変更して学部を新体制とするなど、より魅力ある大学づくりに取り組んでいる。

〈次年度への課題〉
収支バランスを確保するために、引き続き、全設置校において学生定員充足による学納金収入の増加が喫緊の課題である。学園の安定した財務基盤の確立や経営改善に向けて、令和7年度決算をもと第二期中期財務計画を修正し、学園の財務状況の見通しを明らかにする。
6. 適正な会計処理の実施
職員の知識向上
〈今年度の取り組み状況〉
学校法人会計基準に準拠し、順正学園経理関係諸規程に則った適正な会計処理を行う上で必要な知識向上を図るため、会計課内で研修会を実施した。 また、今年度より「学校法人会計基準の一部を改正する省令」が施行されるので、新基準に対応した適切な会計処理が行えるよう、関係資料を熟読して会計担当職員の知識向上に努めた。
〈今年度の結果についての点検・評価〉
私立大学協会が行う経理担当者研修会参加者が報告会を行って情報共有する事や、課員が自己研鑽を行う事で、順正学園経理関係諸規程に則った適切な会計処理を概ね行えている。
〈次年度への課題〉
より一層確実かつ迅速に会計処理が行えるよう、課内のチェックを厳格に行う。 また、課内の情報共有を徹底し各種の要望に適切に対応できるよう努める。
会計監査の厳正な実施
〈今年度の取り組み状況〉
公的研究費については、10月～12月に常勤監事による科学研究費助成事業等に関わる経理関係全ての証憑書類の確認を含めた厳格な監査及び報告を受けた。それを受けて12月下旬に修正及び対応を報告した。
〈今年度の結果についての点検・評価〉
公的研究費について、監事の監査報告を受けて適切に対応した。
〈次年度への課題〉
機器備品の管理について、棚卸を行い資産管理の適正化に努める。 公的研究費について、適正な会計処理に努める。
諸規定に則った適正な会計処理
〈今年度の取り組み状況〉
会計処理を行うにあたり、学校法人会計基準、順正学園経理諸規程及び研究費マニュアル等に沿った大学の会計処理ルールの共通認識の徹底に努めた。 その点を踏まえて、今年度当初に学校法人全体の予算編成方針に従って各部門で目的別に編成した予算をシステムに登録した上で、補正予算編成を経て適切な予算執行を行えた。
〈今年度の結果についての点検・評価〉
概ね順正学園経理諸規程に沿った会計処理が行っていた。 一部、公的研究費に係る監査報告にもあった指摘事項については厳密に対応する必要がある。
〈次年度への課題〉
次年度も、学校法人予算編成方針に従い、大学各部門において目的に見合った予算作成を行い適切な執行を行えるよう努める。 また、研究費使用マニュアルの更新を行う。

VI. 内部質保証について

1. 内部質保証体制の確立

内部質保証体制図に基づくPDCAサイクルの仕組みの確立

〈今年度の取り組み状況〉

(1) 中期目標・中期計画を起点としたPDCAサイクルの実現

令和5年3月に、令和5年度から令和9年度までの第3期中期目標・中期計画書を策定し、実行に移して、本年度が3年目となる。第3期中期目標・中期計画書では、大学機関別認証評価の評価項目に沿った項目で目標を設定し、中期目標・中期計画を各年度の事業計画に落とし込み、以下のようなPDCAサイクルを実現して内部質保証体制の確立を図っている。各年度事業計画(P)⇒計画実行(D)⇒自己点検・自己評価(C)⇒改善指示(A)⇒翌年度事業計画策定(P)

(2) 自己点検・自己評価の実施

自己点検・自己評価会議を4月に実施し、学長・副学長が前年度の取り組み状況や結果の点検・評価、次年度への課題等について発表した後、学部学科・部門ごとに改善案を検討している。また、外部評価委員との意見交換の場を設け、外部評価委員の評価を受けた自己点検・自己評価報告書と自己点検・自己評価会議で議論した改善案を基に、翌年度の事業計画を立てる仕組みを構築している。

(3) アセスメントプランによる教育改善の実現

アセスメントプランの実施にあたっては、教育イノベーション課を中心に、計画に基づき各種アンケート、データの収集・分析等を実施し、担当委員会での検証を経て内部質保証委員会に報告され、必要な改善指示が内部質保証委員会から担当委員会、各学科に対して発出されている。改善指示を受けて改善計画が内部質保証委員会に提出されるとともに、実施された結果について報告されている。

また、教学IRが収集したデータは、各学科や部局が教育改善を検討する際に活用できるように、ガルーン(学内グループウェア)内に共有フォルダ(情報プラットフォーム)を置き、情報の共有化を図っている。

内部質保証委員会の審議状況(令和7年度)

令和7年4月18日～4月23日(第1回)

- ・令和6年度 自己点検・自己評価報告書を受けての学科別議論内容について

令和7年5月7日～5月22日(第2回)

- ・令和6年度 自己点検・自己評価報告書について
- 外部評価委員からの評価結果を含めた報告書について
- ・令和7年度 事業計画(案)について
- 内部質保証委員会による改善指示に基づく事業計画(案)について審議

令和7年6月4日(第3回)

- ・人間科学科理学療法学専攻・理学療学科並びに人間科学科作業療法学専攻
- ・作業療学科の「令和6年度教員資格及び教育内容等の自己評価書」の評価について
- ・内部質保証委員会(3/5)からの改善指示に伴う改善計画について
- ・教育課程編成に係る高梁市・商工会議所との懇談会の開催について
- ・教育課程編成に係る学生との意見交換会の開催について

令和7年8月6日(第4回)

- ・社会科学部経営社会学科のカリキュラム変更に伴う吉備国際大学学則の一部変更について
- ・社会科学部スポーツ社会学科のカリキュラム変更に伴う吉備国際大学学則の一部変更について

て

- ・アセスメントプランに基づく学修成果の可視化について
- ① 【kiuiドリル】ベーシック入学前教育教科別全体実績について
- ② 異動率の推移
- ③ 学位授与率の推移
- ④ 国家試験合格率の推移
- ⑤ 科目履修率：教養科目履修率
- ⑥ 単位修得率
- ⑦ 2025年度春学期の入学時アンケートの実施結果について
- ⑧ 2025年3月の卒業時アンケートの実施結果について

令和7年10月8日(第5回)

- ・学修成果可視化に関するデータの学科での検証結果報告について

令和7年12月3日(第6回)

- ・令和7年度 自己点検・自己評価の実施について
- ・令和7年度の学長からの改善指示について

令和8年2月4日(第7回)

- ・アセスメントプランに基づく学修成果の可視化について
令和8年3月4日(第8回)
- ・令和7年度の学長からの改善指示に伴う『改善経過報告書』の検証について
- ・アセスメントプランに基づく集計データの検証について

〈今年度の結果についての点検・評価〉

アセスメントプラン実施計画に基づく点検と検証が計画通り実行され、内部質保証委員会による改善指示と改善計画策定という教学マネジメントが機能し、内部質保証の体制が確立しつつあることは評価できる。また、教学IRデータをガルーン内の共有フォルダに蓄積して情報の共有化を図ることができたことは評価できる。

〈次年度への課題〉

「吉備国際大学アセスメントプラン」に基づく「アセスメントプラン実施計画」は、見直しを行いながら、確実に実施できるようになっている。また、検証結果から導き出された“課題”を“改善”へと繋げるための見直しも図っている。今後は各委員会での議論を活性化し、内部質保証委員会の改善指示のもと改善案を策定し実行する。

IRを活用した十分な調査・データの収集と分析の実施

〈今年度の取り組み状況〉

教育イノベーション課で新たに分析するためのツールを導入し、大学が保有する各種データを分析し、教学マネジメント確立に向けて必要な情報提供を進めている。また、報告されたIR情報を改善に活用できるよう、IR情報の共有と一元化を図り、教学IRが収集したデータを共有フォルダ等に蓄積し、各学科や部局がカリキュラムや教育改善を検討する際に、いつでもデータが取り出せるような「情報プラットフォーム」として、ガルーン内に共有フォルダを置き、IRに関するデータを蓄積して情報の共有を図っている。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

調査やデータ収集については、データが蓄積されてきている。

〈次年度への課題〉

今後蓄積されたデータを分析し、改善に繋げることが課題である。

VII. 地域連携・地域貢献の推進について

1. 地域連携・地域貢献の推進

地域貢献推進センター

〈今年度の取り組み状況〉

- ① 毎月、地域貢献推進センター会議を開催し、高梁キャンパス、南あわじ志知キャンパス、岡山キャンパス、3つの地域連携センターとの情報交換を密に行い、地域連携・地域貢献活動を推進した。
- ② 地域貢献教育研究活動助成金を3件の課題に対して配分し、教員・学生等による地域貢献活動を支援した。
- ③ 令和8年2月14日に、昨年度に引き続き高梁総合文化会館で吉備国際大学地域連携・地域貢献活動報告会を開催した。報告会では、吉備国際大学と高梁市から連携事業を報告すると共に、3件の活動事例報告を行った。また、「大学と地域の連携強化に向けて」という演題で、展望講演を行った。
- ④ 各教員から、令和7年度の地域連携・地域貢献活動について報告を提出してもらい、地域連携・地域貢献活動記録を作成した。
- ⑤ 地域連携・地域貢献活動に関する情報を大学ホームページのNewsおよび地域連携センターのページにて、情報発信をした。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ① 地域貢献推進センター会議を毎月開催し、各キャンパスの地域連携、地域貢献の取り組み

に関する情報共有をきめ細かく行うことができた。

② 吉備国際大学地域連携・地域貢献活動報告会は今年度で3回目の開催となった。本年度は学生2名を含め市及び大学からの報告及び今後の展望について講演を行い、高梁市と大学の意思疎通が深まった。高梁市石田市長、福本教育長からも今後の展望に賛同する非常に前向きな意見の表明を頂いた。

③ ボランティアセンターをはじめ、各教員、学生サークルが多くの地域連携・地域貢献活動を行った。

④ 地域連携・地域貢献活動に関する情報発信をしているが、学外に加え学内にもさらなる強化が必要である。

〈次年度への課題〉

① 各キャンパス地域連携センターの活性化が課題である。

② 地域連携・地域貢献活動報告会は、今後も継続して開催すると共に、今回の高い評価や成果を引き継いだ積み重ねる運営が必要である。学内他キャンパスからの参加による地域連携活動の推進を検討したい。

③ 地域貢献教育研究活動助成金は令和8年度も継続し、教員間での共有と共に教員が担う地域貢献活動の活性化を目指す。

④ 多くの地域連携・地域貢献活動が行われており、毎年活動結果を報告してもらっているが、活動の整理が出来ていない。次年度以降も活動の整理に取り組む。

⑤ 地域連携・地域貢献活動の発展のために、地域のニーズと学生のニーズ、大学のシーズを繋ぐ仕組みを検討する必要がある。一つの案として他地域に事例がある地域連携センターや地域共創プラットフォームを参考にボランティアセンターを発展させ地域活動のコーディネートや運営の強化を図るなどがある。

連携協力協定の締結

〈今年度の取り組み状況〉

① 今年度、自治体との連携協力協定の締結には至っていない。

② 高梁市および南あわじ市と産学官連携に関する情報交換会議を行った。

③ 高梁市、高梁商工会議所と産学官連絡会議を開催した。また、南あわじ大学連携協議会に参加し、情報交換をしている。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

① 自治体と連携協力協定を締結することができなかった。地域との連携を一層推進する必要がある。

② 高梁市および南あわじ市と産学官連携に関する情報交換会議を行ったが、情報交換に終わっており、具体的な施策に結びついていない。

〈次年度への課題〉

大学の教育・研究と地方創生が結びつくよう、産学官民で地域共創プラットフォーム等の設置を関係者に提案する等具体化を推進する必要がある。

地域課題解決への寄与

〈今年度の取り組み状況〉

① 定期的に、高梁市、高梁商工会議所と産学官連絡会議を開催し、地域課題解決に向けて協議した。

② 南あわじ大学連携協議会に参加し、情報交換をした。

③ 各教員がそれぞれの専門を元に様々な分野で地域課題解決に取り組んでいる。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

① 定期的に、高梁市、高梁商工会議所と産学官連絡会議を開催し、地域課題解決に向けて協議しているが、具体的な施策の実施までには至っていない。

② 各教員がそれぞれの専門を元に様々な分野で地域課題解決に取り組んでいる。多くの活動に取り組んでいるが、活動の実績評価ができていない。

〈次年度への課題〉

① 地域課題の抽出と課題解決策の検討において、大学と地域の情報交換を密に行い、検討する場を設ける必要がある。現状では、情報交換にとどまっている。

② 各教員がそれぞれの専門を元に様々な分野で地域課題解決に取り組んでいるが、その成果の見える化を検討する必要がある。

地域連携・地域貢献活動の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ① 「地域連携・地域貢献の基本方針」を基にして、全学部、全学科が地域連携活動及び地域貢献活動に取り組んだ。
- ② 半数以上の専任教員が地域連携・地域貢献に取り組むという目標に対して、現状、半数以上の専任教員にまでは至っていない。実施した地域貢献活動については、各教員から地域連携・地域貢献活動について報告を提出してもらい、地域連携・地域貢献活動記録を作成した。
- ③ ボランティアセンターを核として、地域貢献ボランティア活動を推進した。
- ④ 地域貢献教育研究助成金で、3件の教育研究活動を行った。
- ⑤ 大学コンソーシアム岡山事業「吉備創生カレッジ生涯学習講座」へ4講座を提供した。また、6月1日(日)に開催された「日ようび子ども大学」、7月12日(土)の奉還町商店街の「エコナイト」へ参加した。
- ⑥ 高大連携活動として6月8日(日)に英語スピーチコンテストを開催した。また、高梁高校と新たな連携事業に向けての検討をしている。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ① 「地域連携・地域貢献の基本方針」を基にして、全学部・学科が地域連携活動及び地域貢献活動に取り組み、多くの活動を実施することができた。実施した地域貢献活動については、各教員から地域連携・地域貢献活動について報告を提出してもらい、地域連携・地域貢献活動記録を作成した。
- ② ボランティアセンターを核として、地域貢献ボランティア活動を推進し、多くの学生がボランティア活動に参加した。
- ③ 地域貢献教育研究助成金で、3件の教育研究活動を行った。
- ④ 大学コンソーシアム岡山の事業「吉備創生カレッジ生涯学習講座」「日ようび子ども大学」「エコナイト」へ参加した。
- ⑤ 英語スピーチコンテストには21名の高校生が参加した。

〈次年度への課題〉

- ① 引き続き「地域連携・地域貢献の基本方針」を基にして、全学部・学科が地域連携活動及び地域貢献活動に取り組む。
- ② 地域貢献教育研究助成金は令和8年度も継続し、教員が担う地域貢献活動の活性化を目指す。
- ③ 多くの地域連携・地域貢献活動が実施されており、毎年活動結果を報告してもらっているが、活動の整理が出来ていない。次年度以降も活動の整理に取り組む。
- ④ 地域連携・地域貢献活動の活性化のために、地域のニーズと学生、大学のシーズを繋ぐ仕組みを検討する必要がある。例えば、他地域に事例がある地域連携センターや地域共創プラットフォームを参考にボランティアセンターを発展させ地域連携・地域貢献活動のコーディネートや運営の強化を図るなどの案がある。

2. 大学の持つ知の地域への還元

公開講座の開催

〈今年度の取り組み状況〉

高梁キャンパスでは、まちなかゼミナール(前期)8講座、(後期)9講座を開講した。また、南あわじ志知キャンパスの地域創成生涯学習講座を9講座開講した。開講内容としては、体や心の健康促進や食についてなど、高齢化する地域のニーズに沿った、地域貢献講座となっている。また、国際化については、まちなかゼミナール前期・後期ともに英語の講座を開講した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

本年度は、26講座を開講することができた。開講講座の内容については、体や心の健康促進や食についての講座など、高齢化する地域のニーズに沿った講座を開講したことから、昨年度に比べて受講者が増加した。

<p>〈次年度への課題〉</p> <p>次年度も継続して公開講座を開講する。また、地域のニーズに合わせた講座を開講するとともに、語学や国際化、街づくりに特化した講座など、さらに「地域連携・地域貢献」および「国際化」に関係した内容の開講を検討する。</p>
<p>出張講義等</p>
<p>〈今年度の取り組み状況〉</p> <p>① 本学ホームページにて、高等学校向けの出張講義一覧の掲載を継続して実施している。 ② 国際理解教育、探究学習への支援など、小・中・高等学校と連携した授業を実施した。 ③ 10月29日(水)、岡山キャンパスで、高校生達が大学の英語多読とディスカッション英語の授業を体験した後、恒例のハロウィンパーティーにて留学生を交えた交流活動を実施した。 ④ 11月5、6日(水、木)には、高梁キャンパスにて、市立高梁中学校の職場体験(職場探求学習高梁JOB SEARCH)を受け入れた。 ⑤ 令和8年2月19日(木)に有漢学園の中学生と本学留学生との交流会を学生会館KIUBで開催した。</p>
<p>〈今年度の結果についての点検・評価〉</p> <p>① 高校からの依頼により出張講義を行っており、ほぼすべての依頼に対応することができた。 ② 出張講義以外にも、中高生が来学し、大学生との交流活動を実施することができた。</p>
<p>〈次年度への課題〉</p> <p>① 来年度も高等学校の希望に合うような出張講義を継続する。 ② 高等学校探究授業への支援方法を検討する必要がある。 ③ 留学生の学びの場として、小中高生への国際理解教育、英語教育などを推進する。</p>
<p>3. 地域貢献人材の育成</p>
<p>フォーラム等の開催</p>
<p>〈今年度の取り組み状況〉</p> <p>学部単位でフォーラム、講演会等を主催して開催する目標を立てたが、実施することができなかった。</p>
<p>〈今年度の結果についての点検・評価〉</p> <p>学部単位でフォーラム、講演会等を実施することができなかった。</p>
<p>〈次年度への課題〉</p> <p>各学部の意見を踏まえ学部単位でのフォーラム、講演会等開催や他のより効果的な地域貢献人材の育成に関する取り組みを目指す。</p>
<p>地域課題解決型授業</p>
<p>〈今年度の取り組み状況〉</p> <p>① カリキュラム改定に合わせて、全学科が地域課題解決人材を育成する授業を2科目以上、専門教育科目の中で開講する目標であったが、実施できなかった。 ② 「地域連携・地域貢献」、「国際化」の2つの取り組みのもと、カリキュラム改正に併せ、全教科での地域連携・地域貢献と国際化との関連を明示する目標であったが、実施できなかった。</p>
<p>〈今年度の結果についての点検・評価〉</p> <p>全学科が地域課題解決人材を育成する授業を2科目以上、専門教育科目の中で開講する事はできなかった。「地域連携・地域貢献」、「国際化」の2つの取り組みのもと、カリキュラム改正に併せ、全教科での地域連携・地域貢献と国際化との関連を明示することはできなかった。</p>
<p>〈次年度への課題〉</p> <p>今年度取り組んでいる現在のカリキュラムにおける各授業での「地域連携・地域貢献」、「国際化」の組み込みにおける課題や展望を整理し、今後の方向を検討する。</p>

地域貢献人材育成プログラム
〈今年度の取り組み状況〉
地域課題解決の担い手を養成・輩出する「地域貢献人材育成プログラム」を学生および社会人向けに開設する目標であったが、実施できなかった。履修証明プログラムに関する規程の制定と履修証明プログラムで「地域貢献人材育成プログラム」を開設することを検討した。
〈今年度の結果についての点検・評価〉
地域課題解決の担い手を養成・輩出する「地域貢献人材育成プログラム」を開設することはできなかったが、来年度から、履修証明プログラムを開設する予定である。市役所や地域事業所など地元の官民の取り組みの現状や意向の把握が十分には行えていない。
〈次年度への課題〉
来年度から、履修証明プログラムの受講者を受け入れる予定であることから、受け入れ体制を整備する必要がある。加えて、市役所や地域事業所など地元の官民の取り組みの現状や意向の把握に努め「地域貢献人材育成プログラム」の開設を検討する。

VIII. 国際化の推進について
1. 国際化に向けた科目内容の充実
国際化に向けた英語学習の充実と異文化・国際事情理解の推進
〈今年度の取り組み状況〉
① 2022年度から全学共通教養科目として導入した人間力育成科目群(きびこく学、SDGs概論、グローバルスタディーズ入門、課題解決演習)を実施した。 ② 外国学科以外の学科においては、複数の英語のネイティブスピーカー(外国学部専任教員と非常勤講師)による英語教育(必修3科目、選択3科目)を実施した。また、「基礎英語Ⅰ・Ⅱ」について、本年度より科目内容を検討し充実を図った。 ③ 英語以外の外国語や文化を学ぶ科目として、「中国語と中国文化Ⅰ・Ⅱ」、「フランス語とフランス文化Ⅰ・Ⅱ」、「ドイツ語とドイツ文化Ⅰ・Ⅱ」を開講した。
〈今年度の結果についての点検・評価〉
英語学修を中心として、複数の言語や文化について学ぶことができる教養科目群を開講していることは評価できる。ただ、必修科目を除いて履修者が少ないため、今後積極的に取り組む学修態度の涵養が必要である。
〈次年度への課題〉
外国語学部以外の学部(高梁キャンパス・南あわじ志知キャンパス)の英語教育については、語学実践力養成に向けた教養科目の語学教育について見直しを検討していく。併せて本学の教育の特色である「地域連携・地域貢献」と「国際化」を軸としたグローバル教育プログラムを検討する。
海外留学・短期研修の促進
〈今年度の取り組み状況〉
① 海外留学・短期研修は、主に外国語学部の学生を対象とするプログラム(スタディー・アブロードⅠ～Ⅳ)を実施している。また、令和8年度からの経営社会学科及びスポーツ社会学科のカリキュラムに短期留学の科目が追加された。 ② アメリカ・ブラジル研修団をコロナ以前と同様のスケジュールで受け入れることができ、学生との交流も積極的に行われた。また、ライト大学研修も再開することができ、3名の学生及び1名の教員を派遣した。
〈今年度の結果についての点検・評価〉
海外留学・短期研修は、外国語学部に加えて社会科学部にも導入された。3名の参加枠が埋まるか心配したが、1名が研修先変更に応じたため、結果的に催行することができた。今後は、他学部においても参加が可能なプログラムの促進を図る必要がある。

<p>〈次年度への課題〉</p> <p>海外留学・短期研修は、外国語学部に加えて社会科学部も可能となった。今後は他の学部についても海外留学・短期研修プログラムを充実させる必要がある。併せて短期留学・研修先の確保及び参加者の募集方法を検討する必要がある。</p> <p>また、1人でも多く参加者が増えるよう、研修体験談等の発表の機会を増やし、周知を図ることが重要である。</p>
<p>留学生に対する学習支援の充実と生活環境の整備</p>
<p>〈今年度の取り組み状況〉</p> <p>① 留学生に対しては、高梁キャンパスの日本語科目クラスを、本年度から、よりきめ細かい指導が行えるよう、3クラスから5クラスに増やした。1クラスあたり20名以下の少人数制に変更することで、日本語教育の充実を図った。また、正課の日本語関係科目のほか、ラーニングサポートセンターで「日本語能力試験N2対策講座」を春学期・秋学期に毎週2コマ開講して日本語の学修を支援するとともに、日本人学生と留学生が自由に話し合える「おしゃべりカフェ」を毎月開催して国際交流を深め、グローバルな視野で考える力を育てている。留学生の日本語能力試験の今年度第1回目学内申請者は42名(N2-30名、N1-12名)、うち合格者はN2が1名、N1が2名であり、対象者に補助金を支給した。</p> <p>② 生活基盤の安定化を図るための種々の支援(市民生活・住宅・アルバイト情報の提供等)を行った。</p>
<p>〈今年度の結果についての点検・評価〉</p> <p>種々の日本語学修の機会を用意し、留学生の日本語能力の向上に努めたことは評価できる。また、生活基盤の安定化を図る各種の支援についても評価できる。日本語能力試験(冬期)を受験した学内申請の留学生が全員不合格となってしまった。今後は、留学生のニーズを把握し、的確な情報提供を行う必要がある。</p>
<p>〈次年度への課題〉</p> <p>早期のN2の取得者が増えるように検討していく。生活環境の整備については、生活基盤の安定化を図る支援(市民生活・住宅・アルバイト情報の提供等)の促進を図る。また、留学生の母国語対応による支援体制の充実を図るとともに、引き続き留学生のニーズを把握し、学生が求める情報を提供していきたい。さらに、留学生の母国語対応による学修支援体制としては、今後は、他国(インドネシア、ベトナム、ネパール等)の言語への対応を検討する必要がある。次年度から学内申請を取りやめ、個人申請のみにする事で受験者が増えると期待できる。</p>
<p>国際社会で活躍できる職能教育と留学生に対する就職支援</p>
<p>〈今年度の取り組み状況〉</p> <p>1年次必修科目「キャリアデザインⅠ」において留学生クラスを開講し、進路選択に繋がる自己理解やコミュニケーション力の向上を図ってきた。また、行政書士や留学生対象の就職支援企業のスタッフを外部講師として招聘し、日本の生活や法律、就労制度について正しい情報や知識を教授した。</p> <p>また、令和6年度から取り組んでいる「KIUグローバル人材養成留学生就職促進プログラム」に基づく積極的なキャリア教育や情報提供、就職ガイダンスを行うとともに、就職に関する個別面談対応を強化した。特に3年次からは、本格的な就職活動に向けて、自己分析、エントリー方法、履歴書の書き方、面接対策について学習する機会を設けるとともに、学内における業界研究・インターンシップ等説明会、企業単独説明会への積極的な参加を促した。</p>
<p>〈今年度の結果についての点検・評価〉</p> <p>1年次必修科目「キャリアデザインⅠ」において招聘した就職支援企業のスタッフによる講義は大変わかりやすく、留学生にとって有意義な内容であった。日本における生活のみならず、卒業後の進路や就労方法の選択について考える機会となった。</p> <p>また、「KIUグローバル人材養成留学生就職促進プログラム」は、教務課、経営社会学科担当教員と連携して進め、対象となった学生の職業意識や就職活動に関する知識・技術の向上に繋がった。</p> <p>キャリアサポートセンターでは、キャリアカウンセラーの資格をもつ外国人スタッフを中心に、留学生からの多様な相談に応じ、各種書類の添削や面接練習にも対応してきた。留学生からの相談や事前予約が増加した。</p>

〈次年度への課題〉
引き続き、キャリア教育科目「キャリアデザインⅠ」の留学生クラスにおいて、コミュニケーションをはじめとする職能教育や就職支援を強化するが、日本語の理解が不十分な学生も多く、授業前後における学科教員の支援が必須である。 「KIUグローバル人材養成留学生就職促進プログラム」の対象学生が就職する年になるため、日本企業への就職を支援すると共に、プログラムの成果と課題を検証する必要がある。
2. 国際交流の充実
日本人学生と留学生の相互理解の深化による国際人の育成
〈今年度の取り組み状況〉
10月に国際フェスティバル「1Day Asia in たかはし」を開催した。実行委員として準備から当日の運営まで日本人学生と留学生が協働し、盛況に終えることができた。
〈今年度の結果についての点検・評価〉
留学生と日本人学生が同じ目標を持ってひとつのイベントに取り組むことで、より一層、相互理解を深めることができた。
〈次年度への課題〉
アルバイトで多忙な留学生が多いことから、プロジェクトメンバー確保のためには、準備や打ち合わせの時間を調整することが必要である。
外国人との各種の交流活動を通じた国際感覚の醸成
〈今年度の取り組み状況〉
経営社会学科大西研究室が「有漢イングリッシュキャンプ2025」を開催した。小学生から大人まで幅広い世代が参加し、地域と留学生・日本人学生が一体となって学び、交流を深めた。
〈今年度の結果についての点検・評価〉
有漢学園の中学生と留学生が英語でコミュニケーションをとりながらゲームをするなどして交流を図ることができた。留学生も母国の音楽や踊りでその魅力を伝えていた。
〈次年度への課題〉
留学生の参加者を増やすことができれば、さらに多様な交流を図ることができる。今後は大学全体で幅広く取り組んでいきたい。
地域社会のグローバル化への貢献
〈今年度の取り組み状況〉
国際フェスティバル「1Day Asia in たかはし」を開催した。場所を高梁総合福祉センターにしたことで、多くの地域住民や在住外国人の参加があった。
〈今年度の結果についての点検・評価〉
本学の留学生の存在を多くの市民に知ってもらうことができたことは大きな成果であった。母国の文化を留学生と市民が互いに紹介しあって交流を図ることができ、相互理解が進んだ。
〈次年度への課題〉
地域のイベントへの積極的な参加、母国の音楽や踊りなどを紹介する等、留学生の活躍の場を広げることで、学生自身の向上にも繋がると思われる。
国際交流プログラムの強化と海外の大学等との連携強化
〈今年度の取り組み状況〉
アメリカ・ブラジルの訪日文化研修団を受け入れ、学生との交流を図った。夏期ライト大学研修へ3名の学生が参加した。
〈今年度の結果についての点検・評価〉
国際大学らしい異文化交流ができたことは、学生にとっても貴重な経験となった。

〈次年度への課題〉

研修団と学生がペアとなって行動する機会を設けて活用したい。

社会科学部の自己点検・自己評価

学部長

山口 英峰

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

① 入学者数

社会科学部定員180名に対して、入学者数は132名（秋学期入学を含む）であり、定員充足率は73%であった。

- ・令和7年度 入学者数:132名(定員:180名)、入学定員充足率:73.3%(秋学期入学含)
- ・令和8年度 入学者数:101名(定員:150名)、入学定員充足率:67.3%(秋学期入学除)

② 高校を対象とした広報活動

高校への出張講義等を経営社会学科は12回（昨年度：4回）、スポーツ社会学科は14回（昨年度：7回）行った。それ以外にも、大学見学に積極的に対応した。また、スポーツ社会学科は部活動の選手募集もかねて173（昨年度：153校）校の高校を訪問した。新たな取組として出張オープンキャンパスや高校生が多く参加する研究会に参加した。

③ 広報活動

両学科ともにInstagram、Facebookを活用して情報発信を行った。各教員が研究室単位においても積極的に最新知見、研究室学生の様子を発信した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

① 入学定員充足と入学者

社会科学部として、定員を満たすことができなかった。経営社会学科は日本人の入学者が増加した（春7名、秋2名）ことは評価できる。新たに8名の編入生（国外・国内）および学内他学部から9名（経営社会学科7名・スポーツ社会学科2名）の転学部・転学科生を迎えた。編入生、転学科生の受け入れは、経営社会学科が多様な学生の教育ニーズを満たす役割をは対しているとは評価できる。スポーツ社会学科は昨年と比較して入学者の微増が確認されているが、依然定員割れが続いている。女子野球部が創部され、学科の新しい取組結果として学科を問わず入学することは評価できる。

② 高校を対象とした広報活動

高校進路ガイダンス、出張講義、大学見学など、依頼のあった高校を対象とした広報活動に対応できたことは評価できる。スポーツ社会学科では、部活動における高校訪問時には可能な限り体育教室に加えて進路指導部に積極的に出向き、他学科学科についても紹介している。

③ 広報活動

学科Instagram、Facebookによる学科情報発信を継続し続けていることは評価できる。学科Instagram、Facebookによる学科情報発信を継続し続けていることは評価できる。

〈次年度への課題〉

① 入学定員充足

R8年度入学者より各学科定員数が変更（経営社会学科：100名から80名・スポーツ社会学科：80名から70名）となった。定員充足率100%を目指して入試広報室と連携して広報活動に取り組む必要がある。経営社会学科は今まで以上に日本人学生の確保が課題であり、各種データを検証して入学者確保に取り組む。スポーツ社会学科は強化クラブにのみに頼らない、学生募集策を検討する必要がある。

両学科ともカリキュラム改定を行い講義科目として短期留学がはじまる。このことは社会科学部の新しい取組みである。それぞれの学科教育の強みを高校生に理解してもらう新カリキュラムの魅力をオープンキャンパス等の広報活動において周知する。

② 高校を対象とした広報活動

引き続き、出張講義を軸に高校生を対象とした活発な広報活動を展開する。オープンキャンパスは学生募集に重要な機会であることから、オープンキャンパスの内容の改善と充実が必要である。また、高校生にオープンキャンパスに来てもらうための工夫が必要である。

③ 広報活動

学科Instagram、Facebookによる学科情報発信を行っている。高校生フォロワーを増やす工夫が必要である。また、各教員の積極的な情報発信にも期待したい。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

① 退学者対策

両学科共に少人数のチューター制度を活用し、定期的な個別面談を実施している。また、少人数制講義である基礎演習、演習を通じて担当教員が学生の状態を細かく確認している。学生についての情報は学科教員全体で共有して、フォローしている。2回連続欠席した学生はチューターまたはゼミ教員が学生の状況を確認し、教員同士で情報を共有している。加えてGPAが低い学生に関しては、個人面談に加えて保護者との三者面談も行った。

② 資格・免許・検定等

経営社会学科は本年度「社会調査士」の資格取得者を3名輩出した。留学生を対象とした「KIUグローバル人材養成留学生就職促進教育プログラム」（文部科学省留学生就職促進教育プログラム、2023年度に認定）が本格的にスタートした。現在7名の外国人留学生がこのプログラムを履修中しており、1名がJLPT N1に合格した。スポーツ社会学科は、各種資格試験、教員採用試験における合格率向上に向けた支援体制システムを構築した。

③ 教育の充実

学科別FD研修会開催して、教育力の充実を図った。両学科とも新カリキュラム導入に向けて学科内で議論を重ね、新しいカリキュラムが完成した。スポーツ社会学科ではkiuiドリルに加えて学科独自の教材を推薦教材(有料)として活用を引き続き試みた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

① 退学者対策

経営社会学科は9名（留学生は5名）、スポーツ社会学科は5名の退学者が確認されている。退学理由としては専門学校への進路変更（進学）や就職、病気等が主であった。修学意欲の低下が原因で退学した学生も確認されており、退学を回避できた可能性もあることから今まで以上に学生に寄り添った指導が必要であると思われる。

② 資格・免許・検定等

経営社会学科では、「KIUグローバル人材養成留学生就職促進教育プログラム」の新規履修者募集に関する説明会を4月および10月の学期初めに実施した。社会調査士については、資格取得を目指す1年生が増加した。新たに、4年生が1・2年生を対象に「インターンシップ報告会」や「ガクチカ」について発表する授業を展開した（上級生から下級生へのエンカレッジ教育の一環）。スポーツ社会学科では、各種資格試験、教員採用試験における合格率向上に向けた支援体制システムを構築、実施した。目標達成した資格、未達成の資格があった。教員免許状の取得については、教職免許状を取得することを目的にする学生、教員になることを目標にする学生がおり、モチベーションの違いが確認された。

③ 教育の充実

両学科共に学科に提供されている教学IRデータを活用し、学科の新カリキュラムとの整合性も踏まえながら、学科教育の特徴および課題を確認し、新しいカリキュラムが完成した。

〈次年度への課題〉

① 退学者対策

学期移行時の担当教員（ゼミ・チューター）変更の際、教員間で十分引継ぎを行う必要がある。また、新入留学生については特に留学生別科担当教員と入学前に情報共有を行う。

GPAが低い学生、欠席が多い学生に関しては今まで以上に早い段階での面談、個別指導が必要である。また、教務課との連携に加えて、学年を超えたつながりがもてるような取り組みを検討する。両学科ともディプロマポリシーの達成と学科での学びが将来の職業にどのように展開していくかを1年次から具体的な事例をだしながら学生に伝え、学びについてモチベーションを持たせることが必要である。

② 資格・免許・検定等

経営社会学科では、社会調査士資格取得及び留学生の「KIUグローバル人材養成留学生就職促進教育プログラム」の履修について、多くの学生が取得を目指すように入学期から指導する必要がある。資格取得のメリットを含めたガイダンスを丁寧に行っていきたい。

スポーツ社会学科では、教職を除く資格については受験者数が減少している。各種資格の説明に加えて、各種資格と就職との関連性についても具体的な事例を出しながらの説明を実施したい。教職に関しては、目的によってモチベーションが異なることから、各目標に対応した指導方法が必要である。

③ 教育の充実

留学生には、大学の卒業要件に必要な日本語能力試験（JLPT）N2に早期に合格できるよう引き

続き指導・支援を行う。また、卒業時にはN1合格を目指すこともあわせて指導していく。

スポーツ社会学科では、吉備国際大学Charme岡山高梁と本学科の連携により、Charmeの運営、トレーニング指導、マネジメント業務補助等でスタッフ参加して、実務経験を積めるプログラムを展開できるかについて引き続き検討する。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

① 研究報告

教員それぞれが研究活動に取り組んだ。学術論文が31編（昨年度：9編）、講演・口頭発表が15回、著書・作品等1編の研究成果と発表し、6件の共同研究が行われた。

② 研究費の獲得

科学研究費は継続も含めて4件が採択された。その他、1件の受託研究が行われている。

③ 研究の推進

継続的に研究が実施できる時間の確保、環境整備に取り組んだ。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

① 研究報告

教員それぞれが研究活動に取り組んでいるが、研究成果の発表が一部の教員に偏っていることが課題である。

② 研究費の獲得

科研費新規申請が少なく科研費を含めた競争的資金への申請を増やすことが課題である。

③ 研究の推進

研究を通して知的探究心を学生と共有し、研究成果を学生教育に還元できた。教員が教育と学生指導に費やす時間が多く、研究時間の確保は十分ではない。他業務の効率化等、更なる検討が必要である。研究倫理については教員だけではなく、学生に対しても徹底できた。

〈次年度への課題〉

① 研究報告

研究報告が一部の教員に限定されていることが課題である。全教員が研究報告を行うようにする必要がある。

② 研究費の獲得

科研費の申請が少ないことが課題である。若手教員が科研費を申請するように支援する必要がある。

③ 研究の推進

スポーツ社会学科では学科内共同研究ができており、一定の成果を上げている。経営社会学科では、学術論文等において教育実践に伴う発表数が増加している。地域連携・地域貢献活動における取り組みについても実践とのみならず、研究と連動できつつある。引き続き他学科の研究者との積極的な学術交流を図る必要がある。継続的に研究を行える時間の確保が課題となっており、学科業務の見直し等を行う必要がある。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

① 留学生が中心となり、「有漢イングリッシュキャンプ2025」を実施した。高梁市「2025高梁みらい共創チャレンジ事業」の採択を受け、「リアル掲示板で温かなつながりを広げる」を企画・実施した。学生が赤い羽根共同募金の助成を受け、栄町商店街で「フリーコーヒー」を継続して実施した。

② 高梁川流域連携中枢都市圏 中高年健康スポーツ事業(連携:高梁市健康づくり課)、地域運動部活動推進事業(連携:高梁市教育委員会)、新スタジアム整備に関する意識調査を実施した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

① 経営社会学科学生5名（3組）が地域貢献活動の成果を「日本ビジネス実務学会第42回中国・四国ブロック研究会」で発表し、3名が優秀賞を受賞した。また、各教員の地域との連携が進み、学生が地域で挑戦しやすい環境づくりができた。

② スポーツ社会学科では、高梁市民を対象とした健康教室、体力測定事業が10年迎えた。10年間、大きなトラブルもなく実践できたことは評価できる。高梁市教育委員会と連携して高梁市内の中学校で、地域運動部活動推進事業として中学生における部活動の練習計画、指導補助を実践

できたことは評価できる。新しい取り組みとして、新スタジアム整備に関する意識調査が実施された。

〈次年度への課題〉

- ① ゼミ活動を中心に、学生が主体的に地域貢献に関わることができるプロジェクトを学科教員が支援する。特に、地域貢献活動の成果を学外で発表する機会を提供する。教員間の連携を強化し、高梁市を中心とした地域貢献活動を一層推進する。
- ② 現在実施している地域連携・地域貢献を引き続き実施し、継続可能な仕組みを構築する。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ① 経営社会学科では異文化交流を伴う活動を講義にて実施した。また、インターナショナルフェスタ「1 Day Asia in たかはし2025」について学科学生が中心となって構成した実行委員会がイベントを企画・運営した。
- ② 令和8年度から始まる新カリキュラムにおいて「グローバルスポーツ論・演習(仮)」が開講予定である。両学科の留学先であるマーセッドカレッジ担当者と打ち合わせを数回実施し、現地視察、現地調査を実施した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ① 経営社会学科で行った国際交流活動に関連する学内外の活動は学生の評判が高かった。
- ② 令和8年度から始まる「グローバルスポーツ論・演習(仮)」の講義内容について、現地視察、調査を行い、留学先担当者と留学プログラム内容について検討し、2年後の実施に向けて具体的なプログラムについて議論できた。

〈次年度への課題〉

- ① 国際交流活動を充実させ、日本人学生と留学生が共に学ぶ交流プログラムをさらに推進する。これにより、異文化理解の深化と留学生の退学防止を図る。
- ② 両学科における新カリキュラムの特徴科目である短期留学を含んだ講義の具体化を図るとともに、マーセッドカレッジ（米国カリフォルニア州）との連携を含む留学プログラムの整備を両学科の担当者を中心に進める。

経営社会学科の自己点検・自己評価

学科長

黒宮 亜希子

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

- ① 入学定員充足（定員100名）
 - ・入学者（1年生）73名（春45名、秋28名）、学科定員充足率：73%
 - ・入学者（1年生）のうち留学生54名（6ヵ国）、日本人学生19名
- ② 高校を対象とした広報活動の強化
 - ・出張講義：12回（中四国中心：高梁・津山東・玉野光南・和気閑谷 高校等）
 - ・大学見学：2回（希望高等学園津山校・吉備高原学園高校）
- ③ SNS等による情報発信
 - ・学科Instagram、Facebookによる学科情報発信の継続

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ① 入学定員充足と入学者
 - ・日本人入学者の増加：2024年度と比較すると日本人の入学者が増加した（岡山県内を中心に、近隣他県からの入学者が多くを占めている）。
 - ・様々な入学動機の学生への対応：新たに8名の編入生（国外・国内）および学内他学部から7名の転学部・転学科生を迎えた。
- ② 広報活動（SNS含む）
 - ・高校へのお出張講義を岡山県内に加え、広島・愛媛・香川・徳島県などにも積極的に出張して実施した。SNS等による情報発信については、今後さらに強化する必要がある。

〈次年度への課題〉

- ① 入学定員充足と入試広報室との連携
 - ・2026年度より学科定員が100名から80名へ変更となることを踏まえ、充足率100%を目標とする。特に日本人学生の入学者の増加を目指す。
- ② 広報活動
 - ・出張講義を軸に、高校生を対象とした活発な広報活動を展開する。
 - ・オープンキャンパスにおいては、新カリキュラムの魅力（起業ラボ・短期留学プログラム等）を伝える説明資料をさらに充実させる。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

- ① 退学者対策
 - ・学科教員全員が1・2年生のチューター（少人数制）を担当している。
 - ・1・2年生は基礎演習、3・4年生は演習の授業において定期的に学生と関わる機会を設け、学生の状態や変化を細かく把握している。
 - ・毎月の学科会議において学生動向を全体で共有している。
- ② 授業・資格・免許等
 - A) 「KIUグローバル人材養成留学生就職促進教育プログラム」の運用を滞りなく実施している。現在7名の外国人留学生がこのプログラムを履修中である。履修者のうち1名がJLPT N1に合格した。
 - B) 「社会調査士」については、本年度新たに3名の資格取得者を輩出した。「社会調査実習」の授業では、本学複数キャンパスにおいて受講生が質問紙調査を実施した。
- ③ 3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証
 - ・学科FD研修会を2025年11月5日に実施した。昨年度に続き教学IRデータをもとに、学科の学生の特徴や成長度について客観的に議論し、今後の学科教育の対策を検討した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

① 退学者対策

前年度（2024年度）の退学者は5名、退学率は2.2%であったが、今年度は退学者9名、退学率は3.7%となった。そのうち留学生は5名であり、退学理由としては専門学校への進路変更（進学）や就職、病気等が主であった。

② 授業・資格・免許等

A) プログラムの新規履修者募集に関する説明会を、4月および10月の学期初めに実施される学科別オリエンテーション等で実施した。

B) 社会調査士については、資格取得を目指す1年生が増加している。

C) 新たに、4年生が1・2年生を対象に「インターンシップ報告会」や「ガクチカ」について発表する授業を展開した（上級生から下級生へのエンカレッジ教育の一環）。

③ 3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証

学科に提供されている教学IRデータを活用し、学科の新カリキュラムとの整合性も踏まえながら、学科教育の特徴および課題を確認した。

〈次年度への課題〉

① 退学者対策

本学科は春・秋の年2回、入学者を受け入れている。特に学期移行の際には、ゼミ担当教員およびチューター担当教員間で十分な引き継ぎを行う。

② 授業・資格・免許等

A) 留学生には、大学の卒業要件に必要な日本語能力試験（JLPT）N2に早期に合格できるよう、引き続き指導・支援を行う。また、卒業時にはN1合格を目指すこともあわせて指導していく。

B) 社会調査士資格については、新入生を対象に資格取得のメリットを含めたガイダンスをオリエンテーション時に繰り返し実施する。

③ 3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証

4月より学科の新カリキュラムの運用を開始するとともに、3つのポリシーとの整合性を継続的に検証し、教育課程の質保証を推進していく。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

教員がそれぞれ計画的に研究活動に取り組んだ。

- ① 学術論文：15編、② 雑誌投稿等：5編、③ 講演・口頭発表：7件、④ 著書・作品等：1編
- ⑤ 外的資金：1件（科学研究費継続1件）、⑥ その他：1件

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・昨年度と比較して学術論文等の発表数が増加した。特に、学科教員による教育実践に伴う研究成果の発表が増加している。

・特に、日常の授業における取り組みや教育実践を研究論文としてまとめた成果が多数見られる。

・今年度、学科からの科学研究費の新規申請は1件にとどまったため、今後さらなる申請件数の増加が課題である。

〈次年度への課題〉

・科学研究費助成事業への応募については、当初計画に基づき、教員の3割が申請することを目標とする。

・学科教員間の共同研究を今後さらに積極的に推進する。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ① 留学生が中心となり、高梁市有漢地域で「有漢イングリッシュキャンプ2025」（今年度で4年目を迎える）を実施した。
- ② 学科3年生が高梁市「2025高梁みらい共創チャレンジ事業」の採択を受け、「リアル掲示板で温かなつながりを広げる」を企画・実施した。
- ③ 学科4年生が赤い羽根共同募金の助成を受け、栄町商店街で「フリーコーヒー」を継続して実施した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ① 学生主体の地域連携・地域貢献活動
 - ・学科学生5名（3組）が地域貢献活動の成果を「日本ビジネス実務学会第42回中国・四国ブロック研究会」で発表し、3名が優秀賞を受賞した。
 - ・学科学生が活発な地域貢献活動を評価され、「方谷賞」を受賞した。
- ② 教員の地域連携・地域貢献活動
 - ・多数の専門教育科目で、地域で活躍する実務家を招聘し実践的授業を行った。

〈次年度への課題〉

- ① 学生主体の地域連携・地域貢献活動
 - ・ゼミ活動を中心に、学生が主体的に地域貢献に関わることができるプロジェクトを学科教員が支援する。特に、地域貢献活動の成果を学外で発表する機会を提供する。
- ② 教員の地域連携・地域貢献活動
 - ・教員間の連携を強化し、高梁市を中心とした地域貢献活動を一層推進する。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ① 異文化交流を伴う活動を、1、2年次の必修授業で実施した。
 - ・基礎演習ⅠⅡ（1年生）：「シャルム岡山高梁応援」「高梁散策（街歩き）」等
 - ・基礎演習ⅢⅣ（2年生）：「グループ交流会」「チームビルディング活動」等
- ② インターナショナルフェスタ「1 Day Asia in たかはし2025」
高梁総合文化福祉センターで、学科学生が中心となって構成した実行委員会がイベントを企画・運営した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ① 国際交流関連の「高梁散策」「シャルム岡山高梁の応援」「チームビルディング活動」等を継続実施し、学生から高い評価を得た。また、学生主催で「第1回経営社会学科スポーツ交流会」を開催した。
- ② 基礎演習のグループワークを通じて留学生との交流が進み、留学に関心を示す日本人学生（1・2年生）が増加している。海外渡航する学生も出ている。

〈次年度への課題〉

- ① 国際交流活動を充実させ、日本人学生と留学生が共に学ぶ交流プログラムをさらに推進する。これにより、異文化理解の深化と留学生の退学防止を図る。
- ② 新カリキュラムの特徴科目である「グローバルスタディーズ実践基礎・演習」の具体化を図るとともに、マーセッドカレッジ（米国カリフォルニア州）との連携を含む留学プログラムの整備を進める。

スポーツ社会学科の自己点検・自己評価

学科長

山口 英峰

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

広報活動を強化した。

- ・ 高校訪問等:173校(昨年度153校)
岡山県:27校、中国地方:40校、四国地方:36校、九州地方:28校
近畿地方:31校、その他:11校
- ・ 高校進路ガイダンス、模擬授業等:14校(昨年度:7校)
- ・ 新たな取組として出張オープンキャンパスに参加した。
- ・ 新たな取組としてスポーツに関心がある高校生が多く参加するスポーツアナリティクス研究会に参加した。

情報発信活動を継続して実施した。

- ・ 学科Instagram・Facebookの充実:63記事(昨年度241記事)
主としてSNSを活用し、教育研究活動、学生の大学生活について情報を発信した。
各教員が研究室単位においても積極的に最新知見、研究室学生の様子を更新した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

① 入学定員、入試広報室との連携

- ・ 令和7年度 入学者数:59名(定員:80名)、入学定員充足率:73.8%
令和8年度 入学者数:57名(定員:70名)、入学定員充足率:81.4%
学内他学部から2名の転学部・転学科生を迎えた。
入学者数は昨年度とほぼ同様であり、目標である定員充足は未達成となった。これまで以上に入試広報室と連携して、継続的に検討していく必要がある。
- ・ 5年先(3年目)を見据えた取り組みを学科教員で再確認した。

② 情報発信活動

情報発信はSNS担当教員を中心として継続的にInstagramを更新したことは評価できる。

③ 広報活動

高校進路ガイダンス、模擬授業については、依頼があった全ての広報活動に参加できたことは評価ができる。また、部活動における高校訪問時には可能な限り体育教官室だけではなく進路指導部に積極的に出向き、本学科以外の学科についても紹介することができた。また、新たな取組として出張オープンキャンパス、研究会に参加できたことは評価できる。

〈次年度への課題〉

① 入学定員、入試広報室との連携

引き続き入試広報室と連携を強化する。2026年度のカリキュラム変更に伴う本学科の新しい強みや取り組みに関して情報発信する。

② 情報発信活動

引き続き情報発信を積極的に実施する。

③ 広報活動

オープンキャンパス(OC)に来校した生徒の本学科への受験率が高いことからOCの更なる充実を図ると共に、今まで以上にOCに来てもらえる工夫が必要である。スポーツに関わる学科特性として、高校進路指導担当者に加えて保健体育教官室への情報提供が必須である。保健体育教官室宛の郵送物配布を開始して4年が終了することから、その効果について入試広報室と検討する。出張OC、研究会には引き続き参加する。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

① 退学者対策

- ・少人数のチューター制度を活用し、定期的な個別面談を実施した。
- ・2回連続欠席および全体で5回欠席学生の把握と対応、GPAが低い学生に関しては個人面談に加えて保護者にも早い段階で連絡した。
- ・演習科目やイベントを中心に「縦・横・全体のつながり」を強化した。

② 各種資格試験、教員採用試験における合格率向上に向けた支援体制システムの構築

- ・集団および個別指導、模擬試験(教員作成・過去問題)を実施した。
- ・全学年の教職希望者に対して月1回の全体指導会(モチベーション向上等)を開催した。
- ・動画を活用した実技試験対策を実施した。
- ・グループLINEを活用し、資格に関する情報を提供した。
- ・成績不振者に対する個別指導を実施した。

③ その他

- ・新カリキュラム導入(2026年度)について：コース制度をなくし、学科全体のコンセプトを含めた見直しを行い、短期留学を含めた新しいカリキュラムの最終検討を行なった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

① 退学者対策

- ・退学者数:5名(退学率:2.2%)、除籍者:2名(除籍率:8.7%)
今年度は5名の退学者、2名の除籍者が確認されており、目標は未達成であった。
部活動を第一優先している学生が退部した後、学習意欲の低下による退学が確認されている。
早い段階における大学での学びの意義等について指導が必要である。また、修学意欲の低下については、退学を回避できる可能性もあることから、今まで以上に学生に寄り添った指導が必要であると思われる。

② 各種資格試験、教員採用試験における合格率向上に向けた支援体制システムの構築

- ・中高教員採用試験(保健体育):現役合格者の輩出、一次試験合格率目標50%
(4年次受験者数:3名(合格者0名)、3年次受験者数:8名(合格者0名))
- ・健康運動実践指導者資格試験合格率目標:100%(全国平均:59.6%、本学結果:60%(10名))
- ・健康運動指導士合格率目標:全国平均以上(結果:受験者0名)
- ・日本スポーツ協会認定資格試験合格率目標:100%(結果:受験者0名)
- ・日本サッカー協会公認C級コーチライセンス合格率目標:100%(結果:100%(8名))
- *目標達成した資格、未達成の資格があった。教職免許状を取得することを目的とする学生、教員になることを目標とする学生がおり、モチベーションの違いが確認された。
月に1回の全体指導会の実施により、学生にも気持ちの変化がみられたように感じる。

③ その他

- ・学科の新カリキュラム導入(2026年度)について学科全体のコンセプトを含めた見直し、新しいカリキュラムが完成した。

〈次年度への課題〉

① 退学者対策

教務課との連携に加えて、学年を超えたつながりがもてるような取り組みが必要である。
GPAが低い学生、欠席が多い学生に関しては今まで以上に早い段階での面談、個別指導が必要となる。本学科での学びが将来の職業にどのように展開していくかを1年次から具体的な事例をだしながら進めていく。例年実施しているチューター、学年、部活動の枠を超えたイベントを学生主体で実施できる体制を整える。また、部活動の監督とも退部した学生の情報共有を行う。

② 各種資格試験、教員採用試験における合格率向上に向けた支援体制システムの構築

- ・教職を除く資格については受験者数が激減している。各種資格の説明に加えて、各種資格と就職との関連性についても具体的な事例を出しながらの説明を実施する。

- ・教職に関しては、目的によってモチベーションが異なることから、各目標に対応した指導方法が必要である。今年度より全学年の教職希望者に対して月1回の全体指導会(情報交換・モチベーション向上等)を実施した。この会において個別指導も実施した。次年度はモチベーション向上に繋がる教員という職業の魅力についても伝えていく。

③ その他

吉備国際大学Charme岡山高梁と本学科の連携により、Charmeの運営、トレーニング指導、マネジメント業務補助等でスタッフ参加して、実務経験を積めるプログラムを展開できるかについて引き続き検討する。本プログラムは学科独自の特徴となり、他大学との差別化を図れるものとする。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・受託研究による健康教室、体力測定の実践
- ・継続的に研究が実施できる時間の確保、環境整備の取組
- 研究費 科研費採択：1件、申請：3件、継続：1件、受託研究：1件
- その他 研究論文：11編、口頭発表：8回、共同研究：6件

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・研究活動全般について
科研費は1件採択され、各教員の継続した申請ならびに研究成果が形になりつつある。学科内共同研究も継続しており一定の評価ができる。研究を通して知的探究心を学生と共有し、研究成果を学生教育に還元できたものとする。研究に向き合う時間の確保は十分ではない。他業務の効率化等、更なる検討が必要である。
- ・研究倫理について
教員だけではなく、大学院生や学部生に対しても徹底できた。

〈次年度への課題〉

- ・国内外に多くの知見を発信できるよう、継続的に研究を行える時間の確保、環境整備に取り組む。科研費等の資金獲得者の申請書記載内容を共有し、申請書のブラッシュアップが行える環境を整える。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ① 高梁川流域連携中枢都市圏 中高年健康スポーツ事業(連携:高梁市健康づくり課)
以下、健康教室・体力測定を実施(*参加者、学生・教員スタッフは延人数表記)
 - ・高梁健幸ヘルスアップ講座：計33回
 - ・高梁健幸フィットネス講座：計66回
 - ・学内体力測定：計14回(健康教室12回、不定期2回)
 - ・出張体力測定：計19回(不定期)
 - ・健康情報発信：Instagram、facebook、LINEにて健康情報の発信
- ② 地域運動部活動推進事業(連携:高梁市教育委員会)
中学生における部活動の練習計画、指導補助を実践
- ③ 新スタジアム整備に関する意識調査を実施し、「新スタジアムの整備を推進する会」にて報告され、今後のスタジアム整備計画検討に資する基礎資料として活用された。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・10年目を迎えた高梁市民を対象とした健康教室をフィットネススタジオ、フィットネスラボにて実施した。トラブルもなく実践できたことは評価できる。高梁市民を対象とした運動指導の実践は、学生の現場経験の場としての教育効果が高いだけでなく、地域の方とのコミュニケーションを深めることができる。今年度、健康教室に様々な学年の学生が積極的に参加してくれたことは評価できる。

- ・高梁市内の中学校では、単一の学校では大会などに参加できない競技が存在している。地域運動部活動推進事業として中学生における部活動の練習計画、指導補助を实践できたことは評価できる。
- ・今年度、Jリーグクラブ「ファジアーノ岡山」の新スタジアム建設に関し、ファン・サポーターの関心や支持行動、その背景要因を明らかにすることを目的として実施した。得られた知見は、今後のスタジアム整備計画や地域連携施策の検討に資する基礎資料になるものと思われる。また、フィールド研究を通じた学生への教育効果は高く、学生の実践力強化につながるものと評価できる。

〈次年度への課題〉

- ・次年度も引き続き健康づくり課と連携し、高梁市民の健康寿命延伸に貢献する。行事自体は縮小するが、継続して実施できる環境を整える。
- ・高梁市内の中学校では、単一の学校では大会などに参加できない競技が存在している。継続的に中学部活動を支援する仕組みの構築について行政と連携し、引き続き検討する。
- ・研究を通して地域貢献する取組を継続していく。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・令和8年度から始まる新カリキュラムにおいて「グローバルスポーツ論・演習(仮)」が開講予定である。留学先の担当者と打ち合わせを数回実施し、現地視察、現地調査を実施した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・令和8年度から始まる「グローバルスポーツ論・演習(仮)」の講義内容について、現地視察、調査を行い、留学先担当者と留学プログラム内容について検討し、2年後の実施に向けて具体的なプログラムについて議論できた。

〈次年度への課題〉

留学に関しては語学留学、専門性を高めるための留学、アスリートによる留学等、多岐にわたる。特に専門性を高めるための短期留学に関しては、講義として令和8年度新カリキュラムよりより開始予定である。引き続き短期留学先との連携を深め、円滑に講義が進められるよう準備する。講義内の短期留学は、本学科の強みになると考える。オープンキャンパス、SNS等においても周知徹底する。

看護学部 看護学科の自己点検・自己評価

学部長学科長

竹崎 和子

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

- ・学校訪問：学部学科紹介 総社南高校・総社高校・矢掛高校・興譲館高校・井原高校
新見高校・共生高校・高梁高校・城南高校
- ・大学見学：学部学科紹介 倉敷高校・吉備高原学園高校
- ・高校ガイダンス：模擬授業 広島県立福山明王高校・倉敷鷺羽高校・倉敷高校
米子北高校・吉備高原学園高校・香川県立高瀬高校
- ・オープンキャンパス：「高梁市と吉備国際大学があなたの学生生活を支えます！」をキャッチ
フレーズとして学科紹介、模擬授業、演習、在校生との交流を企画した。
- ・看護学科のブログを活用した情報発信
- ・本学科の特徴である複数資格取得可能なカリキュラム、編入学制度等を学生・保護者に情報
提供して、学生確保に繋げる取り組みを実践した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・2025年度入学者 学部定員 60名 入学者30名 充足率 50% (昨年度40%)
編入生定員 10名 入学者 5名 充足率 50% (昨年度100%)

学部生充足率80%は未達成 編入学充足率100%は未達成

- ・看護学科ブログ25件：授業、演習、オープンキャンパス、授業報告会等に関するタイムリーな
情報を発信できた。

〈次年度への課題〉

- ・教員と学生が連携を図り看護学部の魅力を発信して、入学生確保に繋げる。
- ・入学定員充足率 学部80% 編入学100%を達成する。
- ・入試広報室、教務課と連携して高校ガイダンスを計画的に実施する。
- ・高梁市、高梁市医師会と連携した高校訪問を継続する。
- ・オープンキャンパス内容を検討し、高校生、保護者に対し看護学部看護学科の魅力、
高梁市奨学金制度等を効果的に発信する。
- ・教員と学生が連携しブログ、インスタグラム等を作成し情報発信を充実する。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

- ・国家試験全員合格（看護師・保健師）を目指して看護学科教員が一丸となり、ゼミ
単位指導、集中講義、模試等を計画的に実施した。
- ・キャリアサポートセンターと連携し就職試験対策を行い就職率100%を目指した。
- ・退学者0を目指し、チューターを中心に学生、保護者と連携を図り修学を支援した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・国家試験対策として模試結果を基に調べ学習・ペア学習方法による指導を実施した。

看護師：新卒87.5 % (昨年100%) 既卒33.3 % (昨年42.9%)

新卒+既卒 81.5 % (昨年88.2%)

全国平均 新卒 94.1 % 新卒+既卒88.3 %

保健師：新卒 73.3 % (昨年89.5%) 既卒 該当者なし

全国平均 新卒 89/9 % 新卒+既卒 87.1 %

- ・国家試験合格率は看護師、保健師共に昨年度より下回った。
- ・キャリアサポートセンターと連携し、就職率100%である。〈2月27日時点〉
- ・成績不振学生のGPA1.5以下の学生2名に対し、保護者と連携し修学継続を支援した。
- ・退学者1名 (昨年度3名)

〈次年度への課題〉

- ・ 国家試験（看護師、保健師）全員合格100%を達成する。
- ・ 1年次から計画的に国試対策として、ペア学習を導入する。
- ・ 講義、アクティブラーニング等の学習方法を活用し、学生の学習ニーズに応じた教育を実践する。
- ・ 授業以外の学修時間を確保するための予習・復習課題を工夫する。
- ・ 授業評価を参考にして、授業内容を検討し教育の質の向上に繋げる。
- ・ GPA評価を参考に成績不振者に対してチューターを中心に早期学生指導を強化する。
- ・ 退学者、休学者0名を目指して、チューターを中心に全教員が連携し個々の学生に応じた学生指導を強化していく。
- ・ 転学科について学生に説明し必要時には保護者と連携し支援を行う。
- ・ 健康管理センターと連携し、学生の身体面、メンタル面の支援を行う。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・ 科研費採択 継続2件 新規1件
論文8件（昨年度6件）、口頭発表17件（昨年度12件）、雑誌投稿0件（昨年度2件）
著書0件（昨年度1件）
- ・ 各教員が連携を図り、計画的に研究活動に取り組んだ。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・ 教員が研究活動に取り組み、昨年度の実績件数が上昇した。

〈次年度への課題〉

- ・ 大学教員としての自覚を高め、教員間での学術交流を深め研究活動を推進する。
- ・ 地域の市役所、保健所、教育機関等と連携した研究活動を推進する。
- ・ 科研費の獲得に向けて積極的に挑戦していく。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・ 岡山県看護協会、高梁市医師会等と連携し、委員会活動、研修講師等を実践した。
- ・ 出前講座 未来のパパ&ママを育てる出前講座 担当：平田
方谷學舎高校 成羽中学校
がん教育 担当：門倉 高梁市内中学校（オンライン）
- ・ まちなかゼミナールへの参加 アロマハンドマッサージ 担当：岡本
整膚 担当：今城
- ・ 高梁地域と連携し、認知症サポーター養成講座、高梁市在宅医療、介護推進、看護師確保対策活動に参加する。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・ 岡山県看護協会看護研究委員、岡山県看護協会高梁支部副支部長、高梁地域内病院の看護研究指導、研修会講師等各教員が専門性を活かし、業務に支障のない範囲で地域貢献活動に取り組んだ。
- ・ 出前講座2件、まちなかゼミナール2件の参加
- ・ 学生が老年看護学授業を通じ認知症サポーター養成講座を受講し資格取得を達成した。
高梁市認知症サポーター養成講座 担当：岡本
- ・ 保健師養成課程の学生が、地域住民を対象に健康教育を実施し地域活動に貢献した
わくわく子どもフェスタ21 担当：磯濱
- ・ 専門職を対象に運動支援アップデート講座 担当：本郷
子育て支援講座にて運動支援講座 担当：本郷
- ・ 高梁市消防署と連携 多数傷病者対応訓練 担当：岡本 今城

〈次年度への課題〉

- ・ 地域連携・地域貢献活動に継続して取り組む。
- ・ 認知症サポーター養成講座を継続し、高齢化が進む高梁地域との連携を強化する。
- ・ 高梁市役所、備北保健所と連携し、高梁地域の子育て支援、がん教育、健康教育活動等の活動を継続する。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・「グローバルスタディ入門」授業履修により、国際的な視点での学びを深めた。
- ・学内での国際交流行事への参加を推進した。
- ・「おしゃべりカフェ」への参加による交流を推進した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・「グローバルスタディ入門」履修により、講義、GW, プレゼンテーションを通じて、国際的な視点による知識を深めることが出来た。

〈次年度への課題〉

- ・「グローバルスタディ入門」履修により、国際的な視点での学びの意義を深める。
- ・学内交流行事への参加により留学生との交流を推進する。
- ・学生の希望に応じて短期留学体制を整備する。

理学療法学科の自己点検・自己評価

学科長

原田 和宏

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

【3つのポリシーを踏まえた教育課程】

- ・「豊かな人間性」「多様性を増す社会で活躍する力」を育む教育を継続した。
- ・3年生に対する臨床実習技能試験（OSCE）を春期と秋期に行う体制を確率した。
- ・2年生に対する国家資格基礎力（基礎3科目）の向上を図った。国試の参考書を購入し、授業と紐づけて勉強を課した。
- ・1年生では、職業に対する目的意識が薄い学生が多いため、基礎演習Ⅱを活用して、他大学とのコラボ授業を展開し、職業上で求められるコミュニケーションスキルを高めた。

【実習教育】

- ・理学療法学科臨床実習委員会を作業療法学科と連携して高梁キャンパスで実施した。
- ・新規実習施設登録を積極的に行った。

【退学者対策】

- ・転学科を希望する学生に対して、学科間のヒアリングを行い、受け入れ先の運営と学生の目的達成がスムーズになるようにした。
- ・不本意入学の学生を早期に発見し、本人と保護者対応を図った。
- ・臨床評価実習でキャリア形成に悩みを持つ学生が1名発生したが、実習後のフォローで在籍の継続につなげることができた。
- ・精神的な不調を来した学生にほっとルームでの面談を勧め、早期に対応した。

【資格取得に向けた教育】

- ・国家試験対策を1年生～4年生ですべて実施した。
- ・国試対策では4年生秋期の取り組みを7号館4階の教室に移行し、下級学年がその取り組みに接触できる環境をつくった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

【3つのポリシーを踏まえた教育課程】

- ・学位授与率81.8%（前年度72.0%）は向上したものの、修業年限内学位授与率77.4%（前年度78.3%）が横ばいであることは課題である。
- ・臨床実習委員会を作業療法学科と連携して高梁での対面開催を継続できたことは評価できる。

【退学者対策】

- ・退学者は3名（3年生2名、8年目となる4年次生1名）であった。理由は3年生は進路変更と健康上の問題で、4年次では成績不振後の進路変更であった。
- ・留年生における退学が1名にとどまったことは評価できる。
- ・転学科は人間科学科1年生3名、同2年生1名、転科先は経営社会が4名であった。理由の多くは、理学療法士を目指す目的意識が入学時から明確ではなく、入学後に一般企業や経営学への関心が高まったためであった。
- ・臨床評価実習でキャリア形成に悩みを持つ学生が発生したが、学内フォローで在学を継続できたことは評価できる。

【資格取得に向けた教育】

- ・第61回理学療法士国家試験の合格率は新卒92.6%、既卒0.0%、合計78.1%であった（全国平均：新卒94.9%、合計89.7%）。

〈次年度への課題〉

【教育活動】

- ・国家試験を確実に突破できる力を身につけさせるために、基礎3科目の専門学力を教育体制を強化する。特に「運動学」に関する教育機会を増やし、知識の定着を強化する必要がある。
- ・他大学との差別化のために、これからの多様性を増す社会や医療現場での問題解決能力を身につけるための授業内容を増やす。

【退学者対策】

- ・目標は、年間退学者3名以内とする。
- ・学生の変化を早期にキャッチして共有するため、教員間での情報交換体制の充実を図る。
- ・臨床能力や国家試験の基礎知識の定着を推進し、学生の自信をより深めるようにする。

【資格取得に向けた教育】

- ・理学療法士国家試験合格率100%をめざす。
- ・職業に対する確固たる使命感や在学中の目的意識を高めるべく、キャリア形成力を向上させる教育を充実する。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

科研費：3件（代表1件，分担2件）
厚生労働科学研究費補助金：1件（分担1件）
他の助成金等：4件（企業との共同研究2件、学内助成金1件、寄付金1件）
論文：22編（査読あり18編）
口頭発表：19件
外部講演・講義：1件
著書：0件

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・教員が研究活動に取り組んだが、論文化や発表については昨年度より総件数は減少した。
- ・教員各自で自覚をもって継続的に研究活動に取り組んでいる。
- ・企業との共同研究契約が2件、地域貢献の学内助成金が1件で、社会実装や地域貢献をもたらす成果であった。

〈次年度への課題〉

- ・学内外の研究者と積極的な学術交流を図ることを推奨する。
- ・若手および新任教員を中心に、研究活性化のために、科研費等の応募を増やす。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・「きびキビ元気塾 バランス・体力アップ講座」、「こころとからだのケア講座」、「きびキビ元気塾 インソール作製プロジェクト（SDGs教育助成事業）」を企画して実施
- ・農学部公開講座に1名を派遣
- ・公開講座（まちなかゼミナール）で2名の教員が講義
- ・高梁市ミニディへ講師講師派遣（2回）
- ・1年生授業で地域住民の生活課題を共有するため、住民1名を講師として招聘した。
- ・臨床実習指導者講習会の世話人で教員2名が参画。次年度以降の講習会講師招聘に備える。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・教員の専門性を活かした地域貢献活動が行われた。
- ・演習授業を通して地域課題を分析できる人材の育成に取り組むことができた。
- ・研究活動の内、地域貢献の学内助成金が1件採択され、事業が行われたことは、新たな取り組みとして評価できる。

〈次年度への課題〉

- ・地域連携・地域貢献を推進するために、今年度の取り組みを継続する。
- ・授業を通して、地域の人々のウェルビーイング向上に関わる身体的、心理的、および社会的な課題を発見し分析する人材育成の充実を図る。
- ・異業種協働のための基礎力を身につけるためのキャリア教育を推進する。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・1年生は、「グローバルスタディーズ入門」科目で国際的な視点を学んだ。「基礎演習Ⅱ」では、海外の人々とのコミュニケーションの視点を学んだ。
- ・3年生は、「国際貢献・地域理学療法学」にて「海外における理学療法と国際貢献」を学んだ。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・2年生で国際化教育を行う機会が少ないことが課題である。

〈次年度への課題〉

- ・英語でコミュニケーションを図れる機会を増やす必要がある。
- ・「おしゃべりカフェ」への参加による交流を推進する。

作業療法学科の自己点検・自己評価

学科長

京極 真

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

【3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証】

・ディプロマ・カリキュラム・アドミッションの3つのポリシーに基づき、全教員が連携して組織的な教育課程の運用と実現に努めた。

・教員間での相互支援体制を確立することで、授業内容や指導方法の改善を促し、教育の質的向上を実現した。

・学生の意見や授業評価アンケートの結果を多角的に分析し、継続的な教育内容のブラッシュアップを図った。

【退学者対策】

・年間退学者数を目標値（2名以内）に抑制すべく、学生個々の状況に応じた個別指導を徹底した。

・チューター制度を活用し、学生の視点に立ったきめ細かな学修・生活指導を展開した。

・2回連続欠席者は教務課との連携のもと、対象学生に連絡を取り事情を把握し、必要に応じて個人面談を行った。

・学内や学科内イベント（伊賀祭、交流会など）前後にはチューターと学生が協力し学生間の交流の促進や気になる学生への声かけ等を行った。また、イベント後の学生間トラブルには早急に介入した。

・退学や転学科を検討する学生に対しては、チューターおよび学科長による面談を実施し、課題解決に向けた具体的な助言を行った。

・保護者との早期連携により、学生・保護者・教員の三位一体となった協力体制を構築し、問題の早期解決に努めた。

【資格・免許・検定等】

・国家試験対策を1年次より計画的に導入し、特に4年次秋学期には全日・全時限（月～金、1～5限）を使用した集中的な国家試験対策体制を整備した。

・学生個々の学習進捗や苦手分野を詳細に把握し、個別ニーズに即した指導を実施した。

・資格取得等の支援において教員間の情報共有を密にし、適切なフォローアップ体制を維持した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

【3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証】

・3つのポリシーに基づく教育課程は着実に実施し、一定の成果を確認した。

【退学者対策】

・退学者は0名であった。

・転学科希望者は2名であり、その転学科先は経営社会学科であった。理由としては「学習ニーズとの相違」および「学業不振」が挙げられた。

・学年を超えた交流を深めることを目指し、新歓や送別会といった行事を3年生が中心となって企画・実施することで、新入生が早くコミュニティに馴染み、安心できる居場所を築くための環境づくりに寄与した。

【資格・免許・検定等】

・作業療法士国家試験合格率は新卒100%（全国平均：新卒96.6%、合計91.2%）という結果であった。

・資格取得支援では、保護者との連携を要する一部の学生については、勉強の進み具合や心身のコンディションをご家庭と共有するため、適宜連絡を取り合い、面談の場を設けた。

〈次年度への課題〉

【3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証】

・3つのポリシーに基づく教育課程を継続的かつ確実に展開し、学生一人ひとりの目標実現に向けたサポート体制を維持する。

・座学による講義にとどまらず、アクティブラーニングや実習といった多角的な教育アプローチを推進し、学生の自発的な学習姿勢と実践力の育成に努める。

【退学者対策】

- ・年間の退学者数を2名以内に留めることを目標とする。
- ・学生へのきめ細かなフォローアップに向けて、教員間で滞りなく情報共有ができるネットワークを整備する。
- ・転学科ガイダンスにおいては、全学的な方針や関連情報を早期に取得し、受け入れ先学科の教員と密に連絡・協議を行いながら円滑に進行する。

【資格・免許・検定等】

- ・作業療法士国家試験において、合格率100%の達成を目指す。
- ・国家試験に向けた学習効果を高めるべく、系統立てた対策プログラムを計画通りに実行する。
- ・学生ごとの習熟度や学習ペースに寄り添い、個別のフォローアップや補習などのサポート体制をさらに充実させる。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

科研費：計3件（代表：1件、分担：2件）
査読あり論文：計10編（単著・第1著者：2編、共著：8編）
査読なし論文：計10編（単著・第1著者：6編、共著：4編）
著書：計4冊（単著：0冊、共編著：0冊、分担執筆：4冊、翻訳：0冊）
講演・口頭発表等：計29件

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・各教員が意欲的に研究活動を展開しており、全体として概ね良好な成果を収めることができた。
- ・個々の専門領域や現在の研究環境を考慮すれば、今後の改善や発展が十分に見込めると判断した。

〈次年度への課題〉

- ・各教員による継続的な研究活動を推進するとともに、幅広い学术交流の機会を活かして、研究成果のさらなる質的・量的向上を図る。
- ・若手教員や現時点で成果が限定的な教員に対する支援を厚くし、すべての教員が継続して研究実績を積むことができる環境の構築に努める。
- ・令和8年度の科研費申請は最低1名以上の応募を目標値として勧奨する。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・「まちなかゼミナール」において、市民を対象にトレーニングマシンを用いた安全な筋力アップのための実技講習を実施した。
- ・高梁市民を対象とした「まちなかゼミナール」において、生活シーン別のアロマクラフトをテーマにアロマセラピーの基礎講義および作成指導を行った。
- ・認知症キャラバンメイト連絡協議会および地域包括支援センターと連携し、人間科学科1年生および作業療法学科3年生を対象とした「認知症サポーター養成講座」を開催し、基礎知識や地域の支援資源について紹介した。
- ・認知症者との共生社会構築に向けた市の取り組みと連動し、若年層や働き盛り世代に向けた認知症および認知症支援に関する啓蒙活動の案内・紹介を行った。
- ・高梁市役所健康づくり課と連携し、「高梁市虚弱高齢者支援事業」の一環として、地域住民に対し体操を主体とした介護予防教室を実施した。
- ・中山間地域における産業創出および住民の社会参加促進を目的とする「ゲームジャム高梁」の要請を受け、健康支援の観点から地域住民との連携のあり方について探索を行った。
- ・倉敷市民学習センターにおいて、「いつまでも楽しむ園芸！レイズドベッドで広がる緑の癒し」をテーマに講演を行った。
- ・吉備創生カレッジにおいて、「緑による癒しの効果」に関する講演を行った。
- ・南あわじ志知キャンパスで開催された「2025年度 地域創成生涯学習講座」において、「緑の力を暮らしに活かす ～園芸療法の視点から学ぶ健康づくり～」と題した講演を行った。
- ・並木学園福山校において、探究授業の講師を務めた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・吉備国際大学の公開講座「まちなかゼミナール」における実技講習では、参加者の約9割がトレーニングマシンの未経験者であったものの、安全かつ効果的な筋力向上の手法を実際に体験してもらうことができた。
- ・アロマセラピーに関する講義では、気分や生活シーンに応じた精油の選択やブレンドの要点を解説し、16名の参加者とともに入浴剤の制作を行った。「日常にアロマを取り入れたい」「アロマの幅が広がった」といった好意的な反応が得られ、有意義な実践となった。
- ・認知症サポーター養成講座の実施にあたっては、事前に連絡協議会にて若年層への啓発や技術伝達の方針にブレがないことを確認し、結果として約120名の新たな認知症サポーターを輩出することに成功した。
- ・認知症啓蒙活動は過去2年間からの継続事業として着実に展開し、地域と大学の連携事例として大学の公式ウェブサイトを通じ、広く学外へも活動状況を発信した。
- ・高梁市内4地区で開催した介護予防教室では、前年度に把握した住民のニーズを反映させた体操プログラムを実践した。地区コーディネーターからは、前回以上に個別の事情に寄り添った健康対策が提供できたとの高い評価を得た。
- ・「ゲームジャム高梁」への協力事業では、作業療法の知見を活かし、地域住民を食事提供ボランティアとして巻き込むことで減災体験の機会を提供する計画を立てたが、相談受理から開催までの準備期間が不足していたため、実際の住民参加には至らず課題を残した。
- ・倉敷市民学習センターでの講演には40代から70代までの約15名が参加し、レイズドベッドの解説や農作業時の姿勢指導、アグリサイズの実技などを提供した。終了後には市内の関連事業者から産学連携の打診を受けるなど、新たな展開への端緒を開いた。
- ・吉備創生カレッジにおける講義では、約15名の高齢者を中心に参加を集め、講義後に押し花を用いたしおり作りの園芸クラフトを体験していただくことで、好評を得た。
- ・南あわじ志知キャンパスでの地域創成生涯学習講座では、大学周辺の住民を中心に講義と園芸クラフト（押し花しおり作り）を実施し、顔なじみの参加者同士が交流を深める活気ある場を提供することができた。
- ・高等学校の探究授業においては、高校生自身が園芸活動から得られる効果について質的分析を行い、その結果を発表するまでの実践的な指導とサポートを行った。

〈次年度への課題〉

- ・公開講座の開催にあたり、高梁キャンパス9号館は駐車場からの動線が長く、初めての来訪者には経路が分かりづらいという課題があるため、案内方法等の改善策を検討する必要がある。
- ・認知症サポーター養成講座については、市が実施している受講者アンケートの結果や本学学生の受講状況を関係者間で共有し、次年度のより効果的な講座運営や対策に活用する。
- ・学内における若年層向けの認知症啓発活動をさらに推進するため、次年度はより多くの学生の目に触れるよう、学生が日常的に集まりやすい学生会館などを会場として活用することを検討する。
- ・介護予防事業に関連し、他機関等からの度重なる調査や検査の協力要請が地域住民の負担（疲弊）に繋がっている現状を考慮し、虚弱高齢者に対してより負担の少ない健康支援・介護予防の評価システムやアセスメントツールを模索していく。
- ・「ゲームジャム高梁」などの事業へ協力する際は、企画の初期段階から深く関与し、地域住民の継続的な参加を通じた健康増進や社会参加を促進できるような、実効性の高い地域連携プランを提案する。
- ・今年度農学部で実施した公開講座の実績を踏まえ、次年度は高梁キャンパスにおいても同様の講座を開催できる機会や実施形態を検討する。
- ・次年度より新たに開始される履修証明プログラム「園芸療法の基礎」の開講に向けて、受講者を募るための積極的な広報活動を展開していく。
- ・並木学園福山校における探究授業の講師については、次年度も引き続き担当し、継続的な教育支援を行っていく予定である。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・フィンドレー大学からの夏の訪問はキャンセルとなったため、今年度の取り組みとしては実績がない。
- ・加計学園関連の施設、「致理科技大学」（台湾）から特別養護老人ホーム グリーンヒル順正に教員と学生の訪問があった。園芸療法の紹介と体験を行った。作業療法学専攻の2年生有志も参加し、学生との交流を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・今年度は派遣・受け入れとも実施できなかった。フィンドレー大学との国際交流を推進していくために、今度も連絡を取り合いながら、受け入れ体制を整えば、交流していきたいと思う。
- ・致理科技大学との交流を半日行うことができた。学生、教員ともに園芸療法の見学、体験を高齢者を交えてしていただき、興味を持っていただけた。日本の高齢者施設について知っていただくことができたと考える。

〈次年度への課題〉

- ・フィンドレー大学との国際交流を推進していくために、今度も連絡を取り合いながら、受け入れ体制を整えば、交流していきたいと思う。
- ・致理科技大学からの交流は継続しており、令和8年度5月に特別養護老人ホーム グリーンヒル 順正に教員、学生が訪問されることになっている。作業療法学専攻の学生も参加する予定にしている。

心理学部 心理学科の自己点検・自己評価

学部長学科長

森井 康幸

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

- *退学防止策として、教員間での情報共有を密に行うとともに、問題を抱えた学生には早期に保護者と連絡を取り対応するようにした。
- *公認心理師基礎受験資格や教員免許状の取得希望者への細やかなサポートにより、希望者全員が資格取得できるよう取り組んだ。
- *心理学の基礎知識習得の動機づけを高めるために、一般社団法人 日本心理学諸学会連合の実施する「心理学検定」の受検を促し、卒業までに1級合格を目指して取り組むように働きかけた。
- *3つのポリシーに挙げられた事柄の実現に向けて、『演習』の授業を中心に、多面的な取り組みを行っている。
- *基礎学力の修得は、学修の基盤であることから、「心理学の基礎・基本となる知識や考え方、研究方法をしっかりと修得し・・・」というカリキュラムポリシーの基本方針に対応して、特に2年次に集中している必修科目の重要性を繰り返し学生に伝達した。
- *学力の客観的な指標として、平均 GPAの目標値を 2.5 に設定して、全学年達成を目指した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- *公認心理師受験基礎資格取得者は7名（卒業生7/19）であった。
- *就職率は2年連続の100 %であった。
- *大学院への進学者は7名、38%（うち1名は他大学大学院）であった。
- *教員免許状取得者（中学、I種社会と高校I種公民）は0名であった。
- *退学者は3名、除籍者0名であり、両者を含めた退学率は4.3%であり、目標の5%台以下を満たす結果となった。
- *令和7年度のGPAは、4年次生2.78、3年次生2.25（2年次生2.32、1年次生2.53）となり、単年度の2学年の平均GPAは2.44と目標の2.5を若干下回る結果となった。
- *心理学検定の受検結果については、3年生5人が受検し、3名が特1級、1名が1級、1名が2級合格、4年生では4人受検し、3人が1級、1人が認定なしという結果であった。
- *研究室等の移動のため、研究環境が整わず、卒論等の実験実施に影響があった。

〈次年度への課題〉

- *来年度は、現在の3年次生の卒業をもって心理学部心理学科は終了となるため、留年学生も含めて全員が卒業できるように、細かな指導を行う。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

- *科研費4件（新規：代表1件、分担1件；継続：代表1件、分担1件）
- *その他の学外助成金2件（新規：代表2件）
- *編著書等 2編
- *査読あり論文 7編（単著・第1著者5編；共著2編）
- *査読なし論文 2編（共著2編）
- *書評・報告書等 2編
- *講演・学会発表 48件

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- *科研費の代表での新規採択は1件あったが、今年度も申請件数それ自体が少なかった。若手教員が申請していないのが大きな問題といえる。
- *論文数は全体では減少したが、査読付き第1著者の論文は倍増した。
- *学会発表自体は減少した。

*実験環境が整っていなかったが影響したと考えられるが、実験室実験の研究は停滞した。
*第3紀中期目標・中期計画「研究推進」における目標「社会実装の推進」の行動計画『研究成果の地域社会への実装』の具現化に向けての取り組みとして、岡山県の研究助成金をもとに開始した真庭市水田地区の人たちとの防災意識の向上に向けた研究・取り組みが進展しており、今後とも継続していく。

〈次年度への課題〉

- *特に若手教員に対して、科研費の申請するように強く働きかける。
- *新たに設置予定の生理心理学実験室を最大限活用して研究を進めていく。
- *『防災心理学』をキーとして、地域貢献・地域連携も含めた形で研究を充実させていく。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

*例年どおり、臨床心理学系の教員を中心に、学校ふれあい促進事業（高梁市教育委員会）特別支援教育推進事業（高梁市教育委員会）、教育相談（岡山県・高梁高校）、母子保健事業：乳幼児健診（高梁市・健康づくり課）、子どもの心とからだの総合相談（岡山県・備北保健所）、ペアレント・トレーニング講座（高梁市・NPO法人color）、学校における心理教育授業（倉敷市真備東中学）、少年院におけるコンサルテーションおよび保護者支援（法務省岡山少年院）、児童養護施設におけるアートセラピー体験（岡山聖園子供の家）、岡山いのちの電話相談（岡山いのちの電話協会）、思春期・ひきこもり相談（岡山県・備北保健所）、心の健康相談（岡山県・総社南高校）で地域連携・地域貢献活動を行った。

*基礎心理学系の教員は、看護学科教員とともに、防災・減災のための取り組みとして『防災合宿訓練』などを真庭市、高梁市で住民参加のもと実施した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- *例年どおり、高梁市教育委員会や保健所などとの連携で、教員の専門性を生かした活動が行われている。
- *学部生や大学院生の現場実習の機会となっているものもあり、本学科と地域づくりとの関係づくりに貢献している。
- *防災合宿訓練については、真庭消防署とも連携しながら行ったが、地域住民の参加は少なかった。

〈次年度への課題〉

- *学生の自主的な地域貢献活動の取り組みの活性化も望まれる。
- *学生および地域住民、さらに外国人（留学生・労働者）を対象とした防災・減災教育を、市レベルでの連携の下で、広く行えるよう取り組んでいく。
- *中山間地のため高齢者も多く、交通の便も悪いため、こちらから地域に出向いて集落ごとに活動する必要性を感じた。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

*学科内の留学生と日本人学生が、授業内で触れ合うようなグループ編成等を行い、交流の機会を持たせた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- *学科内に留学生がいるにもかかわらず、日本人学生からの積極的な関係づくりが見られない。授業内でのグループ活動もその場限りという傾向が強かった。
- *本学科の学生の場合、日本人同士でも関係づくりが苦手な学生が多いという、より根本的な問題もある

〈次年度への課題〉

*留学生（他学科の学生も含む）と日本人学生との継続的な交流の機会を設定し、相互理解を深めるより強力な取り組みが必要と考える。

農学部の自己点検・自己評価

学部長

相野 公孝

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

- ・令和8年度からアクアグリーンフィールド学科の新設および地域創成農学科の農業資源生物学科への改名に伴い、オープンキャンパスなどでは3学科の魅力を短時間にわかりやすく説明するための工夫を行った。
- ・オープンキャンパスでは、学科ごとに学生と保護者を分け、より詳細な説明ができるように別メニューで説明を行った。特に学生には、本学部の特徴である体験型学習中心のカリキュラムを実感してもらうために工夫を行った（地域創成：圃場でのジャガイモ収穫、植物工場でのトマト収穫体験、微生物の生産する物質の抽出、海洋水産：海洋ドローンの操作体験、モエビの分類等、アクアグリーンフィールド学科：キャンパス周辺の樹木名の調査等）。
- ・年内定員充足を目標として、A0総合選抜、指定校推薦などの説明および出願の時には、第三志望まで記入するように説明した。
- ・Instagram、X(旧Twitter)等のSNSを用い、授業風景やイベント情報及びリール動画などを配信することにより、各学科の特色や何を学ぶのかを具体的に示した。
- ・入学前説明会の開催（オンライン含む）を12月と2月の2回行い、入学後の不安解消を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・農学部：入学定員90名、入学者数80名、入学定員充足率 88.9% (R7)
入学定員120名、入学者数99名、入学定員充足率 82.5% (R8)
- ・オープンキャンパス7回実施の参加人数は、参加人数総計778名であり、昨年度568名に比べ大幅に増加した。、アクアグリーンフィールド学科志望者は、新設のため若干予想より下回った。
- ・入学前説明会日は72組（オンラインを含む）が参加、入学への準備と学生が抱える不安について、学生は在学生が、保護者は教員が丁寧に説明を行った。
- ・Instagramの閲覧数は、リール動画などを導入した結果、変動はあるものの4～6万人/月割合で経過した。また、閲覧者の居住地域割合を調べると、上位から見ると南あわじ市が31.9%、神戸市6.1%、洲本市6.0%、大阪市2.5%であった。

〈次年度への課題〉

- ・農業資源生物学科への改名、アクアグリーンフィールド学科の新設など、思ったほど情報が浸透していないことが判明し、今後の対策を考える必要がある。
- ・オープンキャンパスは今年度と同様に学科ごとに保護者と学生を分けてきめ細やかな説明を行い、3学科共に体験型学習事例を増やし、「楽しく学べるキャンパス」を実感してもらう必要がある。
- ・Instagramの閲覧者の更なる解析と効果の検証とターゲット地域の検討を行い、農業、海業などに広く興味を示す学生を発掘する必要がある。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

- ・各学科の作成した3つのポリシーに基づきそれを実現できるよう授業を実施できた。
- ・退学者防止について、チューターによる早め早めの学習支援を徹底し、退学者率 0%を目指した。特に、2回連続欠席者票を元にし、教授会及び学科会議において学科横断的に各教員間での情報共有を密に行い、問題を抱えた学生には早期に3者面談を行い、解決するよう努力をし、よりきめの細かい対応を行った。
- ・実習科目とそれに関連する座学科目を連携・補完させ、原理と実践の両面から学習体得することで、学生の理解度と満足度をより高めることのできる講義体系を構築し、学習の楽しさを全面に打ち出した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・農学部退学者4名、休学者1名、除籍者1名で前年度に比べ同程度であった。きめ細やかなチューター対応を行ったが退学者を出したことは残念であった。ただ、成績不振が原因の退学者が減り、他大学への進路変更が目立った。
- ・海洋水産生物学科においては開設3年目を迎え、順調にカリキュラムに沿った授業を押し進めることができた。
- ・以前から実学重視の教育を行ってきたが、本年度は両学科においてさらに体制を強化し、体験型学習を通じて、農業、海業への面白さや今後の学びについて考える場を作ることができた。また、座学と実習科目の連携を行うことができた。
- ・食品衛生管理者及び食品衛生監視員の課程修了者は20名、卒業生の60.6%であり、昨年度の69.2%に比べ低下した。

〈次年度への課題〉

- ・退学者0名を目指し、さらなる細やかな指導と、教員間における情報共有を強化する必要がある。特にアクアグリーンフィールド学科開設による学生数増加に伴い、情報の把握と対応が遅れる可能性がある。さらなる教員間における情報共有を密にする。また、新学科解説に伴い新教員の増加があり、学科内はもとより学科間の情報共有も広く行う必要がある。
- ・実習科目とそれに関連する座学科目を連携・補完させ、原理と実践の両面から学習体得することで、学生の理解度と満足度をより高めることのできる講義体系の構築を次年度もさらに強く押し進める必要がある。
- ・食品衛生管理者及び食品衛生監視員の資格に加えて学芸員の資格取得の重要性を初期段階で理解できるようにし、資格取得まで教員が強く指導し、次年度も課程修了者数を増加させる必要がある。
- ・海洋水産生物学科においては次年度は完成年度となるため、カリキュラムの点検を行い、見直す部分が判明すれば、変更も検討する必要がある。農業資源生物学科においても同様にカリキュラムの点検を行う必要がある。
- ・アクアグリーンフィールド学科のカリキュラムにおいて、スムーズな授業ができるかの検証を行う必要がある。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・科学研究費取得のため申請数を増加するために各学科教員に啓蒙し、さらに、学術研究助成基金以外の各省庁及び地方自治体が行なっている競争資金の応募への申請を推奨した。
- ・各学会への査読付き論文への投稿、積極的な学会発表を行うよう啓蒙した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・研究活動実績は、学術論文が5編、学会等発表が14題、書籍が2編、学術雑誌2編、紀要2題、その他研究会講演4題であった。
- ・科学研究費応募は2件（前年5件）であり、新規採択は1件となった。助成・受託研究は5件、学内共同研究が2件、地域貢献教育研究1件、SDGs教育研究2件が採択された。昨年に比べ研究費確保への意識が劣っているように考えられるが、さらなる採択率向上に向けて努力が必要である。

〈次年度への課題〉

- ・今後とも学術研究助成金はもとよりあらゆる競争的資金に対してチャレンジできる環境を醸成する必要がある。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・地域企業及び地域との連携をさらに強化するために、地域のイベントに積極的に参加し、学術的な面からも地域企業との共同研究を増加させる努力を行った。その結果地域創成農学科、海洋水産生物学科ともに合計29テーマにおいて地域連携活動を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・伊加利地域における自立かつ持続可能な地域ビジネスモデルの構築を目指す目的で、地域資源であるイノシシ肉を活用したジビエドッグフードの開発、耕作放棄地を活用した貸農園および収穫体験イベントの運営、加工体験の実施など、地域特性を活かした収益モデルの策定を図っている。本年度はジビエドッグフードの試作およびパッケージデザインの作成、農園の整備を実施した。
- ・あわじ島農業協同組合（JAあわじ島）がかつて販売していた「タマネギ石鹸」のリニューアルプロジェクトを行った。本事業では、所属研究室で蓄積してきた「吊り玉貯蔵」によるタマネギの成分変化（ケルセチン含有量等）のデータを活用し、本年度、高機能な石鹸として商品化した。今回は固形石鹸の制作を完了させた。
- ・阿万吹上地区において、防護柵の設置や捕獲支援を通じた地域獣害対策の長期的なサポートを行った。本年度は、設置済みの柵の防護効果を検証するため、監視カメラを用いた野生動物の出現頻度の調査を実施した。毎月のメモリーカード回収と電池交換、データ解析を継続。解析結果はLINEを通じて地域住民と迅速に共有し、目撃情報の提供を行うことで、地域の防護意識の向上と効果的な対策立案を支援した。
- ・アメリカミズアブを活用した、南あわじ市の資源循環型社会（サーキュラーエコノミー）の構築を目指すため、家庭ごみを餌としてミズアブの幼虫に分解させることで処理コストを削減し、成長した幼虫を養殖魚の飼料として活用することで、観光資源である魚の免疫力向上と品質改善を図る。さらに魚の残渣を再び幼虫の餌とする循環モデルを目指している。本年度は、アメリカミズアブによるタマネギバイオマスの生物処理効果の検証、および幼虫体内へのケルセチン蓄積評価を実施した。
- ・大学と地域が連携した実践的な教育活動を推進するとともに、地域資源の魅力発信や地域活性化に寄与する機会創造するために「KIBI志知マルシェ」を企画した。農学部在学生在が主体となり、南あわじ市の有志および農学部教職員と連携して企画・運営を行った。在學生と淡路島内から30軒を超える事業者が参加し、地元農産物や加工品の販売に加え、学生や出店者が企画したワークショップも実施された。来場者は体験型の企画を通じて、淡路島の農業や食、地域文化への理解を深める機会となった。学生は、企画立案から関係者との調整、当日の運営やワークショップ対応に至るまで主体的に取り組み、地域の方々と協力しながら円滑な運営を行なった。

〈次年度への課題〉

- ・地域の課題（耕作放棄地、獣害等）をデータに基づき分析・解決策を提示するシンクタンク型及び大学がハブとなり、自治体・企業・農家を繋いで新しいビジネスを生むプラットフォーム型の地域連携は、これまで多くの課題を実施しているが、地域全体を「実験場」とし、新技術の実証実験を住民と共に行うリビングラボ型地域連携の実施例が若干少なく、今後強化する必要がある。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・海外留学生との交流を活発化する事により相互の文化の理解を促進するために、くにうみ祭やさなぶり祭などのイベントに海外留学生の参加を促し、文化の相互理解を促進した。
- ・「アメリカ・オハイオ州・ライト大学 夏期短期研修」に農学部の学生が1名参加し、無事に研修プログラムを終了した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・さなぶり祭において、高粱キャンパスの留学生が参画し、田植えを通して日本の文化の交流を行い。バーベキューを通じて、留学生との学生間交流を密にした。学部生においては、言語の勉強への動機づけ、または、多文化への興味を引き出す良い結果となった。
- ・インドネシアのテンペ、韓国のキムチなどの発酵食品の加工実習を昨年に引き続き実施した。

〈次年度への課題〉

- ・今年度と同様に留学生と日本人学生との交流を活発化する計画を図り、相互の文化の理解を進めていく必要がある。
- ・海外視察団等の積極的な受け入れや、海外研究機関との共同研究を活用化する必要があり、学生の海外への視野を広げることが重要である。

地域創成農学科の自己点検・自己評価

学科長

村上 二郎

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

- ・令和8年度から、地域創成農学科の名称が農業資源生物学科に変更されるに伴い、従来の6コースを3コースに再編し、高校生（受験生）にとってよりシンプルで理解しやすい構成に刷新した。
- ・本学科の新生を対象に、入学理由に関するヒアリング調査を行い、教員間で情報の共有を行った。幅広い分野がある農学の中で、受験生が何に関心があるかといったトレンドを把握し、オープンキャンパスやキャンパス見学会での講義や体験イベントに反映させた。
- ・オープンキャンパスの魅力を高めるため様々な取り組みを行った。特に本年度は、実習圃場や植物工場での収穫体験イベントを充実させた。また、模擬講義では、農や食だけでなく、高校生の関心が高い環境問題（SDGs）や農業経営に関する話題を追加し多様性を図った。施設見学では、学生主導での実験機器の説明や試食品の製造提供を行い、本学科学生の主体性や活発性を強調した。さらに、新しい取り組みとして、ドローンの操縦体験イベントを導入した。加えて、これらの様子をInstagramなどのSNSで精力的に発信した。
- ・高大連携事業（1件）やキャンパス見学（4件）を推進し、本学科のアピールに努めた。また、高校内ガイダンス（15件）にも積極的に参加を行った。さらに、入学前説明会を2回開催し、合格者が安心して入学できるよう心がけた。
- ・農学部キャンパス周辺では、学生向けの住居が慢性的に不足しており、受験者や保護者が大きな不安を抱いている。そこで、シェアハウス物件の情報を取り纏め、オープンキャンパスや入学前説明会において情報の提供を行い、シェアハウスに住むメリットを説明した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・令和7年度：入学定員 50名、入学者数 32名、入学定員充足率 64.0%
- ・令和8年度：入学定員 40名、入学者数 22名、入学定員充足率 55.0%
- ・令和8年度の入学定員充足率は、前年度から9%減少し、本年度も入学定員には達しない結果となった。
- ・オープンキャンパス参加者は、前年度と比べ減少しているものの88組/186人と堅調であり、またアンケートによる評価も非常に良かったが、各入試への出願数増加には貢献できなかった。
- ・新生の入学理由に関する調査では、オープンキャンパスが好印象であったことを上げた学生が全体の43.8%に上った。このことから、オープンキャンパスの参加者数を増やすことが、入学者数を増加させることに直結すると考えられる。
- ・海洋水産生物学科や新設されるアクアグリーンフィールド学科と比較すると、農業資源生物学科には、受験者にとって「遊びや楽しさ」などのレジャー的な要素が少ないと感じている恐れがある。

〈次年度への課題〉

- ・本学科の名称変更が行われに伴い新たなカリキュラムが開始されることから、引き続きオープンキャンパスなどを通じて本情報を精力的に発信していく。
- ・在学生が主体的に活躍するオープンキャンパスを実践し、高校生や保護者にとって、親しみやすく、キャンパスライフを実感できる場を提供していく。また、高校ガイダンスや出張講義等で、本学科の多様な取組を紹介し、その魅力を発信していく。
- ・海洋水産生物学科やアクアグリーンフィールド学科受験者の第2、第3希望として、本学科を選択するケースが散見されることから、本学科独自の楽しさや優位性を明確化しアピールしていく。
- ・従来からの問題である淡路島内出身学生や女子学生の比率の少なさの解消を目指し、地域密接型の活動やSNSなどを活用し志望者の増加を図っていく。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

- ・退学者対策として、学科会議等で連崎欠席者などの情報を頻繁に共有し、チューターのみならず学科教員一丸での徹底的なフォローを実践した。また、早期に三者面談を実施し問題解決に向け細かな対応を行った。

- ・各種アンケート調査より、3つのポリシーのうち可能性を信じる力（自己効力感）が本学科では低い傾向があったことから、実習や卒業研究において、成功体験を積ませることが出来るような指導を行った。
- ・実習や実験科目とそれに関連する座学科目を連携・補完させ、原理と実践の両面から学習体得することで、学生の理解度と満足度をより高めることのできる講義を実践した。具体例として、本学科1回生の必修講義である「フィールド実習」と「栽培学」を連携させ、実習で栽培している作物を座学講義でより深く解説し、さらに収穫物を実際に調理し食すことで一層の興味を引き出す取り組みを行っている。
- ・本学科で取得できる資格に関して内容や有用性を説明し、資格取得に必要な講義の履修を推奨した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・退学者対策に重点を置いてきたが、残念ながら1名が退学を行った（前年度は、2名）。また、体調不良で1名が休学している。
- ・実習科目と座学科目の連携については、学生からポジティブな評価を受けているが、今後アンケート結果などを詳細に分析し、担当教員間で評価していく必要がある。
- ・食品衛生管理者および食品衛生監視員の課程修了者は13名、卒業生の68.4%であった。

〈次年度への課題〉

- ・前年度と比べ退学者数は減少したが、教員間の情報共有とフォローをさらに強化し、退学者0名を目指す。
- ・引き続き、自己効力感を高める講義内容や指導方法を模索していく。
- ・実習科目をより充実させ、また座学科目との連携をさらに推進し、学生の理解度と満足度をより高めることのできる講義を展開していく。
- ・食品衛生管理者や令和6年度入学生から取得が可能になった学芸員の資格に関してその重要性を説明し、取得率の向上を目指す。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・学内外にとらわれず共同研究を推進した。とくに海洋水産生物学科と積極的に連携し共同研究の提案を行っている。
- ・科研費をはじめする競争的資金の応募申請を推奨した。
- ・研究成果の投稿および学会での発表を積極的に行うことを奨励した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・研究活動実績は、学術論文が1編、学会等発表が4題、書籍が1編、その他の研究業績が1課題であった。
- ・科学研究費応募は3件であり、新規採択は残念ながら無かった。また、受託研究が3件、学内共同研究が1件、SDG s 教育研究が2件採択された。

〈次年度への課題〉

- ・海洋水産生物学科およびアクアグリーンフィールド学科と積極的に連携し、新たな枠組みでの共同研究を実施していく。
- ・科研費に関して、本年度以上の申請数を目指す。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・高大連携事業（1件）、地域中高生の活動補助（2件）、地域密着型の研究や研究会（10件）などを推進した。
- ・南あわじ市との受託研究の継続、地元企業との連携による新商品開発に取り組んだ。一連の研究活動の多くは本学科学生も携わっており、大学と地域をより深く結びつけることに貢献している。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・以下に、主な活動を列挙する。全ての課題において、大学と地域をより深く結びつける有意義な取組となった。

- 1) 環境省重要生態系監視地域モニタリング推進事業（植物相調査）
- 2) 地域×大学×企業のひょうご絆プロジェクト
- 3) タマネギ石鹼商品化
- 4) 鳥獣害被害モデル事業
- 5) 南あわじ市資源循環推進協議会
- 6) 淡路三原高校高大連携活動_実験授業
- 7) 南あわじ市大学連携事業4つの研究会
- 8) 淡路島日本蜜蜂生息基盤強化資材の開発：誘蜂剤と天敵忌避剤の研究開発・実証
- 9) 南あわじ市赤菊産地維持 就農定着応援プラン冊子作成プロジェクト
- 10) 南あわじ市志知松本地区清掃活動（春、秋）
- 11) 地域に学ぶ中学生・体験活動「トライやる・ウィーク」（南あわじ市中学生の職場体験）

〈次年度への課題〉

・本学科では、数多くの地域連携活動を行ってきているが、その反面、活動内容やその成果に関する情報発信は十分であるとは言えない。そこで、WebやSNSを通じて、地域社会に分かりやすく発信し、本学科の意義を伝え知名度を上げていく。本学科の弱点である地元学生の少なさを解消していく上で重要な取組と考える。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・本学科主催行事のさなぶり祭では、高梁キャンパスの留学生が参加し本学部学生との交流を図った。
- ・また短期留学生の訪問時など、海洋水産生物学科と協力し、海外留学生と日本人学生との交流を促進した。
- ・「地域創成農学概論」や「グローバルスタディーズ」などの講義で、世界の食料事情や環境問題を解説し、また海外で就労経験がある教員がその体験談やメリットを紹介することで、海外への関心を高めるよう努めた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・留学生の訪問時には、本学科の学生も多数参加し積極的な交流を通じて親睦を深めることができた。
- ・米国州立ライト大学の夏期短期研修に本学科の学生が1名参加し、無事に研修プログラムを終了した。

〈次年度への課題〉

- ・本学部の留学生は少なく、交流の機会は多くはないのが状況ではあるが、次年度も引き続き、本学科のフィールド実習講義で行う田植え行事（さなぶり祭）等に、他学部/学科の留学生を招待し本学科学生との交流の場を設け、文化的な多様性の理解を深める場を提供していく必要がある。
- ・研究面では、国際誌への投稿や国際学会での発表を推奨していく。

醸造学科の自己点検・自己評価

学科長

村上 二郎

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

- ・醸造学科は本年度末で閉設されるので、留年者をださいように計画的な単位の履修や習得を徹底的に指導した。
- ・退学者対策として、学科会議等で連崎欠席者などの情報を頻繁に共有し、チューターのみならず学科教員一丸での徹底的なフォローを実践した。また、早期に三者面談を実施し問題解決に向け細かな対応を行った。
- ・卒業研究では、自己効力感の向上を目指し、成功体験を積ますよう指導を行った。
- ・本学科で取得できる資格に関して内容や有用性を説明し、資格取得に必要な講義の履修を推奨した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・留年者はなく、在籍生全員が卒業できる運びとなった。
- ・退学者は、0名であった（前年度は、2名）。
- ・食品衛生管理者および食品衛生監視員の課程修了者は7名、卒業生の58.3%であった。

〈次年度への課題〉

- ・醸造学科は本年度末で廃止となる。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・学内外にとらわれず共同研究を推進した。とくに海洋水産生物学科と積極的に連携し共同研究の提案を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・旧醸造学科所属教員による研究活動実績は、学術論文が2編、学会等発表が5題、その他の研究業績が4課題であった。

〈次年度への課題〉

- ・醸造学科は本年度末で廃止となる。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・地元企業との連携による新商品開発に取り組んだ。一連の研究活動の多くは本学科学生も携わっており、大学と地域をより深く結びつけることに貢献している。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・地域資源であるイノシシ肉を活用したジビエドッグフードや、ケルセチン含有量を高めた「タマネギ石鰯」の開発を推進した。これらは、持続可能な地域ビジネスモデルの構築を目指しており、従来の独善的な地域貢献活動とは一線を画すものである。

〈次年度への課題〉

- ・醸造学科は本年度末で廃止となる。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

・短期留学生の訪問時など、地域創成農学科および海洋水産生物学科と協力し、海外留学生と日本人学生との交流を促進した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・留学生の訪問時には、本学科の学生も多数参加し積極的な交流を通じて親睦を深めることができた。

〈次年度への課題〉

・醸造学科は本年度末で廃止となる。

海洋水産生物学科の自己点検・自己評価

学科長

堀 豊

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

- ・定員充足率100%を目指し、オープンキャンパスの強化と広告の活用、地域イベントへの参加、高校訪問等により学科の認知度を高めた。
- ・オープンキャンパスでは学科概要説明の際に、なるべく新入生が実際に活動している写真を多く取り入れた。教員によるミニ講義を実施するとともに、水槽室や臨海実習棟に案内し、水生生物と接する場を設けた。
- ・SNSによる学生と教員からの情報発信、ラッピングバスの運行、地元テレビ局・一般紙・業界紙への積極的な対応、地域イベントや高校進路説明会への参加に注力した。
- ・体験型学習中心のカリキュラムを実感してもらうために工夫を行った（水中ドローンの操作体験、モエビの分類等）。
- ・Instagram、X(旧Twitter)等のSNSを用い、授業風景やイベント情報及びリール動画などを配信することにより、学科の特色や何を学ぶのかを具体的に示した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・令和7年度入学：入学定員40名、入学者数48名、入学定員充足率120%
- ・令和8年度入学：入学定員40名、入学者数43名、入学定員充足率108%
- ・オープンキャンパスでミニ講義を行うことにより、学科で学ぶ内容をより具体的に掘り下げることができた。
- ・学生が実習で利用している水槽室に案内することで、水生生物飼育の楽しさを伝えるとともに、臨海実習棟へ移動するバス内でも教員や在学生から積極的に話しかけることで本学科の魅力を効率的にアピールすることができた。
- ・様々なメディアを通じた広告や、高校におけるリモート説明会への参加、地域との連携強化により徐々に知名度は上がっている。

〈次年度への課題〉

- ・定員確保を持続するために、応募者の少ない淡路島内高校生への働きかけを強化するとともに、地域イベントへの参加学生数を増加させ、学科名称の認知度向上に努める。
- ・農学部受験者数・入学者数が多い大学近隣（近畿・中四国）の高校や予備校への広報活動を積極的に実施する（コーディネーターとの高校訪問、海洋水産生物学科在学生の母校へ学生と共に高校訪問）。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

- ・退学者対策として、学科会議等で学生情報の共有に努めるとともに、入学後の早い時期に学生一人に一台ずつ水槽を管理させ、水生生物の採集や飼育を体験させた。
- ・「海業」全般に関する基礎的な知識の習得を目標として、リゾート施設見学や川遊び実習等の体験型学習を行った。
- ・臨海実習棟を活用し、全員に海釣りの体験をさせ、釣り上げた魚の同定実習を通じて水生生物学の学習効果を高めた。
- ・淡路島内の魚貝類種苗生産施設を見学し、大規模な生物飼育を体感させた。
- ・兵庫県と連携し、調査船による海洋観測を体験させ、海洋環境を考える契機とした。
- ・大学祭等のイベントでスモールビジネスの模擬体験をさせた。
- ・資格・免許取得の一環として、ダイビングライセンス講習の斡旋を行った。
- ・昨年度の1年秋学期は学科特有の専門科目が少なかったこともあり、修学意欲の低下が見て取れたため、今年度は、1年春学期の専門科目の一部を秋学期に移動し、基礎科目や教養科目も含めた学生の修学意欲の維持向上に努めた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・令和7年度は退学者3名を出すこととなった。うち2名の退学理由は他大学への進学であった。
- ・学習面では、体験型学習を通じて水生生物や海、川に関する経験値を高めることができた。
- ・1年次の専門科目分散により、学生からの履修内容に関する不満は軽減したと思われた。
- ・令和7年度のGPAは、1年次生3.04、2年次生2.17、3年次生2.59、平均単位取得数は1年次生44.2、2年次生40.9（通算83.1）、3年次生31.5（通算118.3）であり、概ね良好である。

〈次年度への課題〉

- ・学科教員間の情報交換の機会を増やすとともに、学生とのコミュニケーションの機会を増やし、学生の異常を早い時期に察知し、きめ細かい指導を心がける。
- ・水産物の加工、調査船乗船や水産関係施設見学については、さらに学習、実習の機会を増やしていく。
- ・学芸員の資格取得の重要性を初期段階で理解できるようにし、資格取得まで教員が強く指導し、次年度も課程修了者数を増加させる必要がある。
- ・R8年度は学科完成年度となるため、カリキュラムの点検を行い、見直す部分が判明すれば、変更も検討する必要がある。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・教員間の学術交流を進めるためのミーティングを重ね、若手教員に対する技術指導に注力した。
- ・南あわじ市と連携した事業を継続することにより研究資金を調達し、海藻類の増養殖研究、臨海実習棟周辺海域の環境モニタリングを進めることができた。
- ・淡路島内の魚貝類種苗生産施設の利用や兵庫県の実施する海洋観測結果の共有などにより、今後につながるような共同研究や連携を模索した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・今年度の研究活動実績は、学術論文が6編、講演口頭発表が10題、書籍1編、その他の業績3件であった。
- ・科学研究費応募は0件であった。
- ・科研費採択に向けて更なる努力が必要である。

〈次年度への課題〉

- ・農業資源生物学科、アクアグリーンフィールド学科とも連携し、学科の枠を超えた新しい取り組みにチャレンジする。
- ・臨海実習棟の完成に伴い、現場海域における調査研究や陸上養殖関連研究などを見据えた整備をさらに進めていく。
- ・今後とも学術研究助成金はもとよりあらゆる競争的資金に対してチャレンジできる環境を醸成する必要がある。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・地元自治体や漁業者、民間団体等と連携し、イベントや会議に積極的に参加した。
- ・大学公開講座「吉備国際大学 地域創成生涯学習講座」を開講し、大学として地域との連携・地域への貢献を図った。
- ・淡路島内の高大連携協力協定校である「兵庫県立津名高等学校」において、理数探究における探究活動のテーマ設定に関して支援（指導・助言）を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

1) 令和7年度 福良湾環境保全事業、2) 兵庫県民農林漁業祭&ひょうご豊かな海づくり推進大会、3) 丸山漁港海業協議会、4) 南あわじ市「子ども食堂」お魚料理教室、5) 南あわじ市 じゃのひれSUP海岸清掃、6) 南あわじ市阿那賀地区夕涼み会、7) 海と日本プロジェクト 水産業を学ぼう！\ちょっとすごい/海の自由研究ツアーin姫路、8) 淡路島まるやまFESTIVAL 2025、9) 海と日本プロジェクト 習わないことを学ぼう！海が好きになるツアー、10) 3海峡クリーンアップ大作戦、11) さかな文化祭あかし、12) 阿那賀フリーマーケット、13) 臨海実習棟一般公開等、様々な地域振興イベントに学生及び教員が参加し、兵庫県、淡路島、南あわじ市の活性化にそれぞれ寄与するとともに、大学名、学部名、学科名の認知度を向上させた。

〈次年度への課題〉

- ・交通の便が悪いことから、学外のイベントに学生が参加しやすくなるよう公用車や学園バスの活用を進める。
- ・大学、学部、学科名等のわかるTシャツ、パーカーやビブス等を整備し、認知度の向上に努める。
- ・アカモク、ナマコの増殖等、地元からの要望が強い案件について優先的に研究に取り組む。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・地域創成農学科と協力し、海外留学生と日本人学生との交流を促進した。
- ・海は世界に繋がっており、海の資源を考えるうえで国際的な視点・視座は必要である。そのためグローバルな課題や取り組みを講義の中で積極的に取り入れ紹介した。
- ・さなぶり祭等のイベントにおいて、学科の学生と留学生とでバーベキュー等を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

・2025年6月28日にアメリカ・ブラジルからの短期留学生在が農学部を訪問した。臨海実習棟付近での海岸散策や志知キャンパスでの交流会では学生が参加し親睦を深めることで、語学学習の意義や意欲を再確認することが出来た。

〈次年度への課題〉

- ・交流イベントでは補助者が不足したことから、さらに多くの学生参加を求めていく。

外国語学部 外国学科の自己点検・自己評価

学部長学科長

畝 伊智朗

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

オープンキャンパスでは、在学生や卒業生による司会進行を行い、学生がどのように変化したかを実感してもらう、また、スリランカ出身の学生による紅茶のサービスなど国際色豊かなキャンパスライフを実感してもらう企画を実行した。国際系の他大学と差別化するため、伊藤奨学金をはじめとする留学に対するバックアップ体制をわかりやすく説明した。このほか、外国語系の高校内ガイダンス24件、出張講義2件、高大連携事業3件である。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

2025年5月から12月までのオープンキャンパスの生徒・受験生の参加者数は、108名で前年度比30%増加した。2月の中期入試までの受験者数は、入学定員を下回り、前年度と同程度であり、志願者を増やす方策が必要である。

○入学定員：50名、令和7年10月入学生：9名（うち1名は2年次編入）

令和8年4月入学生：27名、入学定員充足率：70%

高校内説明会では、対象生徒が1、2年生であり、進路に向けての文理選択の決定に合わせて行われることが多い。また、1日の開催のうち他分野の説明に赴く生徒もおり、複数回の設定がされていた。来キャンパス型の高大連携活動では、外国学科の通常授業に参加する形式、ネイティブ教員による英語学習プログラムを実施した。外国学科の在学生との交流もあり、高校生が大学進学を実感できる機会とした。

〈次年度への課題〉

オープンキャンパス参加者数が、出願数、入学者数に相関傾向にあるため、高校内ガイダンスなどにおいて、オープンキャンパスのPRを促進する。オープンキャンパス時に学科の教育内容のどの点に魅力を感じているか、高校への出張講義の際にこの分野を選ぶ理由などを調査し、教育内容の改善をはかる。高校内ガイダンスでは説明対象生徒が1～2年生であることから、進路選択時の理解を助けるような工夫をする。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

・本学科では、学生が楽しく学び、自己効力感を育むことを重視し、教育活動の充実に努めた。特に、学び合いを基盤としたディスカッション、ペアワーク、グループワーク、プレゼンテーションなど、各種のアクティブラーニングを授業に積極的に導入した。英語学習においては、授業外に英語教員による個別レッスンの機会を設けることで、個別ニーズに応える支援を実施した。また、留学生に対しては、日本語力向上を目的とする課外授業を継続的に行った。さらに、各学期末に実施した授業アンケートの結果を踏まえ、授業担当者がそれぞれ授業改善に取り組んだほか、海外提携校との国際交流機会を提供することで、学生の成長を促す教育環境の整備にも努めた。

・留学生への日本語教育では、2年次修了までに、全員JLPTN2に合格することを目標に、日本語正規授業の充実やN2対策講座などを実施した。

・退学者・除籍者ゼロを目指す。退学などの対策のため、学生の授業出席状況を確認しながら、早め早めに指導を行うよう努めた。

〈3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証〉

本学科は、外国と日本に関する幅広い教養を培い、高度な英語コミュニケーション能力や国際ビジネス等の専門的知識を修得し、グローバル社会の発展に貢献できる人材を養成することを目指して、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーの3つのポリシーを設定している。毎年、カリキュラムマップ、カリキュラムツリー、履修モデルを点検し、本学科の学位授与方針、教育課程の編成・実施方針、入学者受入れ方針が適切に運用されているかを検証・確認している。今年度においても、3つのポリシーに沿った教育の充実に努め、グローバル社会に貢献できる人材の養成に取り組んだ。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

授業にアクティブラーニングを取り入れたことにより、学生が主体的に学習へ参加し、知識・技能を深めるだけでなく、自己効力感を育むことができたと考えられる。これらの活動を通して、学生は他者との協働を経験し、思考力や表現力を伸ばす機会を得た点が成果として評価できる。また、各学期末の授業アンケートでは、本学科の教育取組みに対して学生から肯定的な意見が多く寄せられ、教育活動は概ね良好な評価を得ている。これらの結果から、本学科の教育改善の方向性は一定の効果を上げていると判断できる。

【JLPTN2 取得率】

◆25年度春学期

・外国学科留学生 正課生40名中20名がN2取得（N2取得率50% ※24年度65.9%、23年度58.3%）。

◆25年度秋学期

・外国学科留学生 正課生45名中18名がN2取得（N2取得率40% ※24年度63.6%、23年度69.2%）。

・N2未取得者は、3年次生以上が5名。2年次生が8名。

〈資格・免許などの取得状況〉

英語教員免許（中学・高校）2名、日本語教員養成コース修了認定証3名

【退学者・除籍数】

退学者1名、除籍者3名、合計4名が学修途上で大学を去った。進路変更、精神的課題、経済的理由などが退学等の原因である。

〈3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証〉

ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーの3つのポリシーについて検証を行い、これに基づきカリキュラムマップ、カリキュラムツリー、履修モデルの点検を毎年実施している。今年度も同様に検証・点検を行った結果、3つのポリシーはいずれも適切に運用されていることを確認した。また、これらのポリシーに基づいて点検したカリキュラムマップ、カリキュラムツリー、履修モデルについても、適切に運用されていることを確認した。

〈資格・免許などの取得状況〉

英語教員免許（中学・高校）2名、日本語教員養成コース修了認定証3名

【退学者・除籍数】

退学者1名、除籍者2名、合計3名が学修途上で大学を去った。進路変更、精神的課題、経済的理由などが退学等の原因である。

〈3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証〉

ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーの3つのポリシーについて検証を行い、これに基づきカリキュラムマップ、カリキュラムツリー、履修モデルの点検を毎年実施している。今年度も同様に検証・点検を行った結果、3つのポリシーはいずれも適切に運用されていることを確認した。また、これらのポリシーに基づいて点検したカリキュラムマップ、カリキュラムツリー、履修モデルについても、適切に運用されていることを確認した。

〈次年度への課題〉

次年度に向けては、アクティブラーニングの効果をさらに高めるため、学生一人ひとりの学習スタイルや特性に応じた指導方法の工夫が求められる。特に、グループワークやディスカッションにおいては、発言が積極的な学生と消極的な学生との間で参加度に差が生じる傾向が認められるため、すべての学生が主体的に取り組める環境整備が課題である。そのためには、教員のファシリテーション能力の向上や、学生が適切な役割を担いながら参加できる仕組みをさらに工夫し、より効果的な学習機会の提供を図る必要がある。こうした課題解決に向け、次年度も継続して取り組んでいく。

・秋学期修了時点で、N2未取得の3、4年次生が5名、2年次生が8名となっている。未取得者はN2対策講座に積極的に出席するよう指導しているが、非正規の講座であるため出席率が低い。次年度は週2回の講座に出席し、日本語学習時間を確保させる必要がある。

・退学者等の対策として、引き続き、授業出席状況を確認しつつ、保健室カウンセラーとも相談しつつ、早期の個別指導、学科全体でのモニタリングに努める必要がある。

〈3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証〉

現時点では、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーの3つのポリシー、ならびにカリキュラムマップ、カリキュラムツリー、履修モデルに大きな課題は見当たらない。しかし、変化するグローバル社会および日本社会に適応するためには、学生にとってより学びの充実したカリキュラムを検討していく必要がある。この点は、今後取り組むべき課題として残されている。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

〈学術論文〉

- ・池上真由美、「中学生の自主的な読みにつながる英語絵本の読み聞かせについて」、中国地区英語教育学会、No. 55、pp51-62、(2025年)
- ・小林俊介、大下浩司、塚本貴之、近代絵画における下層の創造的活用(1): 松本竣介《都会》(1940年)を中心に、大原芸術研究所紀要、第1号、9-26 (2025年)
- ・孝岡睦子、大下浩司、阿部善也、塚本貴之、近代絵画における下層の創造的活用(2): パブロ・ピカソ《鳥籠》(1925年)を中心に、大原芸術研究所紀要、第1号、27-50 (2025年)
- ・小林俊介、大下浩司、塚本貴之、近代絵画における下層の創造的活用(3): ジョルジュ・ルオー《道化師(横顔)》(1925-29年)を中心に、大原芸術研究所紀要、第2号、5-26 (2026年3月発行予定)
- ・金沢真弓、「A Global English Approach in ELT-Fostering Positive Attitudes towards English Use- 英語学論説資料保存会第57号、第4分冊、p.735-740、(令和7年、6月)
- ・武田弘文、「『書くこと』から『読むこと』へ —パラグラフ・ライティング指導と読解力の関連性—」、グローバルデザイン論攷、vol. 10、(令和8年)
- ・武田弘文、「文化的文脈理解が言語習得に果たす役割 —ハイコンテキスト/ローコンテキスト知識の教育的意義—」、英親会会報、第14号、(令和8年)
- ・畝伊智朗、「復興支援事業の定点観測における研究倫理と課題 —コンゴ民主共和国の事例から—」、グローバルデザイン論攷、Vol. 9 No.1、pp29-38 (2025年)
- ・Paul R. Townsend, 'The Power of Praise and How to Make it Meaningful', Glocal Design Studies, Volume 9, Issue 1, pages 5-9, 2025
- ・能登智彦、「板東俘虜収容所新聞Die Barackeにみるジャーナリズムの特徴と現代性—定量的・定性的調査によって—」、徳島大学大学院創成科学研究科提出論文 (2025年)

〈講演・口頭発表〉

- ・イアン・ウォーナー、Best-practice Assistant (English) Language Teacher (ALT) deployment and methodology, and beneficial digital technology utilisation at Elementary Schools throughout Japan、一般社団法人大学英語教育学会 (JACET) 主催第12回英語教育セミナー、ポスター発表 (セミナープログラム P.14) (2025年3月)
- ・池上真由美、「これからの旭学園を考える」、美咲町立旭学園 (義務教育学校) 校内研修会、指導助言及び講演、2025年7月
- ・池上真由美、「英語って楽しいよ」、2024年10月美咲町立旭学園 (義務教育学校) 校内研修会、指導助言及び講演、2025年9月
- ・金沢真弓、「国際言語としての英語に対する認識の導入: 大学生の英語に対する意識の変化」、JACET中国・四国支部令和7年度春季研究大会、(令和7年、6月7日)
- ・武田弘文、「『書くこと』から『読むこと』への指導」、第56回 中国地区英語教育学会・研究発表会、(令和7年6月)

〈その他の研究業績〉

- ・池上真由美、美咲町教育委員会より英語アドバイザーの委嘱を受け、英語特区である旭学園 (義務教育学校) の教科横断的カリキュラム開発や英語教育の推進について指導助言を行った。
- ・池上真由美、9月にイギリスのシュタイナー学校 (小学校) 2校において、教育視察を行い、多様な指導方法を学ぶことを通して、これからの教育のあり方に関する論文執筆の準備をした。
- ・大下浩司、反射スペクトルの多変量解析に基づく油彩画下層の油絵具マッピング分析法の開発、科学研究費助成事業 基盤研究(C)、2024年4月~2027年3月
- ・武田弘文、中学校および高等学校の英語科教員対象の授業研究会を定期的実施し、中高接続を意識した授業改善を進めるとともに、中高英語科教員の連携を深める研究に取り組んでいる。
- ・能登智彦、一般社団法人日本バツハ協会アドバイザー就任 (2025年4月)。高野昭夫・協会長の依頼で企画や広報の面のアドバイスを適宜行っている。
- ・能登智彦、元ドイツ全権大使・神余隆博大阪日独協会長のメルケル元独首相著「自由」についての意見交換会 (2025年9月~2026年1月、毎月2回 (計10回)) に参加・討論

〈今年度の結果についての点検・評価〉

業務過多の中、一定数の研究業績を公表できたことは良かった。

〈次年度への課題〉

教員の専門分野が多岐にわたっているため、単著の論文が多い。共同研究の可能性を模索する必要がある。

〈科学研究費助成事業への応募〉

現在、1名の教員が科学研究費助成事業の助成を受けている。令和8年度においては、学科より最低1名は科学研究費助成事業に応募するよう、勧奨する。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

【スーパー・ボランティア・サークル (SVC) /顧問: 池上真由美先生】

*6月 大学コンソーシアム岡山「日ようび子ども大学」

*7月 美咲町立旭学園 English Camp

*2月 美咲町立旭学園 英語集会

*10月 岡南小学校PTAバザー支援

【軽音サークル/顧問: 畝伊智朗先生】

*7月 大学コンソーシアム岡山主催「エコナイト奉還町商店街イベント」に出演

*7月 備前市「伊部むかし夜市」に出演

【その他】

*10月 岡輝公民館主催、異文化交流イベント「あなたの国のお月見は？」の準備・参加 (SVC有志、正規留学生、交換留学生)

*2月 2026そうじゃ吉備路マラソン・ボランティア (実行委員会へ学生代表2名を派遣、留学生を含む学生24名、教職員5名)

*3月 地域交流イベント「第17回つなぐれ岡輝2025」出演予定 (SVC、留学生)

〈今年度の結果についての点検・評価〉

地域イベントなどに学科の学生 (留学生を含む) の参加やイベントの準備、実施などを要請されることが増えた。サークルや研究会のメンバーや留学生で、積極的に対応した。地域の反応は好意的で、留学生の地域での共生、岡山キャンパスの知名度向上に貢献している。

〈次年度への課題〉

イベントなどに慣れた学生も卒業していくので、イベントの準備、実施ができるコアとなる学生の育成が必要である。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

本年度は、外国学科の卒業必修プログラム「スタディ・アブロード (留学)」に計12名の学生を派遣した。派遣先は、カナダ、フランス、英国、スペイン、オーストラリア、ベトナム、台湾の計7か国。派遣した学生12名のうち6名は交換留学生として授業料が免除され、残り6名は自費留学であった。円高に伴い高騰している留学費用を援助する目的で、昨年度から外国語学部独自の奨学金が設けられている。本年度は、「伊藤奨学金」に3名、「スタディ・アブロード特別奨学金」に3名の学生達が選ばれ奨学金が支給された。また、留学した学生計12名のうち、2名がJASSO (日本学生支援機構) の「海外留学支援給付金」を受給した。本年度夏休み・春休み期間中を利用してオンライン留学を行った学生はのべ24名であった。

留学生受入としては、4月に2か国から計6名、10月に2か国から計9名 (1名は2年次編入)、合計15名の留学生が正課生として入学してきた。また、計7か国・地域 (米、韓、蘭、仏、西、アイルランド、台湾) の海外提携校から計12名の交換留学生を受け入れた。あわせて、台湾から1名の科目等履修生を受入れた。

例年開講している夏期短期プログラムに本年度はアメリカの提携校2校、ブラジルの提携校2校、カナダの提携校1校が参加し、計25名の学生+引率が来学した。プログラム期間中研修団は、正課授業を受講したり、文化活動や観光、ホームステイなどを体験したが、そのほとんどに外国学科の学生達が随行し、長時間海外の学生達と一緒に過ごすことで、海外留学へのハードルを下げ、モチベーションを上げる結果につながった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

*外国語学部独自の奨学金が設立され、欧米に長期留学を希望する学生達が、経済的な理由で留学先を変更したり、留学をあきらめなくてもよい環境が整ったことは、学生達の勉学に対するモチベーションを上げることにもつながっている。

*本年度は、夏期短期研修に総勢25名という大人数での研修実施となったため、交流を通じて、学生達はキャンパスにいながら海外にいるような雰囲気を経験することができた。

*コロナ禍の影響で、オンライン留学を余儀なくされていた状況から、本来の海外留学中心にシフトしてきているが、経済的な理由でどうしても海外留学ができない学生や、語学力不足で留学に行けない学生、6週間~4か月の海外生活が出来る健康状態・精神状態にない学生については、引き続きオンライン留学を活用している。海外留学の準備として、オンライン留学を活用す

る学生が増えてきた。

〈次年度への課題〉

*一定数の学生達を留学に送り出したが、やはり留学を先延ばしにする学生が目立つ。経験したことがないことに対する恐れや、決断力の欠如、経済的な理由などが考えられる。コロナ禍以前は、2年次に全員留学することが原則であったので、オンライン留学を含めできるだけ2年次に留学する原則に戻したい。

*留学した学生達が留学先で精神的に不安定になるケースが増えている。留学前に様々な指導やカウンセリングの実施などを試みているが、なかなか効果が見られない。予期せぬ学生が、海外で予期せぬ行動をとるケースもあり、増加する予測不能な学生たちをどうやって安全に海外に派遣するかが大きな課題になっている。また、どの時点で学生を早期帰国させるべきなのか判断を迫られるケースもあるため、個々にきめ細かい対応が求められる。

*交換留学生の受け入れに日本語のレベルを求めているため、日本語学習歴のない学生達が交換留学生として来学してくる。これらの学生達は、留学ビザ取得の関係で、最低週7科目受講する必要があるが、日本語学習歴のない学生が受講できる日本語の授業はなく、英語で開講されている授業数も少ないため、アメリカ人の学生が英語のクラスを受講するというような状況になっている。現在は、日本語のできる正規留学生や日本人学生達がボランティアで交換留学生達に日本語を教えているが、これらのクラスでは単位が付与されず、また日本語を教えるボランティアの確保も難しい。交換留学生の日本語レベルを問わないのであれば、それに対応する受け入れ体制が必要になる。日本語レベルを問えば、現在のように、オランダやスペイン、フランスからの交換留学生はほとんど来れなくなる。

*交流イベントに積極的に参加しようとする学生が少なくなっており、イベント開催ぎりぎりにならないと参加を表明しない学生や、個別に声をかけないと参加しようしない学生が増えている。魅力的なイベントにどうやってより多くの学生達を積極的に参加させるかが課題である。

アニメーション学部 アニメーション学科の自己点検・自己評価

学部長学科長

前嶋 英輝

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

- 令和8年度より入学定員：50名（現在40名定員）
 - ・令和7年10月の入学者：1年生7名、2年次編入生2名、3年次編入生2名（いずれも留学生）
 - ・令和8年4月の入学予定者：1年生34名（入学予定：日本人30名、留学生4名）
- 学科全体は137人となり、定員を170名（1年50名、2～4年40名定員）で計算とすると、充足率は81%
昨年は春の段階で定員40名のうち23名の入学者であったが、今年はそれを上回る事ができた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

昨年を上回る事ができた原因としては、オープンキャンパスで今年度の4年生の就職状況やカリキュラム変更の充実度を強調できた点が挙げられる。東京のアニメスタジオに3名が就職できたことを紹介し、そのスタジオの紹介ができたことで受験者に将来のイメージを提供できたと考えている。

ただ、秋の入学者（特に中国からの留学生）には厳しい状況が想定される。一方で初めてネパールからの留学生を受け入れる事ができた。インドネシアの学生1名が、本学でも使用している液晶タブレットの会社に入社することも決まっており、学科の目標に沿った成果は上がっている。

〈次年度への課題〉

東京のアニメスタジオへの就職を一つの柱として商業アニメにシフトしたアドミッションポリシーを強調しつつ、スタジオ就職は望まないがアニメやマンガ、イラストが好きという学生の確保を強化する事が必要である。次年度からイラスト担当の新採用教員が参加することもあり、新規にAIに強い非常勤講師の採用も決定しているため、イラストやゲーム、3DCGなどを充実する事ができる。

アニメーション学科の名称に沿ったスタジオ就職を中心に、アニメ文化全体に対する研究可能な学科の内容を十分に広報していきたい。別科からの入学者への案内やキャリアサポートセンターとの連携が結果に結びつくことは言うまでもないため丁寧に対応していく。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

- ・退学と除籍について：退学者1名・除籍者1名
- ・資格について：今年度「色彩検定」の3級に2名が合格した。
- ・就職率について：85.7%（2月27日現在）（昨年同時期：52.61%）
- ・現在「アニメーション文化」「イラスト・印刷デザイン」「アニメーション制作」「3Dモデリング・ゲーム」の4つの柱を特徴とするカリキュラムで授業を構成している。これは3つのポリシーに基づいて作成されたものである。2023年度より商業アニメに路線を定め、都心の大手アニメスタジオへの就職を一つの目標に定めたことから、新カリキュラムにおいては特に就職活動に役立つ能力が身に付く授業内容が組み立てられている。
- ・今年度末、1名の学科教員が定年退職の予定であるが、その後任として1名を補充するようになった。地域貢献でも活躍できる人材として期待している。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・退学と除籍については、抑える事ができた。これは各チューター・ゼミ担当者が丁寧な相談をした結果と言える。ただし2週連続欠席リストに掲載が続いている学生もあり、継続して連絡を取りたい。
- ・秋入学生の日本語能力が低い状態が続いているため留学生の専門科目の理解度が高まらない場合がある。入試広報や中国支局長と連絡を取りながら適性について本人の納得できる形で入学してもらうことを配慮したい。

- ・資格については、色彩検定への指導は行なっているが、さらに他のCG関係の技能検定の紹介と授業内での学習方法の指導を強化したい。
- ・アニメスタジオへの就職が順調に進んでいる。現在の3年生・2年生・1年生の様子からも着実に就職者の数を増やしていけると考えている。

〈次年度への課題〉

- ・2026年度に新しく採用するイラスト担当教員には、地域貢献を含めて学科のイベント企画に携わってもらおう。年齢が若く女性であることは、学生にとっても相談しやすい教員となってくると期待している。
- ・英語担当教員には学科内の日本語担当者としても、授業への出席や日本語能力試験の申し込み・可否の結果など、留学生の日本語学修状況を一元的に管理してもらっている。
- ・資格に関しては、令和7年度も「色彩検定」以外に、「CLIP STUDIO PAINTクリエイター検定」や「アドビ認定プロフェッショナル」なども、学科における取得可能な資格として学生に推奨していきたい。
- ・就職については、最終的にはアニメ以外の分野に進む学生の方が過半数になるので、ゼミの2年次・3年次あたりで学生との面談回数を増やし、進路選択で問題が発生しないように丁寧な指導が必要である。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

学術論文 1編
著書・作品等 3点
その他の研究業績 2点

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・科研費については継続が1件あるが、今年度の申請はなかった。
- ・若い教員が増えるので、学科としても研究に対して重要度を増していく。各教員個人でも学会や紀要への投稿を行う予定もあるので、学科として推奨したい。
- ・それぞれの教員が現実的に研究課題を持っているので、具体的に進捗状況を把握しながら計画を進めていく。

〈次年度への課題〉

- ・アニメーションに関する実務教員が多くなっていることから対象となる学会も国内にまだ少ないが、アニメーション学会等や本学紀要への投稿を行うことで具体的な発表件数も増えると考えている。
- ・科研費申請について、学科内でも共通理解をするための時間をとって採用される書き方についても検討する。次年度の申請件数として3件以上を目標としたい。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・今年度も「ゲームジャム高梁2025」を、10月18日（土）と19日（日）の両日、吉備国際大学多目的ホールにて開催した。実施主体はゲームジャム高梁実行委員会であるが、アニメーション文化学部が中心的な運営支援を行っており、学科の飯田先生が審査員長、松山先生が審査員という立場で、参加者の作品を審査し講評を行った。今回も大会ポスターのイラストは、本学科の学生作品を使わせてもらった。なお、例年通り学内からは、作業療法学科、外国学科、経営社会学科、eSportsサークルなどからの協力も得ている。
- ・高梁城南高校と連携してアニメに関する情報交換を行なっている。富田ゼミの卒業研究発表会には同校の生徒2名の参加も見られた。
- ・地域の保育園への保育環境支援を行なった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・「ゲームジャム高梁」は、本学科が岡山県立高梁城南高校、岡山Unity勉強会などの外部の関係機関と協力して実施できる数少ない社会貢献活動なので、今後も継続して関わっていく必要がある。
- ・地域の保育園への保育環境支援に対して感謝いただいたことは、本学科にとっても研究対象の提供を得たことになっており良い関係を継続したい。

- ・高梁市内の企業や観光協会などからの依頼にたいして学生が担当できる事案について検討し、イベントや制作面で協力できると考えている。

〈次年度への課題〉

- ・「ゲームジャム高梁」については、長年定着してきており今後も安定した事業として運営できる見通しが立っているため、関わりを強めることを考えている。新カリキュラムでもゲームやAIに関する内容を充実させてきているので、学生の実践の場として重視したい。
- ・地域の保育園との協力関係も継続しており、子育て支援の観点でも協力できる事業を検討する。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・中国の黄冈師範学院、湖北工業大学などの大学との良好な関係維持ができています。
- ・初めてネパールからの留学生を2名を受け入れる準備ができました。
- ・7月17日、華曜済南実験中学の研修団（生徒28人、教員2名）をお迎えした。研修団の学生らには特別授業を体験してもらった。
- ・国内の日本語学校からの視察を受け入れた。今後日本語が上達している学生を迎える事ができる可能性が広がった。
- ・今年度より留学生の3年次編入には、日本語能力試験の2級合格が必須の条件であると定めた。一定数の学生が継続して、1年、2年次に入学してくれた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・中国の学生の入学が維持できていることに加え、多様な国の留学生が増えていることは、日本人学生にとっても国際的な環境が整っていることに感じている。
- ・留学生の日本語能力の向上については、英語教員の学科内での努力が功を奏しつつある。
- ・研修団や見学を受け入れることは、学科教員や学生にとっても知見を増やす事ができていると評価している。

〈次年度への課題〉

- ・中国・韓国に加えてインドネシア、スリランカ、ネパール、カンボジア、ミャンマーなどの国について学生にも理解度を高めてもらう内容を授業にも落とし込んで、日常的な国際的環境を構築したい。
- ・日本語学習については、早期に意欲を低下させる留学生も見られるため、できるだけ授業内や学科のイベントで日本人学生と交流できる機会を増やし、就職希望についての面談を増やして日本語の必要性を説得力のある形で指導していく。
- ・留学生に対して学科の専門科目と就職支援を連動させたポートフォリオ指導に重点を置いてモチベーションを高めることで自ら学ぶ姿勢を育みたい。

人間科学部 人間科学科の自己点検・自己評価

学科長

京極 真

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

《学科全体》

- ・人間科学科で学ぶ魅力を伝えるために、オープンキャンパスの学科説明では人間科学科の参加者全体に学科説明、各専攻の魅力アピールの機会を設けた。
- ・オープンキャンパスではエレベーターホール前で各専攻の魅力を伝える動画を流し、隙間時間でも参加者に本学科の魅力をわかりやすく伝える機会を設けた。
- ・高校内ガイダンスでは人間科学科の特徴（3専攻で共通して取得できる資格や各専攻独自の資格など）を伝えた。
- ・Instagramで学校生活の様子やオープンキャンパス等のイベント情報を広報した。

《心理学専攻》

- ・オープンキャンパスでは在学生中心に学科説明・体験コーナー等を実施した。楽しんでもらうことを第1の目的とした。
- ・高校内ガイダンス等には依頼のあった27件すべてに対応した。

《理学療法学専攻》

- ・OC、高校内ガイダンスに積極的に取り組んだ。OCでは在学生と高校生のコミュニケーションの機会を重要視した。

《作業療法学専攻》

- ・オープンキャンパス、高校内ガイダンス等に積極的に取り組んだ。作業療法と他の専門職の違い、将来の働き方、国家試験対策体験など具体的に体験できる機会を提供した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

《学科全体》

- ・人間科学科全体：60名（定員120名）、入学定員充足率：51.7%（昨年度87.5%）

《心理学専攻》

- ・23名（定員40名）、入学定員充足率：57.5%（昨年度97.5%）

《理学療法学専攻》

- ・29名（定員40名）、入学定員充足率：72.5%（昨年度117.5%）

《作業療法学専攻》

- ・10名（定員40名）、入学定員充足率：25%（昨年度45%）

〈次年度への課題〉

《学科全体》

- ・人間科学科で心理学、理学療法学、作業療法学を学ぶ意義をわかりやすく伝える。
- ・InstagramなどのSNSを活用し、人間科学科をアピールし、受験生に広く知られるように努める。

《心理学専攻》

- ・職業に直結しないが役に立つ、そんな心理学の面白さを伝え、資格にとらわれない大学生らしい学びの楽しさに気づいてもらえるように、オープンキャンパス等で発信する。

- ・（資格をあまり重視しないが）教員免許の取得も可能であることをアピールする。

《理学療法学専攻》

- ・入学者において、専門科目の勉強が受け身の学生が目立った。そのため、OCや高校内ガイダンスで、確固たる使命感や目的意識が求められる職業であり、社会が必要としている業種であること、様々な活躍の仕方があることを説明していきたい。

《作業療法学専攻》

- ・高校生に作業療法士という仕事を選んでもらえるように、この資格を取得することでどのようなライフスタイルになるのかをイメージしやすくわかりやすく伝える。

- ・作業療法士国家試験受験資格に加えて、園芸療法士を目指せる価値を具体的に伝える。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

【3つのポリシーを踏まえた教育課程に関する検証】

《心理学専攻》

- ・ 昨年は1年生に受検を薦めた心理学検定は、2年次以降に推奨を変更した。
- ・ 基礎演習Ⅲ・Ⅳで心理学検定の受検対策の内容を取り入れた。
- ・ 卒業に必修の専門科目の単位をしっかりとるよう指導した。

《理学療法学専攻》

- ・ 早期の国家試験対策として、2年生で基礎領域の全国模試を実施した。また、国試対策の参考書を2年生で購入して、授業等で活用して指導した。
- ・ 1年生では、職業に対する目的意識が薄い学生が多いため、基礎演習Ⅱを活用して、他大学とのコラボ授業を展開し、職業上で求められるコミュニケーションスキルを高めた。

《作業療法学専攻》

- ・ 1年生では基礎演習Ⅰ・Ⅱで学習習慣の定着と3専攻での交流促進を目的に課外学習、勉強方法の学習、在学生や卒業生との交流を行った。また、作業療法士になるための基礎を作るために基礎医学の学習と並行し作業療法概論や基礎作業学などで作業療法の魅力を学習した。
- ・ 2年生では領域別の作業療法の評価を学習し、3年生で行われる臨床評価実習前の基礎が整った。基礎演習Ⅲ・Ⅳでは専門性を高める勉強を進め、理学療法学専攻と合同で国家試験対策の学習を行った。

【退学者対策】

《心理学専攻》

- ・ 大学に出てくることのできない学生には、チューター等から保護者を含め連絡を取るようにした。

《理学療法学専攻》

- ・ 欠席が多い学生、悩みを打ち明ける学生、成績が低迷している学生には、早期面談を実施した。

《作業療法学専攻》

- ・ 連続欠席する学生にはチューターから連絡を取り、欠席理由の把握と必要に応じて面談を行った。
- ・ 学習意欲が減退している学生に関しては、保護者も含めて話し合い、三者一体で方向性を検討した。

【資格・免許・検定等】

《心理学専攻》

- ・ 2年次生に対して、心理学検定の受検に向けた取り組みを行った。

《理学療法学専攻・作業療法学専攻》

- ・ 国家試験対策を1年次から計画的に実施した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

【教育課程に関する検証】

《心理学専攻》

- ・ 必修科目「心理学概論Ⅰ・Ⅱ」、「心理学実験実習Ⅰ・Ⅱ」については受講生の約半数が単位を取得できない状況であった。

《理学療法学専攻》

- ・ 成績が低い学生、欠席がちな学生、悩みを抱えている学生にはチューターによる早期面談を実施した。早期国家試験対策の実施を継続した。新カリキュラムでは「運動学」の時間数が減っているため、基礎演習で運動学の復習を行った。

《作業療法学専攻》

- ・ 『基礎演習』や『人間科学概論』で3専攻の交流を意識した教育活動を取り入れた。
- ・ 教員間で連携し、サポート体制を構築した。
- ・ 学生の意見やアンケートを基に教育内容を改善し、授業の質向上を図った。

【退学者対策】

《心理学専攻》

- ・ 2025年度の退学者数は3名(4.3%)となり、目標の5%台を下回る好結果となった。ただし、大学に出てくることのできない退学予備学生とも考えられる学生も複数名いることから、今後急増することのないように対応を考えていく。
- ・ 休学中・不登校傾向の強い学生には、チューターよりこまめな連絡を入れている。

《理学療法学専攻》

・成績が低い学生、欠席がちな学生、悩みを抱えている学生にはチューターによる早期面談を実施したものの、退学者は2年生で1名（進路変更）、1年生で1名（健康上の問題）の計2名となった。

《作業療法学専攻》

・退学者は1年生で1名（学習意欲の喪失）、2年生で1名（健康上の問題）だった。
・連続して欠席のある学生には、チューターが欠席理由を確認し、不安のある学生に対してチューターが面談を行い、退学対策に努めた。

【資格・免許・検定等】

《心理学専攻》

・心理学検定の受検者は、1・2年生については0名であった。

《理学療法学専攻・作業療法学専攻》

・1年次・2年次ともに国家試験対策を導入した。

〈次年度への課題〉

【教育課程に関する検証】

《心理学専攻》

・1年次の心理専攻の必修科目「心理学概論Ⅰ・Ⅱ」、2年次の必修科目「心理学実験実習Ⅰ・Ⅱ」で単位取得できなかった学生が非常に多かった。指導法の見直しとともに、それ以上に、学習姿勢の根本的改善を図る必要がある。

・小さな成功体験の積み重ねによる自己効力感と学習意欲の向上を図る。

《理学療法学専攻》

・「運動学」に関する教育機会を増やし、知識の定着を強化する必要がある。
・転学科の希望が、定期試験の結果が判明した後に発生するため、希望学科との折衝期間が短い
か、もしくは、目的意識が未熟なまま転学科する状況があった。

《作業療法学専攻》

・単位を落とす学生を出さないように懇切丁寧に指導する必要がある。
・連続欠席する学生は早期に面談し、休退学につながらないようにする。
・成績不良者に関しては学習上のつまずきを確認し、適宜個別指導を行う。

【退学者対策】

《心理学専攻》

・退学者対策としては、大学に全く出てこない学生、連絡が取れない（返信等のない）学生、集団の中での行動が苦手な学生、対人関係づくりそのものが苦手な学生などへの対応が課題である。教員間の情報交換やホットルームとの連携等をより一層密にするとともに、保護者との連携強化が重要である。退学率は5%台までに収まるよう取り組む。

《理学療法学専攻》

・モチベーションのあいまいな学生、目的意識の薄い学生、悩みを抱える学生に対する早期面談を継続する。

《作業療法学専攻》

・連続して欠席のある学生には、チューターが欠席理由を確認し、不安のある学生に対してチューターが面談を行い、退学対策に努める。
・コミュニケーション力が低く、4年で卒業が難しい学生に対しては早期に保護者に状況を連絡し、支援を行う。

【資格・免許・検定等】

《心理学専攻》

・公認心理士受験基礎資格の取得希望者、教員免許状の取得希望者をしっかりと把握したうえで、きめ細やかな指導をしていく。
・心理学検定の受検を推奨するとともに、自主的な勉強を強く指導していく。

《理学療法学専攻・作業療法学専攻》

・国家試験合格率100%達成を目指して、1年次から一貫して国家試験対策プログラムを計画的かつ体系的に実施する。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

《心理学専攻》

科研費4件（新規：代表1件、分担1件；継続：代表1件、分担1件）
その他の学外助成金2件（新規：代表2件）

編著書等 2編
査読あり論文 7編（単著・第1著者5編；共著2編）
査読なし論文 2編（共著2編）
書評・報告書等 2編
講演・学会発表 48件

《理学療法学専攻》

科研費：3件（代表1件，分担2件）
厚生労働科学研究費補助金：1件（分担1件）
他の助成金等：4件（企業との共同研究2件、学内助成金1件、寄付金1件）
論文：22編（査読あり18編）
口頭発表：19件
外部講演・講義：1件
著書：0件

《作業療法学専攻》

科研費：計3件（代表：1件、分担：2件）
査読あり論文：計10編（単著・第1著者：2編、共著：8編）
査読なし論文：計10編（単著・第1著者：6編、共著：4編）
著書：計4冊（単著：0冊、共編著：0冊、分担執筆：4冊、翻訳：0冊）
講演・口頭発表等：計29件

〈今年度の結果についての点検・評価〉

《心理学専攻》

・科研費の代表での新規採択は1件あったが、今年度も申請件数それ自体が少なかった。
若手教員が申請していないのが大きな問題といえる。

《理学療法学専攻》

・教員が研究活動に取り組んだが、論文化や発表については昨年度より総件数は減少した。
・教員各自で自覚をもって継続的に研究活動に取り組んでいる。
・企業との共同研究契約が2件、地域貢献の学内助成金が1件で、社会実装や地域貢献をもたらす成果であった。

《作業療法学専攻》

・各教員が意欲的に研究活動を展開しており、全体として概ね良好な成果を収めることができた。
・個々の専門領域や現在の研究環境を考慮すれば、今後の改善や発展が十分に見込めると判断した。

〈次年度への課題〉

《心理学専攻》

・若手教員を中心に科研費申請を増やす。
・新たに設置予定の生理心理学実験室を最大限活用して研究を進めていく。

《理学療法学専攻》

・学内外の研究者と積極的な学術交流を図ることを推奨する。
・若手および新任教員を中心に、研究活性化のために、科研費等の応募を増やす。

《作業療法学専攻》

・各教員による継続的な研究活動を推進するとともに、幅広い学術交流の機会を活かして、研究成果のさらなる質的・量的向上を図る。
・若手教員や現時点で成果が限定的な教員に対する支援を厚くし、すべての教員が継続して研究実績を積むことができる環境の構築に努める。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

《心理学専攻》

・例年どおり、臨床心理学系の教員を中心に、学校ふれあい促進事業（高梁市教育委員会）特別支援教育推進事業（高梁市教育委員会）、教育相談（岡山県・高梁高校）、母子保健事業：乳幼児健診（高梁市・健康づくり課）、子どもの心とからだの総合相談（岡山県・備北保健所）、ペアレント・トレーニング講座（高梁市・NPO法人color）、学校における心理教育授業（倉敷市真備東中学）、少年院におけるコンサルテーションおよび保護者支援（法務省岡山少年院）、児童

養護施設におけるアートセラピー体験（岡山聖園子供の家）、岡山いのちの電話相談（岡山いのちの電話協会）、思春期・ひきこもり相談（岡山県・備北保健所）、心の健康相談（岡山県・総社南高校）で地域連携・地域貢献活動を行った。

・基礎心理学系の教員は、看護学科教員とともに、防災・減災のための取り組みとして『防災合宿訓練』などを真庭市、高梁市で住民参加のもと実施した。

《理学療法学専攻》

・「きびキビ元氣塾 バランス・体力アップ講座」、「こころとからだのケア講座」、「きびキビ元氣塾 インソール作製プロジェクト（SDGs教育助成事業）」を企画して実施

・農学部公開講座に1名を派遣

・公開講座（まちなかゼミナール）で2名の教員が講義

・高梁市ミニディへ講師講師派遣（2回）

・1年生授業で地域住民の生活課題を共有するため、住民1名を講師として招聘した。

・臨床実習指導者講習会の世話人で教員2名が参画。次年度以降の講習会講師招聘に備える。

《作業療法学専攻》

・「まちなかゼミナール」において、市民を対象にトレーニングマシンを用いた安全な筋力アップのための実技講習を実施した。

・高梁市民を対象とした「まちなかゼミナール」において、生活シーン別のアロマクラフトをテーマにアロマセラピーの基礎講義および作成指導を行った。

・認知症キャラバンメイト連絡協議会および地域包括支援センターと連携し、人間科学科1年生および作業療法学科3年生を対象とした「認知症サポーター養成講座」を開催し、基礎知識や地域の支援資源について紹介した。

・認知症者との共生社会構築に向けた市の取り組みと連動し、若年層や働き盛り世代に向けた認知症および認知症支援に関する啓蒙活動の案内・紹介を行った。

・高梁市役所健康づくり課と連携し、「高梁市虚弱高齢者支援事業」の一環として、地域住民に対し体操を主体とした介護予防教室を実施した。

・中山間地域における産業創出および住民の社会参加促進を目的とする「ゲームジャム高梁」の要請を受け、健康支援の観点から地域住民との連携のあり方について探索を行った。

・倉敷市民学習センターにおいて、「いつまでも楽しむ園芸！レイズドベッドで広がる緑の癒し」をテーマに講演を行った。

・吉備創生カレッジにおいて、「緑による癒しの効果」に関する講演を行った。

・南あわじ志知キャンパスで開催された「2025年度 地域創成生涯学習講座」において、「緑の力を暮らしに活かす ～園芸療法の視点から学ぶ健康づくり～」と題した講演を行った。

・並木学園福山校において、探究授業の講師を務めた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

《心理学専攻》

・例年どおり、高梁市教育委員会や保健所などとの連携で、教員の専門性を生かした活動が行われている。

・学部生や大学院生の現場実習の機会となっているものもあり、本学科と地域づくりとの関係づくりに貢献している。

・防災合宿訓練については、真庭消防署とも連携しながら行ったが、地域住民の参加は少なかった。学生も参加しての活動であり、教育効果も大きかったと考える。

《理学療法学専攻》

・教員の専門性を生かした地域貢献活動が行われた。

・演習授業を通して地域課題を分析できる人材の育成に取り組むことができた。

・研究活動の内、地域貢献の学内助成金が1件採択され、事業が行われたことは、新たな取り組みとして評価できる。

《作業療法学専攻》

・吉備国際大学の公開講座「まちなかゼミナール」における実技講習では、参加者の約9割がトレーニングマシンの未経験者であったものの、安全かつ効果的な筋力向上の手法を実際に体験してもらうことができた。

・アロマセラピーに関する講義では、気分や生活シーンに応じた精油の選択やブレンドの要点を解説し、16名の参加者とともにシューズキーパーの制作を行った。「日常にアロマを取り入れたい」「アロマの幅が広がった」といった好意的な反応が得られ、有意義な実践となった。

・認知症サポーター養成講座の実施にあたっては、事前に連絡協議会にて若年層への啓発や技術伝達の方針にブレがないことを確認し、結果として約120名の新たな認知症サポーターを輩出することに成功した。

・認知症啓蒙活動は過去2年間からの継続事業として着実に展開し、地域と大学の連携事例として大学の公式ウェブサイトを通じ、広く学外へも活動状況を発信した。

- ・高梁市内4地区で開催した介護予防教室では、前年度に把握した住民のニーズを反映させた体操プログラムを実践した。地区コーディネーターからは、前回以上に個別の事情に寄り添った健康対策が提供できたとの高い評価を得た。
- ・「ゲームジャム高梁」への協力事業では、作業療法の知見を活かし、地域住民を食事提供ボランティアとして巻き込むことで減災体験の機会を提供する計画を立てたが、相談受理から開催までの準備期間が不足していたため、実際の住民参加には至らず課題を残した。
- ・倉敷市民学習センターでの講演には40代から70代までの約15名が参加し、レイズドベッドの解説や農作業時の姿勢指導、アグリサイズの実技などを提供した。終了後には市内の関連事業者から産学連携の打診を受けるなど、新たな展開への端緒を開いた。
- ・吉備創生カレッジにおける講義では、約15名の高齢者を中心に参加を集め、講義後に押し花を用いたしおり作りの園芸クラフトを体験していただくことで、好評を得た。
- ・南あわじ志知キャンパスでの地域創成生涯学習講座では、大学周辺の住民を中心に講義と園芸クラフト（押し花しおり作り）を実施し、顔なじみの参加者同士が交流を深める活気ある場を提供することができた。
- ・高等学校の探究授業においては、高校生自身が園芸活動から得られる効果について質的分析を行い、その結果を発表するまでの実践的な指導とサポートを行った。

〈次年度への課題〉

《心理学専攻》

- ・学生および地域住民、さらに外国人（留学生・労働者）を対象とした防災・減災教育を、市レベルでの連携の下で、広く行えるよう取り組んでいく。
- ・中山間地のため高齢者も多く、交通の便も悪いため、こちらから地域に出向いて集落ごとに活動する必要性を感じた。

《理学療法学専攻》

- ・地域連携・地域貢献を推進するために、今年度の取り組みを継続する。
- ・授業を通して、地域の人々のウェルビーイング向上に関わる身体的、心理的、および社会的な課題を発見し分析する人材育成の充実を図る。
- ・異業種協働のための基礎力を身につけるためのキャリア教育を推進する。

《作業療法学専攻》

- ・公開講座の開催にあたり、高梁キャンパス9号館は駐車場からの動線が長く、初めての来訪者には経路が分かりづらいという課題があるため、案内方法等の改善策を検討する必要がある。
- ・認知症サポーター養成講座については、市が実施している受講者アンケートの結果や本学学生の受講状況に関係者間で共有し、次年度のより効果的な講座運営や対策に活用する。
- ・学内における若年層向けの認知症啓発活動をさらに推進するため、次年度はより多くの学生の目に触れるよう、学生が日常的に集まりやすい学生会館などを会場として活用することを検討する。
- ・介護予防事業に関連し、他機関等からの度重なる調査や検査の協力要請が地域住民の負担（疲弊）に繋がっている現状を考慮し、虚弱高齢者に対してより負担の少ない健康支援・介護予防の評価システムやアセスメントツールを模索していく。
- ・「ゲームジャム高梁」などの事業へ協力する際は、企画の初期段階から深く関与し、地域住民の継続的な参加を通じた健康増進や社会参加を促進できるような、実効性の高い地域連携プランを提案する。
- ・今年度農学部で実施した公開講座の実績を踏まえ、次年度は高梁キャンパスにおいても同様の講座を開催できる機会や実施形態を検討する。
- ・次年度より新たに開始される履修証明プログラム「園芸療法の基礎」の開講に向けて、受講者を募るための積極的な広報活動を展開していく。
- ・並木学園福山校における探究授業の講師については、次年度も引き続き担当し、継続的な教育支援を行っていく予定である。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

《心理学専攻》

- ・授業を中心に、専攻・心理学科の留学生との交流ができる環境を用意した。
- ・「グローバルスタディーズ入門」の科目で国際的な視点を学んだ。

《理学療法学専攻》

- ・1年生は、「グローバルスタディーズ入門」科目で国際的な視点を学んだ。「基礎演習Ⅱ」では、海外の人々とのコミュニケーションの視点を学んだ。

・3年生は、「国際貢献・地域理学療法学」にて「海外における理学療法と国際貢献」を学んだ。

《作業療法学専攻》

・フィンドレー大学からの夏の訪問はキャンセルとなったため、今年度の取り組みとしては実績がない。

・加計学園関連の施設、「致理科技大学」（台湾）から特別養護老人ホーム グリーンヒル順正に教員と学生の訪問があった。私は、園芸療法の紹介と体験を行った。作業療法学専攻の2年生有

〈今年度の結果についての点検・評価〉

《心理学専攻》

・学科内に留学生がいるにもかかわらず、日本人学生からの積極的な関係づくりが見られない。授業内でのグループ活動もその場限りという傾向が強かった。

・本学科の学生の場合、日本人同士でも関係づくりが苦手な学生が多いという、より根本的な問題もある。

《理学療法学専攻》

・2年生で国際化教育を行う機会が少ないことが課題である。

《作業療法学専攻》

・今年度は派遣・受け入れとも実施できなかった。フィンドレー大学との国際交流を推進していくために、今度も連絡を取り合いながら、受け入れ体制を整えれば、交流していきたいと思う。

・致理科技大学との交流を半日行うことができた。学生、教員ともに園芸療法の見学、体験を高齢者を交えてしていただき、興味を持っていただけた。日本の高齢者施設について知っていただくことができたと考える。

〈次年度への課題〉

《心理学専攻》

・留学生（他学科の学生も含む）と日本人学生との継続的な交流の機会を設定し、相互理解を深める取り組みが必要と考える。

《理学療法学専攻》

・英語でコミュニケーションを図れる機会を増やす必要がある。

・「おしゃべりカフェ」への参加による交流を推進する。

《作業療法学専攻》

・フィンドレー大学との国際交流を推進していくために、今度も連絡を取り合いながら、受け入れ体制を整えれば、交流していきたいと思う。

・致理科技大学からの交流は継続しており、令和8年度5月に特別養護老人ホーム グリーンヒル順正に教員、学生が訪問されることになっている。作業療法学専攻の学生も参加する予定にしている。

通信教育部の自己点検・自己評価

通信教育部長

栗田 喜勝

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

(1) 本学科の教育目標は、ブランドビジョンに定める「実践的な知識を自ら学ぶ力」、「多様化する社会で生きぬく力」、「自分の可能性を信じる力」の育成を基盤として、子どもの主体的な学びを援助する保育内容・教育内容に関わる専門知識を修得し、子どもへの直接的な発達支援や、保護者への子育て支援を行う実践力を身につけることであり、目標に沿った人材養成を行っている。

(2) 本学科のカリキュラムは、4年制通信教育課程として、大学卒業の学位取得にふさわしい教育内容になっている。具体的には、教養科目群14科目(テキスト科目11、スクーリング科目3)は、基礎的な教養を身につけるために言語・情報関係科目群、社会・人文関係科目群、自然科学関係科目群から成っている。また、専門科目群104科目(テキスト科目71、スクーリング科目27、実習科目6)は、保育士資格・教員免許取得にかかわる専門科目に加えて、心理・保育・教育・子ども福祉について多面的に学ぶための科目が配置されている。

① テキスト科目については、科目担当教員が指定する教科書や参考書を用いた自宅学修であるが、科目単位認定試験については、対面実施により年度当初の計画通り実施することができた。

② スクーリング科目については、対面授業で行うことにより計画通り実施できた。

(3) 資格・免許の取得状況については、学生の希望通り、保育士資格を1名が取得することができた。

(4) 退学者対策としては、ゼミ担当教員の個別指導体制により、学生が気軽に相談できる環境を整えている。取り組みの成果として退学・除籍とも無かった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

4年間の学びを通して、保育・初等教育に関する各種の専門知識や技術を修得し、専門職者に必要な職業倫理、子ども観等を身につけるとともに、向上心を持ち自己実現を目指す態度を涵養することができており、保育士資格が学生の希望通りに取得できている。また、教員の懇切丁寧な指導により、退学者、除籍者とも無かったことは評価できる。

〈次年度への課題・向上方策〉

令和2年度募集停止となり、本学科は今年度末に廃止となる。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

(1) 学科の研究活動としては、学科教員の共同研究があげられるが、「吉備国際大学たかはし子育てカレッジ事業」に関わる研究や、高梁市における「次世代育成支援対策」に関わる研究等を行っており、今年度は、親子を対象とした「子育て講座」1回、保育者を対象とした「子育て支援者講座」2回を実施した。親子を対象とした子育て支援活動の取り組みは、親子のふれ合い交流や子ども同士、親同士の交流を図るなど、中山間地域における地域密着型子育て支援拠点形成のモデルとして地域の子育て支援に貢献することが期待されており、令和6年度おかやま子育てカレッジ地域貢献事業補助金(岡山県指令備中局地第2005号)の交付を受けた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

岡山県の補助金による地域の子育て支援事業を学科教員が協働して展開したことは評価できる。

〈次年度への課題・向上方策〉

令和2年度募集停止となり、本学科は今年度末に廃止となる。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

(1) 各種子育て講座の実施

平成22年7月に高梁市内の子育て家庭に対する支援を目的として、岡山県備中県民局、高梁市、高梁市内の子育て支援団体等、12団体の協働により大学内に設置された「吉備国際大学たかはし子育てカレッジ実行委員会」による様々な活動を例年展開している。本年度は、高梁市内の子育て家庭の親子を中心とした子育て支援講座や市内の保育園、幼稚園、こども園等に勤務する保育者に対して子育て支援者講座を実施した。

(2) 各種委員等

学科教員が委員を受託している各種委員会については次の通りである。

高梁市こども子育て会議委員、高梁市保育者育成プログラム検討委員会委員、岡山県保育士養成協議会理事

〈今年度の結果についての点検・評価〉

高梁市内における子育て支援講座や子育て支援者講座の活動は評価できる。

〈次年度への課題・向上方策〉

令和2年度学生募集停止となり、本学科は今年度末に廃止となる。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

異文化・国際事情の理解を深め、国際化・グローバル化時代の様々な国際問題の理解や取り組むべき課題に関する知識・洞察力を養うために、「外国語(英語Ⅰ,Ⅱ)」をはじめ、「多文化理解」や「国際社会学」等の授業科目を配置し、国際化教育の推進を図っている。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

授業科目の中に、「多文化理解」や「国際社会学」等の科目が配置されていることは、国際化の推進に資する取り組みとして評価できる。

〈次年度への課題・向上方策〉

令和2年度学生募集停止となり、本学科は今年度末に廃止となる。

社会学研究科の自己点検・自己評価

研究科長

姜 明 求

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

教員一丸となって定員確保(100%)のために大学の公開講座・講演、学科授業(学内進学)、学会出席などを通じて情報発信をした。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

教員一丸となって定員確保のために公開講座、講演、学科授業(学内進学)などを通じて積極的に情報発信をした。

学生確保の点検と評価は以下の通りであった。定員確保(100%)の点検結果、入学者は前期課程7名(58%、日本人1名、留学生=女1名、男5名)で、前年度が25%(3名)。5名は学内進学の留学生(中国5名)、1名が学外留学生(中国)。1名が日本人(社会人)。後期課程の入学生は0名(0%)であった。前年度は1名(25%)。

このような定員割れの結果は大変不満足であり、前期・後期課程共に定員確保の目標(100%)を達成することができなかった。これは深く反省すべき点である。現在、在學生は、博士前期課程が10名(42%、日本人1名、留学生9名)、後期課程が1名(0.08%、社会人=日本人)である。合計は11名(前期・後期)。また、科目履修生1名(博士後期課程の進学希望=中国(香港)・学外)

〈次年度への課題・向上方策〉

定員確保は大きな課題(前期・後期)である。次年度も引き続き、博士前期課程(12名)・後期課程(4名)の入学定員100%を目指す。

次年度も、教員一丸となって定員確保(前期・後期課程共に、100%)のために公開講座、講演、学科授業(学内進学)、学会出席などを活用して定員確保につながるような情報発信を積極的にしていく。特に、学内進学の院生増加のために積極的に授業中に社会学研究科の魅力の情報発信をしていく。また、博士(後期)課程に社会人の確保に全力を尽くす。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

社会学研究科の3つのポリシーに合わせて、社会のニーズに応える教育及び院生の満足度が高くなる学習体制、研究指導体制を構築した。また、日本語教育(留学生)に力を入れると共に、懇切丁寧な研究指導をした。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

教育の充実の点検と評価は以下の通りであった。懇切丁寧な論文指導と留学生の日本語学習支援など教育の充実を点検した結果、以下のような効果が見られたことを高く評価することができる。

- ① 専門科目(24単位)及び演習(8単位)の32単位を取得し、修士論文の審査に合格した者に対して修士学位(社会学)を授与した(日本人1名、留学生7名=秋4名、春4名)。対象の全員(8名)が修了できた。このような結果は懇切丁寧な研究指導と自主的に研究できる教育環境の充実が院生の動機づけの向上と学習満足度の向上につながったからである。
- ② 退学者を防止するために、各教員が院生の修学状況を把握し、個別面談の実施、教員間で情報を共有しながら、懇切丁寧な指導を行なった結果、退学者(除籍者)ゼロ%の目標を達成することができた。
- ③ 日本語教育の充実は留学生の日本語能力の向上につながる効果があり、修士論文の完成ができた(7名)。7名の内、5名は国内で就職、2名が帰国し、就職(ベトナム、中国)。また、日本人1名も就職。就職率は100%。
- ④ 社会の多様なニーズに対応するために不開講科目は引き続き隔年開講して専門教育の充実を図った。
- ⑤ 社会学研究科論叢27号を発行し、在學生1名、OG2名、OB3名が投稿した。在學生、OG、OBの投稿は社会学研究科の情報発信とブランド力の向上にもつながったと考えられる。

〈次年度への課題・向上方策〉

課題は社会学研究科の3つのポリシーに合わせて、学習満足度の向上と研究科のブランド力の向上につながるような取り組みを引き続き行うことである。

次年度も、日本一面倒見の良い研究科を目指して、懇切丁寧な研究指導(主指導教員と副指導教員2名)と留学生の日本語学習支援と、学習満足度の向上のために魅力ある研究環境の改善の取り組みを全教員が引き続き行う。また、退学者ゼロ%を目指して全教員が情報を共有し、個別面談を実施して問題の学生を早期発見し、指導を行う。このような取り組みは面倒見の良い社会学研究科の取り組みであり、引き続き行う。さらに、社会学研究科の情報発信とブランド力の向上のために大学院論叢28号を刊行する(OBとOGの投稿)。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

教員各自が科研などの研究費の申請と、著書・論文・学会発表を目指した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

研究推進の点検と評価は以下の通りであった。

科研費採択・継続 3件、助成金 0件、受択研究 0件、外部資金 0件
論文 9編、コラム 1編、著書(編著) 2編
学会発表 9回

研究推進の点検結果、時間と様々な活動が制限される中、研究の業績(論文、著書、学会発表)は一定の評価ができる。ただし、全教員が年に1編の論文、著書を公表することが叶わず、目標を達成することが出来なかった。また、科研の採択、外部資金、助成金などの獲得においては実績が悪く、より一層の努力が必要であることを反省点として指摘できる。

〈次年度への課題・向上方策〉

社会学研究科において科研の採択の増、助成金、外部資金の獲得は課題である。次年度も、教員各自が科研の採択、助成金、外部資金獲得のためにより一層の努力をすると共に、教員各自が研究力レベルアップと、社会学研究科のブランド力を高めるために論文、著書の公表、学会発表が行える時間の確保、環境整備に取り組む。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

各教員が教育・研究の専門分野を活かして、公開講座、行政の委員などの地域連携、地域社会貢献活動を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

地域連携・地域貢献の推進の点検と評価は以下の通りであった。地域連携・地域貢献を点検結果、各教員は教育・研究の専門分野を活かして地域連携、地域社会の貢献活動を行った。特に、公開講座(まちなかゼミナール)、地域創成生涯学習講座、高梁市民を対象にする高梁健康スポーツ講座+高梁筋力アップ講座を行った。また、高梁公民館運営審議委員、など行政の委員を担当した。このような活動は地域連携、地域社会に大きな貢献であり、一定の評価ができる。ただし、地域連携、地域社会の貢献活動の回数が少なく、反省点として指摘できる。

〈次年度への課題・向上方策〉

地域連携、地域社会の貢献活動の回数の増加は課題である。次年度も、情報発信とブランド力の向上のために公開講座、ボランティア活動などの地域連携、地域社会の貢献活動には全教員が積極的に取り組む。このような活動を通じて大学の持つ知の社会への還元と共に、地域社会に貢献できる人材育成の充実を図る。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

研究・学習を通して異文化・国際事情などの理解、地域住民との国際交流を図り、国際化を推進した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

国際化の推進の点検と評価は以下の通りであった。社会学研究科の在學生は留學生が多く、国際化の一環として授業を通じて異文化の理解の促進、また、岡山県真庭市月田町の春日神社の祭りの参加活動を通じて日本文化の理解と共に地域住民との国際交流を図った。さらに、高梁小学校国際理解教育に参加し、小学生との国際理解と国際交流を図った(中国、ベトナム)。

このような国際化の取り組みは一定の評価ができる。社会学研究科の留學生を国別にみると、中国9名である(男7、女2)。

〈次年度への課題・向上方策〉

課題は地域住民との国際交流の回数の増加である。次年度も、引き続き、授業を通じて異文化・国際理解(協力)の促進、また、地域住民との国際交流などを図り、国際化の充実化に取り組む。また、国際社会(自国・日本)でかつ活躍できる人材養成に取り組む。

保健科学研究科の自己点検・自己評価

研究科長

京極 真

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

- ・博士（前期）課程はII期～IV期、博士（後期）課程は（博士）I期において入学者選抜を実施した。複数期にわたる選抜機会を設けることで、受験希望者の状況に応じた出願を可能とし、多様な志願者の受け入れに配慮した。
- ・大学ホームページおよび募集要項・パンフレット等を活用し、博士（前期）課程・博士（後期）課程の教育内容や特色を分かりやすく整理して発信した。
- ・学術誌や学会等の媒体に学生募集に関する案内を掲載し、専門領域に関心をもつ層へ情報が届くよう広報を行った。
- ・EメールやZoom等により受験希望者からの問い合わせ・相談に随時対応し、個別の疑問点の解消と不安軽減に向けた支援を実施した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・博士（前期）課程：入学定員6名、入学者数2名、入学定員充足率33.3%（昨年度の充足率0%）
- ・博士（後期）課程：入学定員3名、入学者数1名、入学定員充足率33.3%（昨年度の充足率100%）
- ・学部大学院一貫教育制度による科目等履修生の受入：2名（理学療法学科4年次）

〈次年度への課題〉

- ・入学定員充足率100%を目標に、受験生が本学を志望しやすくなるよう、受験環境の整備および情報提供の充実を図る。
- ・研究科の特色を分かりやすく示す。特色あるカリキュラムや研究環境等について、具体的な情報を整理したうえで、受験生に伝わる形で広報を行う。
- ・保健医療福祉学部および人間科学部との連携を進め、学部から大学院までの教育の連続性を踏まえつつ、科目等履修生の受け入れ体制の充実に取り組む。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

- ・本学の教育理念を踏まえ、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの3つのポリシーに基づき、講義・演習・研究指導を行った。
- ・研究計画発表会、中間発表会、博士論文事前審査会、学位審査を実施し、学位審査については所定の手続きに沿って運用した。
- ・院生との情報共有のため連絡ノートを整備し、相談対応の体制を見直した。
- ・退学防止の観点から、個別対応を基本とした研究指導を行い、学修・研究の継続を支える体制づくりに取り組んだ。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・博士（前期）課程の修了者は1名、博士（後期）課程の修了者は0名であった。
- ・博士（後期）課程では、1名が博士論文審査を受けたが、不合格となった。
- ・連絡ノートの活用により、院生の要望や相談事項を把握しやすくなった。
- ・退学者は0名であり、退学防止に向けた取り組みは一定の効果があったと整理できる。

〈次年度への課題〉

- ・研究指導体制の充実を図り、主指導教員1名・副指導教員2名の体制で学位論文作成を支援する。
- ・学位審査の運用を点検し、主査1名・副査2名による審査を適正に実施することで、審査の質の確保に取り組む。
- ・授業では媒体・教材の活用を工夫し、講義とアクティブラーニングを組み合わせ、院生の研究遂行に必要な能力・技能の向上につなげる。
- ・TAの活用を進め、大学・大学院教育の方法を学ぶ機会を確保する。

- ・コミュニケーションノートの運用を継続し、相談体制の改善を進める。
- ・退学者数ゼロを継続目標とし、個別指導および支援体制の整備を続ける。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・科研費：9件（内訳：継続 2件、新規 1件、代表 2件、分担 4件）
- ・厚生労働科学研究費補助金：1件（分担 1件）
- ・その他助成金等：4件（内訳：企業との共同研究 2件、学内助成金 1件、寄付金 1件）
- ・論文：50編（査読あり：35編、それ以外：15編）
- ・口頭発表・講演等：66件
- ・著書：4件（内訳：分担執筆 4件）

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・研究活動の成果は、概ね所期の水準に達した。
- ・各々が主体的に研究に取り組み、その成果の発信・公表を行った。

〈次年度への課題〉

- ・次年度も各々が研究を継続するとともに、研究科内の学術的な交流機会を確保し、成果につながる取組を進める。
- ・研究活動の一層の推進に向けて、科研費等の競争的資金への申請を促し、応募を支援する。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・岡山県看護協会、高梁市医師会、地域包括支援センター等と連携し、委員会活動や研修講師等を実施した。
- ・公開講座（まちなかゼミナール）に参画し、市民を対象に運動機器を用いた筋力向上の実技講習、生活場面に応じたアロマクラフト、アロマハンドマッサージ、整膚等の講座を実施した。
- ・認知症キャラバンメイト連絡協議会等と連携し、学生を対象とした認知症サポーター養成講座を開催し、基礎知識および地域の支援資源の理解を促した。あわせて、認知症に関する啓発情報の案内・紹介を行った。
- ・高梁市役所健康づくり課と連携し、虚弱高齢者支援事業等の枠組みで、体操を中心とした介護予防教室を実施した。
- ・「きびキビ元気塾」等として、バランス・体力向上講座、こころとからだのケアに関する講座、インソール作製プロジェクト（SDGs教育助成事業）を企画・実施した。
- ・高梁市ミニディ事業への講師派遣を行った。

- ・生涯学習の場において、園芸療法の視点を踏まえた講演等を実施した（倉敷市民学習センター、吉備創生カレッジ、南あわじ志知キャンパスの地域創成生涯学習講座等）。
- ・地域の学校等への教育活動として、出前講座（未来のパパ&ママを育てる講座、がん教育〔オンライン〕）や探究授業の講師を担当した（方谷學舎高校、成羽中学校、高梁市内中学校、並木学園福山校等）。
- ・1年生授業に地域住民を講師として招聘し、生活課題の共有を通じた学修機会を設定した。
- ・臨床実習指導者講習会の運営に教員が参画し、次年度以降の講習会実施に向けた準備に取り組んだ。
- ・「ゲームジャム高梁」等の地域活動に関して、健康支援の観点から地域住民との連携のあり方を探索した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・各々が自身の専門性を踏まえ、地域に向けた貢献活動に取り組み、地域連携・地域貢献を推進した。

〈次年度への課題〉

- ・今年度の地域連携・貢献の取組を継続する。
- ・また、内容の充実を図ることで、地域住民との関係性をより強固なものとする。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・大学院生の国際的な発信を意識し、学位論文に関連する英文論文の作成に関する支援を行った。
- ・英文論文を教材として検討・討議を行い、国際的な研究動向に触れる学修機会を設けた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・学位論文に関わる英文論文執筆について、大学院生への支援を実施した。
- ・英文論文を用いた議論を通じて、最新の国際的動向に関する理解を促した。

〈次年度への課題〉

- ・英文論文の執筆支援を継続する。
- ・国際的に活動できる研究者の育成に向け、英文論文の読解を通して世界の研究動向への理解を深める機会を確保する。

(通信制)保健科学研究科の自己点検・自己評価

研究科長

京極 真

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

- ・入学者選抜は第1期から第3期まで実施した。
- ・ウェブサイトおよびパンフレット等を用いて、本研究科の概要を周知した。
- ・ウェブサイトやソーシャルメディアを活用し、情報発信を行った。
- ・学術雑誌や学会等において学生募集の案内を掲載するなど、広報活動を行った。
- ・EメールおよびTeamsにより、受験希望者からの問い合わせ・相談に対応した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・入学定員は15名、入学者数は8名であり、入学定員充足率は53.3%であった（昨年度：40%）。

〈次年度への課題〉

- ・定員充足率100%を目指して、入学者数の増加を図り、定員充足を目標として取り組む。
- ・広報の内容と方法を見直し、通信制の特性を踏まえた形で研究科の特徴を分かりやすく伝える。
- ・在籍大学院生の学修環境や支援体制の改善により満足度向上に努め、志願者確保につながる情報発信に結び付ける。
- ・受験を検討する層に向けて、研究科の特色を具体的に示し、志願につながる提示を行う。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

- ・各種ポリシーに沿って教育・研究指導を行い、研究計画発表会、中間発表会、学位審査を実施した。学位論文の審査についても、定められた方針に基づき適正に運用した。
- ・「理学療法学・作業療法学専攻」は1年生6名、2年生11名、「理学療法学専攻」は2年生1名が研究活動に取り組んだ。
- ・EメールやTeams等のデジタルツールを日常的に用い、授業運営および研究指導を行った。
- ・退学者対策として、丁寧な研究指導を行うとともに、教員間で適宜連携を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・9月卒業は1名（理学療法学専攻）、3月卒業は9名（理学療法学・作業療法学専攻）だった。
- ・2年生は長期履修制度利用1名、休学者1名だった。
- ・退学者・除籍者は0名であった。

〈次年度への課題〉

- ・研究指導の質を確保し、大学院生の学修満足度の向上につなげる。
- ・主指導教員1名・副指導教員2名の体制を基本とし、指導内容の充実を図りつつ、学位論文提出までの支援を行う。
- ・学位審査は主査1名・副査2名の体制で適正に実施し、学位の質の維持・向上に取り組む。
- ・授業では各種メディアを活用し、通信制教育の質の確保に努める。
- ・退学者・除籍者ゼロの継続を目標とする。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・科研費：6件（代表 2件、分担 4件）
- ・厚生労働科学研究費補助金：1件（分担 1件）
- ・他の助成金等：4件（企業との共同研究 2件、学内助成金 1件、寄付金 1件）
- ・論文：42編（査読あり 28編、査読なし 14編）
- ・講演・口頭発表等：49件（内訳：口頭発表 19件、外部講演・講義 1件、講演・口頭発表等 29件）

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・研究活動の成果は、概ね所期の水準に達した。
- ・各々が主体的に研究に取り組み、その成果の発信・公表を行った。

〈次年度への課題〉

- ・次年度も各々が研究を継続するとともに、研究科内の学術的な交流機会を確保し、成果につながる取組を進める。
- ・研究活動の一層の推進に向けて、科研費等の競争的資金への申請を促し、応募を支援する。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・公開講座（まちなかゼミナール）に参画し、市民を対象にトレーニングマシンを用いた安全な筋力向上の実技講習を実施するとともに、生活シーン別のアロマクラフトをテーマにアロマセラピーの基礎講義および作成指導を行った。
- ・認知症キャラバンメイト連絡協議会および地域包括支援センター等と連携し、学生（人間科学科1年生、作業療法学科3年生等）を対象とした認知症サポーター養成講座を開催し、基礎知識および地域の支援資源の理解を促した。
- ・認知症者との共生社会構築に向けた地域の取り組みと連動し、若年層や働き盛り世代に向けた認知症および認知症支援に関する啓発情報の案内・紹介を行った。
- ・高梁市役所健康づくり課と連携し、虚弱高齢者支援事業等の枠組みのもと、地域住民を対象に体操を主体とした介護予防教室を実施した。
- ・「きびきび元気塾」等として、バランス・体力向上講座、こころとからだのケアに関する講座、インソール作製プロジェクト（SDGs教育助成事業）を企画・実施した。
- ・高梁市ミニディ事業への講師派遣を行い、地域の通いの場における健康づくりを支援した。
- ・生涯学習の場において、園芸療法の視点を踏まえた講演等を実施した。
- ・地域の学校等への教育活動として、探究学習等の授業における講師を担当し、学外教育との接続を図った。
- ・中山間地域における産業創出および住民の社会参加促進を目的とする「ゲームジャム高梁」等の地域活動に関して、健康支援の観点から地域住民との連携のあり方を探索した。
- ・学内他学部の公開講座等にも教員を派遣し、学内資源の連携を通じた地域貢献を推進した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・各々が自身の専門性を踏まえ、地域に向けた貢献活動に取り組み、地域連携・地域貢献を推進した。

〈次年度への課題〉

- ・今年度の地域連携・貢献の取組を継続する。
- ・また、内容の充実を図ることで、地域住民との関係性をより強固なものとする。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・授業および研究指導の場面で、国際的な最新潮流に関する知見を学生に共有した。
- ・英語論文を教材として討議を行い、世界的な研究動向に触れる学修機会を設けた。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・国際的な潮流を踏まえつつ、今後の研究で求められる観点や内容に対する理解が深まった。

〈次年度への課題〉

- ・国際的に活躍できる研究者の育成に向け、英語論文の読解を通じて世界の研究動向を把握する機会を継続的に提供する。

心理学研究科の自己点検・自己評価

研究科長

森井 康幸

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

- *入試広報室による募集・広報、大学ホームページ上での研究科の案内・教員の活動の発信、それに内部の学部生に向けては学園内推薦入試に有利な心理学検定受検の案内などをおこなった。
- *学園内推薦入試(6月)では学内から3名の応募があった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- *博士(前期)課程の入学定員(15名)に対し、入学者は4月入学が8名。入学定員充足率は53.3%。
- *博士(後期)課程は、入学定員2名に対して、受験者2名、合格2名、入学者は0名であった。

引き続き、入学者数や定員充足率の向上に努めたい。

〈次年度への課題〉

- *本学の学部生に対しては、普段の授業等のかかわりの中で、心理学研究の面白さ、心理的支援の社会的重要性などを理解させ、大学院進学に関心を持たせるよう心がける。
- *九州医療科学大学の臨床心理学科の教員との連携をおこない、博士(前期)課程への入学生の募集を働きかけたい。
- *博士(後期)課程の学生確保については、他大学大学院への移動がないように、研究の質、終了後の進路の確保などで、魅力を高める必要がある。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

- *博士(前期)課程には、1年次生が10名、2年次生が6名(研究生1名含む)の計16名が在籍。
- *公認心理師コースの1年次生10名の実習先の確保・やり繰りに大きな困難を経験した。
- *公認心理師合格のための基礎力確保のため、心理学検定1級以上を認定されていない学生に対して、受検を促した。
- *公認心理師の合格率を向上させるために、模擬試験の積極的な受検を促し、学内でも模擬試験を実施した。
- *心理学コースに在籍する2名(研究生1名を含む)は他大学の博士(後期)課程へ進学。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- *公認心理師コースの実習先の確保の問題を解消するため、また、担当教員の負担を減少させるためにも、入学定員数を15名から10名以下に減少させることを検討すべきと思われる。(実際、15名入学したとすると、現在の教員数、実習施設では対応不可の名状況である。)
- *心理学検定については、2名が受検し、M2の1名が1級合格、M1の1名は認定なしという結果であった。
- *公認心理師試験の合格率の維持・向上(前年度100%)を目指したが、4名受験し1名合格(25%)と、全国平均に比べても低い結果となった。
- *就職に関しては、3名は福祉領域へ就職(就職率75%)、1名は一般企業に就職。
- *心理学コースに在籍する学生は、修士論文の提出が1月中旬になったことで、実験を積み重ねることができ、博士(後期)課程への進学希望者を輩出した点は評価できると考える。

〈次年度への課題〉

- *心理学検定の受検については、1年生入学の段階で周知徹底し、全員が少なくとも1級に合格するように指導したい(基本的に、学部生対象の検定であるため)。
- *公認心理師試験の受験対策として、院生同士の受験に向けた勉強会の立ち上げを促しているが、必ずしも十分におこなわれていない。実施方法等を検討したうえで、こうした試みを次年度も強く促したい。

*今年度は心理学コースへの進学者が1名いるが、講義内容や実験に関するディスカッションを考えると十分な人数ではない。そのため、学部教育の中で進路の多様性を示していきたい。
*博士（後期）課程への進学・入学のインセンティブを高める必要がある。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

*科研費4件（新規：代表1件、分担1件；継続：代表1件、分担1件）
*その他の学外助成金2件（新規：代表2件）
*編著書等 2編
*査読あり論文 7編（単著・第1著者5編；共著2編）
*査読なし論文 2編（共著2編）
*書評・報告書等 2編
*講演・学会発表 48件

〈今年度の結果についての点検・評価〉

*講演・学会発表の件数は着実に増加している。特に、大学院生および学部生との連名発表が多数を占めており、学生の主体的な研究活動を促進し、その成果を学会などで公表する体制が定着しつつあると考える。
*科研費の採択件数が少ない。

〈次年度への課題〉

*科研費の申請を促していく。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

*様々な領域で地域連携・地域貢献活動をおこなった。
保健医療領域：母子保健事業・乳幼児健診、子どもの心とからだの総合相談、思春期・ひきこもり相談
教育領域：学校ふれあい促進事業、特別支援教育推進事業、学校における心理教育事業、教育相談、心の健康相談
福祉領域：ペアレント・トレーニング講座、児童養護施設におけるアートセラピー体験、岡山いのちの電話相談
司法・犯罪領域：少年院におけるコンサルテーションおよび保護者支援
*昨年度に引き続き、地域住民（高梁市・真庭市）を対象に防災に関する取組をおこなった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

*様々な領域で臨床活動をおこない、地域連携・地域貢献をおこなえていることは評価できる。
*防災に関する活動を定期的実施できている点も評価できるが、地域住民の参加者数が低い。

〈次年度への課題〉

※防災に関する活動を広く周知し、地域住民の参加を促すことで、地域全体の防災力を向上させる必要がある。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

*特になし

〈今年度の結果についての点検・評価〉

*特になし

〈次年度への課題〉

*特になし

(通信制) 心理学研究科の自己点検・自己評価

研究科長名

森井 康幸

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

- * 大学ホームページにおける通信制・心理学研究科博士(後期)課程の紹介
- * 通信制・博士(後期)課程のパンフレットの発行
- * 通信事務,あるいは入試広報室による各種大学院説明会
- * 受験資格や教育課程に関する問い合わせに対するメールによる回答
- * 研究内容や研究計画等に関する問い合わせに対するオンラインでの面談

* 入学定員 3 名 ; 入学者数 : 2 名 ; 定員充足率 67%

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- * 入学を検討している学生からの問い合わせが4件あったが, そのうち3件については研究指導の許容範囲を最大限広げ, 受け入れの方向で面談を実施し, 結果2名が受験・合格した。
- * 入学は定員3名のところ2名、全体では定員9名中4名の在籍となった。
- * 博士課程(後期)であるため, 学位論文の作成に当たっては, その専門性の高さゆえに教員側とのマッチング問題は致し方ないと思えるが, できる限り指導する方向で検討していく。

〈次年度への課題〉

- * 上記の学生確保に向けた取り組みを充実させ, 定員充足に向けて取り組みたい。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

- * 年2回(夏・冬)の対面によるスクーリングを実施した。
- * 指導体制も専任教員4名から, 退職された教員の補充も含めて5名体制へと強化した。
- * スクーリングでは, 在籍している3名の院生(2年2名, 3年1名), およびこれまで本研究科で指導頂いていた元教員にも参加頂き, 活発な議論が行われた。
- * 指導にあたり, スクーリングとテキスト科目によるレポート指導のほか, 随時オンラインでの指導も実施している。
- * 今年度は, 在籍6年目の院生の博士論文発表会および博士論文審査会も実施された。
- * 退学者対策については, 通信制ということもあり働きながらの学生のため, 仕事と研究の両立が難しい中, 指導教員と学生と密に連携をとることで対応できている。
- * 本研究科では, DP, CP, APの3つのポリシーのもと, 学生は研究を行い, 教員は指導ができていると評価する。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- * 本研究科の元教員のスクーリング参加により, 多面的な指導が可能になり, 非常に有意義であった。
- * 在籍6年目の院生(3年)も, 博士論文を提出することができた。提出された博士論文については, 主査・副査による審査の結果「合格」となった。

〈次年度への課題〉

- * 来年度, 新たに2名の学生が入学予定である。指導教員のもと, 博士論文作成に向けて研究テーマを明確にした上で研究を進めていく。
- * 来年度, 新しい担当教員も入るので, より指導可能な分野も広がることを期待される。
- * 在学生については, 引き続き, 研究を進めながら査読付き論文の作成を目指す。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

- * 科研費4件(新規代表1件, 分担1件; 継続: 代表1件, 分担1件)
- * その他の学外助成金3件(新規: 代表2件, 継続: 代表1件)
- * 編著書等2編
- * 査読あり論文7編(単著・第1著者5編, 共著2編)
- * 査読なし論文2編(共著2編)
- * 書評・報告書等2編
- * 講演・口頭発表等 48件

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- * 実験室環境が不十分であるが, それなりに成果は出せたものと評価する。
- * 科研費の採択率が上がらないことは残念である。

〈次年度への課題〉

- * 科研費に採択されることを一つの目標とし, 研究活動を進めていく。
- * 研究と教育のバランスを取りながら両方を進めていくことが課題である。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- * 通信制という研究科の特性から, 院生個々の高梁市を中心とした地域貢献は難しい。
- * 担当教員においては, 大学周辺の地域との研究協力をしながら地域貢献に繋がる研究活動を継続している。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- * 特になし

〈次年度への課題〉

- * 特になし

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

- * 通信制心理学研究科としての取り組みは特になし

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- * 特になし

〈次年度への課題〉

- * 特になし

地域創成農学研究科の自己点検・自己評価

研究科長

相野 公孝

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

- ・大学のホームページ及びパンフレットの発行により研究科の案内を行なった。
- ・市民講演会や他研究機関講演会などの機会を活かし、学部だけでなく研究科の案内を試みた。
- ・在学生には課題研究や卒業研究指導を通じていかに研究が楽しいかを伝え、大学院進学への動機付けを行なった。
- ・今年度初めて学部大学院一貫教育の学生推薦の応募を行なった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

研究科：入学定員前期4名、入学者数1名、後期2名、入学者数0名（R7）

入学定員前期4名、入学者数2名、後期2名、入学者数0名（R8）

- ・依然として就職率が良く、在学生から大学院進学者が極めて少ない状況であった。また、社会人においては、理系研究への興味及び学位取得意欲の減退が著しい状況であった。
- ・学部大学院一貫教育の学生推薦の応募を行なったが該当者が0名であった。

〈次年度への課題〉

- ・引き続き在学生には研究の楽しさ、重要性を発信するとともに、社会人の生涯教育の場として利用できるように検討していきたい。
- ・現在3年生への学部大学院一貫教育のアナウンスの徹底が遅れたため希望者が皆無であった。早期のアナウンスが必要である。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

- ・研究科の作成した3つのポリシーに基づきそれを実現できるよう授業を実施した。
- ・令和8年度が海洋水産生物学科の完成年度のため、大学院進学がスムーズに行えるよう専門分野を拡大しカリキュラム変更を行なった。
- ・カリキュラム変更に伴って研究指導及び補助教員の選定を行なった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・新たに前期課程では地域環境学及び水圏生物学を、後期には地域環境保全学分野及び地域水産学分野を追加しカリキュラム変更を行なった。より幅の広い選択ができるように工夫した。
- ・新たに5名の研究指導教員、1名の研究補助教員を追加した。

〈次年度への課題〉

カリキュラム変更に伴った授業がスムーズに行えているのかを検証する必要がある。

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

- ・科学研究費取得のため申請数を増加するために各学科教員に啓蒙し、さらに、学術研究助成基金以外の各省庁及び地方自治体が行なっている競争資金の応募への申請を推奨した。
- ・各学会への査読付き論文への投稿、積極的な学会発表を行うよう啓蒙した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

- ・研究活動実績は、学術論文が5編、学会等発表が14題、書籍が2編、学術雑誌2編、紀要2題、その他研究会講演4題であった。
- ・科学研究費応募は2件(前年5件)であり、新規採択は残念ながら無かった。助成・受託研究は6件、学内共同研究が2件、地域貢献教育研究1件が採択された。昨年に比べ研究費確保への意識が劣っているように考えられ、科研費及び競争的資金確保に向けて更なる努力が必要である。

〈次年度への課題〉

今後とも学術研究助成金はもとよりあらゆる競争的資金に対してチャレンジできる環境を醸成する必要がある。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

地域企業及び地域との連携をさらに強化するために、地域のイベントに積極的に参加し、学術的な面からも地域企業との共同研究を増加させる努力を行った。その結果地域創成農学科、海洋水産生物学科ともに合計29テーマにおいて地域連携活動を行った。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

大学と地域の連携をより総合的・計画的に推進するため、大学、行政のほか農業・商工関係団体、自治会など幅広いメンバーによる南あわじ市大学連携推進協議会を設置し、地域の課題解決のための研究会を通して、地域活力の再生と発展を進めるための仕組みづくりを整えた。

〈次年度への課題〉

地域の課題（耕作放棄地、獣害等）をデータに基づき分析・解決策を提示するシンクタンク型及び大学がハブとなり、自治体・企業・農家を繋いで新しいビジネスを生むプラットフォーム型の地域連携は、これまで多くの課題を実施しているが、地域全体を「実験場」とし、新技術の実証実験を住民と共に行うリビングラボ型地域連携の実施例が若干少なく、今後強化する必要がある。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

学部の国際交流イベントに積極的に参加した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

さなぶり祭において、高梁キャンパスの留学生が参画し、田植えを通して日本の文化の交流を行い。バーベキューを通じて、留学生との学生間交流を密にした。

〈次年度への課題〉

海外研究機関との共同研究を活用化し、研究科学生の海外への視野を広げることも考える必要がある。

(通信制) 連合国際協力研究科の自己点検・自己評価

研究科長

末吉 秀二

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

1. 広報活動
 - ・リスティング広告 (Google)
 - ・協力隊を育てる会ニュース
 - ・研究科ホームページの拡充 (教員の専門分野等を掲載)
2. オンラインによる入学前Web相談の実施
3. 入学者増への施策 (ハイフレックス型授業) の導入

〈今年度の結果についての点検・評価〉

入学定員 (7名)、入学者数 (5名)、入学定員充足率 (71%)
・オンラインによる入学前Web相談者は14名あったが受験者には結びつかなかった

〈次年度への課題〉

- ・入学定員充足率100%を目指す。
- ・今年度の広報活動の評価およびWeb相談、オンライン入試、ハイフレックス型授業の継続

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

- ・夏季および冬季スクーリングにおけるハイフレックス型授業の実施
- ・学際的な知識を養うための共通選択科目 (13科目) の設置
- ・オンライン (Teams) による懇切丁寧な教育・研究指導

〈今年度の結果についての点検・評価〉

概ね満足 of いく結果であった。

〈次年度への課題〉

今年度の取り組みの継続

研究推進

〈今年度の取り組み状況〉

学会への入会および修士論文の学術雑誌への投稿奨励

〈今年度の結果についての点検・評価〉

学術雑誌へ投稿できるレベルの論文はなく、今後の課題となった。

〈次年度への課題〉

今年度の取り組みの継続および修了生へのフォローアップ

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

南あわじ市津井地区での「地域調査法特論」 (フィールドワーク) による地域との連携

〈今年度の結果についての点検・評価〉

受講者はいなかった

〈次年度への課題〉

今年度の取り組みの継続

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

アメリカ、中国、ケニア、ウズベキスタンを調査対象とした研究の実施

〈今年度の結果についての点検・評価〉

概ね満足のいく結果であった。

〈次年度への課題〉

今年度の取り組みの継続

留学生別科の自己点検・自己評価

別科長

松原 孝

学生確保

〈今年度の取り組み状況〉

今年度の別科募集定員100名(春40名,秋60名)に対して春季秋季で147名の応募があり、面接試験の結果春季40名、秋季60名が合格となった。在留資格不認定、入学辞退の学生がいたため、春入学生36名、秋入学生59名が在籍し、令和7年度の定員充足率は94.5%(春入学生90%,秋入学生99%)となった。

別科在学時には、例年通り進路ガイダンスを行うなどして学部進学モチベーションを維持できるよう努めた。

昨年度に引き続き、日本留学の意識をためるために、別科入学前の現地セミナーやワークショップをネパールで実施した。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

令和6年度秋入学生40名中、34名が吉備国際大学に進学(内編入3名)、内部進学率85%となった。また令和7年度春入学生34名(内1名留年生)中、吉備国際大学への進学者は31名で、内部進学率は85%となり、前年度より秋季は約5%減、春季は約19%増となった。74名中、2名が特定技能または就職、1名が退学(除籍)・帰国、留年が6名であった。

今年度から秋入学生のクラスを1クラス増加、また新規国のミャンマーからの学生が入学し、全体のレベルが向上した。

〈次年度への課題〉

吉備国際大学の留学生別科として大学への進学率100%を目指す。この数値を実現するために、前年度同様に各学部の先生方にもご協力をお願いし学部説明会を実施したい。今後は積極的に大学進学を希望する学生が集まるよう、別科の教育の充実および大学との連携をさらに深める。認定日本語教育機関の認定を受けるためにも、文部科学省が提示している条件に合ったレベルの留学生の確保のために、本学の魅力を現地セミナーやオンラインセミナーなどを通してアピールしていきたい。

教育の充実

〈今年度の取り組み状況〉

【退学者対策】

前年度に引き続き、教員間で学生の出欠状況などを共有し、連絡なく欠席した学生には電話やメッセージですぐに連絡をし、反応がない場合は友人から連絡を取ってもらうようにした。常に繋がりをもち、学生の変化に気がつくよう取り組んだ。また面談なども実施し、家庭や経済状況を把握し、学費未納対策として計画的に支払いをするよう指導もしてきた。

【資格・免許・検定等】

別科では入学時の日本語能力のレベルによってクラスを分け、JLPT受験を目標の一つに学習している。試験慣れするため、またモチベーションアップのためにも、JLPT模擬試験を定期的実施。その他、授業内でも模擬試験や模擬問題をくり返しこなし、受験対策をした。

【その他】

現行カリキュラムに基づき教育を実施しているが、次年度の日本語教育機関認定申請を見据え、教育内容・到達目標・評価方法の体系的整理を進めている段階である。特に、到達目標の明確化及び評価基準の客観化を今後の重点整備事項と位置付けている。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

【退学者対策】

令和6年度秋入学生の退学除籍者は1名、令和7年度春入学生の退学除籍者は0名となった。秋入学生に関しては0%から1名増えてしまったものの、春入学生は5%から0%と改善した。国籍や学年を越えた交流が活発であったこと、出席率が90%以上(100%達成者も複数名)であったことから、学校生活への適応状況は良好であったと評価する。

また、教職員増員により、学生相談及び個別対応が迅速化し、支援体制の充実が退学抑制に寄与したと考えられる。

【資格・免許・検定等】

JLPTに関して、令和6年度秋入学生は合格率19%（昨年：31%）－N3:25%、N4:14%（昨年N3:65%、N4:33%）、令和7年度春入学生は合格率24%（昨年：19%）－N3:33%、N4:19%（N3:23%、N4:18%）となった。秋入学生は入学時にN4相当資格保有者が昨年度より少なく、合格率に影響した。

【その他】

教員及び事務職員の増員により、学習支援・生活支援体制が強化された。結果、学生アンケート等においても、満足度の向上に繋がっている。一方で、評価方法については教員間で一定の差異が見られ、成績評価基準の明文化及び統一が今後の課題である。

教育成果は概ね維持・向上しているが、認定申請を見据えた制度的整備が必要な段階である。

〈次年度への課題〉

【退学者対策】

退学や除籍になる学生の兆候を早期につかむためにも、引き続き日常のコミュニケーションや定期的な面談を実施し、信頼関係を築くよう努める。また経済的な理由での除籍者を出さないためにも、別科入学前の面接時に経費支弁について十分に確認を行い、学納金の支払いを徹底させる。

【資格・免許・検定等】

模擬試験結果の分析を通じて弱点領域を把握し、指導内容へ反映させる仕組みを整備する。併せて、進学指導における面接対策及び志望理由書指導の体系化を図る。

【その他】

次年度に予定している日本語教育機関認定申請を見据え、以下の事項を重点的に整備する。

- ・教育課程の体系的整理
- ・到達目標の段階的明示
- ・成績評価基準の明文化及び統一
- ・評価方法の妥当性・客観性の確保
- ・内部質保証体制（PDCAサイクル）の明確化
- ・教員研修計画の策定

教育内容と評価方法の整合性を確保し、組織的運営体制の強化を図る。

地域連携・地域貢献の推進

〈今年度の取り組み状況〉

地域の方々との交流と伝統文化体験のため、高梁市の教育課と婦人会の方たちと連携し、大学で「備中松山踊り」の体験会を実施していただき参加した。希望者は本番にも参加し、そこでさらに地域の方との交流を深めることもできた。（今年度で3年目）

また地域連携の意味合いも兼ねて、岡山ゆかりの団体（アムダマイズ様）に外部講師を依頼し、その活動などを知る機会も設けた。（年2回実施）

〈今年度の結果についての点検・評価〉

日本文化に関心がある学生にとって松山踊りの体験会は毎回好評で、特に浴衣を着て踊るという体験が印象深いようだ。地域の方とも文化を通してお互いに交流を深めることができた。

アムダマイズ様の講義は国際貢献とSDGsについて考えるきっかけ作りが目的であったが、岡山ゆかりの団体ということで、親近感も湧き身近な存在に感じることができ、より関心が持てたようだ。

〈次年度への課題〉

次年度も年中行事として備中松山踊り体験会を実施したい。学部生も交えて学生主体となり地域の方との交流ができるのが理想的である。別科生には体験を通して日本文化だけではなく、学部のある高梁にも関心を持ってもらい、進学後は地域や地域の方との関りを自ら持てる自主性を身に付けてもらいたい。また地域事業や産業を知るきっかけ作りのためにも、引き続き外部講師を招いての講義も実施したい。そのためにも地域の団体とのネットワーク構築も積極的に行う。

国際化の推進

〈今年度の取り組み状況〉

多国籍学生の受け入れを通じ、多文化共生を意識した学内の国際的教育環境の形成に努めた。具体的には、留学生が自国の料理や文化（踊り等）を紹介する機会を設け、相互理解の促進を図った。これにより、学生同士が共通点や相違点を認識し、異文化への関心を高める機会を創出した。また、日本語スピーチコンテストに積極的に参加してもらい、自国について発表する機会もあった。

〈今年度の結果についての点検・評価〉

特別講義(国際貢献とSDGs)や交流活動により、学生は母国と他国との関係や国際貢献の価値について考察する機会を得た。講義後の学生の振り返りや意見交流からは、自らの学修目的の再確認及び多文化理解の深化が確認される。これらの成果は、別科教育が単なる言語習得にとどまらず、国際的視野と価値観形成を包括する教育であることを示している。

〈次年度への課題〉

国際化推進の取組について、日本語教育参照枠に示される「言語能力」及び「社会文化的能力」「行動能力」との関連を整理し、教育課程との体系的な連動を図る必要がある。特別講義や交流活動を、単発的な取組にとどめるのではなく、参照枠の到達目標に基づく学修成果として位置付け、評価方法の明確化を進める。また、これらの取組を自己点検・評価の枠組みに組み込み、参照枠に沿った到達目標の達成状況を検証し、継続的な改善につなげる体制を整備することが次年度の課題である。

令和7年度 自己点検・自己評価委員会総会 外部評価

※各内容について5段階評価（5点：非常に良い 4点：良い 3点：普通 2点：やや劣る 1点：劣る）

1. 令和7年度 吉備国際大学の自己点検・自己評価	評点平均	コメント
(1) 建学の理念・教育目標の具現化について	4.4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 建学の理念に基づくブランドビジョンが共有され、それに基づく教育が進められていると思う。 ・ 建学の理念にマッチした教育目標が設定されている。また、設定の内容をステークホルダー等に対して、わかりやすく伝える方法もできている。<今年度の取り組み状況>の(3)特色と強みをどのように取り入れられるかについての説明があればさらに評価しやすいと思う。 ・ 地域連携・貢献は大変充実している。国際化はもう少し検討してはどうか。 ・ ブランドビジョンの浸透に向けた取り組みがよくわかった。次年度に向けた取り組みにおいて教育活動で具現化が期待される。 ・ 教職員間ではブランドビジョンと教育の特色が浸透していると評価できる。今後は学外への分かりやすい発信を強化し、学生確保につなげていくことを期待したい。
(2) 学生確保について	3.2	<ul style="list-style-type: none"> ・ 募集活動により高校生との接触が増えたことは評価するが、大学全入時代が本格化している中なので、更なる活性化が必要である。 ・ 充足の取組は努力工夫されており、その取組の評価は高くなるが、その結果となる充足率のデータがない為、評価しにくい。OCの参加者数増と入学者数増の相関が示されればわかり易い。 ・ 引き続き学生確保に努めてください。 ・ 学生会館を地域防災拠点にする取り組みに共感した。地域の信頼を得ていくことで志望者が増えて行くと感じた。 ・ 入学定員を充足している学科は1学科のみであり、大学運営上の大きな課題である。少子化を踏まえた学生募集の一層の工夫を期待したい。
(3) 教育の充実（教育改善・向上）について	4.0	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学修成果の向上につながる前向きな改善が多く、全般的に評価できる。 ・ 国家試験の合格率が落ちたことは残念である。 ・ 5つの柱で整理されており、それぞれによく努力されている。学生の課題解決力を高める教育に期待すると共に、高梁市の総学(総合的な学習の時間)・総探(総合的な探究の時間)とも連携できればワクワクしてくる。 ・ 今後も国際化に向けてカリキュラム等を充実させてください。 ・ 自己効力感を高めることをベースに教育改善していることは良いと思う。今の時代に必要な数理・データサイエンス・AI基礎・応用の履修者増は良い傾向。 ・ 教育改善に向けた取り組みは進められているが、その成果がより明確に示されることを望む。
(4) 教育の充実（学生支援の充実）について	4.0	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生と地域との交流やキャンパス間の交流、学生主体の活動などが活発になるよう支援し、学生に様々な経験を積んでほしいと思う。 ・ ここでも5つの柱で整理されており、それぞれによく努力されていて成果も出ていると思う。特に、留学生への支援を更に充実され、真の国際化に繋げてください。 ・ 学生が安心・安全に充実した学生生活が送れるように努めてください。 ・ 学生支援の体制が整っていることは安心・安全な教育環境として良いと感じる。引き続き学生自治が進む取り組みに期待したい。 ・ 学生支援は概ね充実しており、キャンパス間交流も行われている点は評価できる。
(5) 教育の充実（キャリア支援の強化）について	4.2	<ul style="list-style-type: none"> ・ キャリア教育やキャリア支援は充実していると思う。 ・ 市内企業のインターンが増えてほしいと思う。 ・ 2つの柱で整理、説明の内容は、各年次に必要な対策がなされており、高い就職率につながっている。継続され、学生募集でしっかりアピールしていくべき内容と思う。 ・ 就職率100%を目指してください。 ・ キャリア支援のための教育活動の工夫が随所に見られる。就職率が物語っている。 ・ キャリアデザインⅠ・Ⅱのさらなる工夫に期待したい。 ・ 1年次からのキャリア教育が就職率として成果に表れており評価できる。今後も継続的な支援に期待したい。
(6) 教育の充実（図書館の活用）について	3.4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 紙媒体、電子書籍ともに、引き続き利用しやすい図書館に向けて少しずつ改善を重ねてもらえればと思う。 ・ 貸出冊数や入館者の従来評価を重視せず、総合的な指標を提示されることを期待する。 ・ 利用者のニーズに合致した資料がどのようにどれくらい届けられているか等を知りたい。 ・ 今後も図書館・ラーニング commonsの利用数、展示などに努めてください。 ・ 紙書籍と電子書籍のバランスは難しいと感じる。大学生には紙の本の良さも伝えたい。また、カンファレンスの状況などが分かると良い。 ・ 図書資料や各種企画の充実は評価でき、電子資料が増えるとセキュリティーが問題となるが、電子資料の利便性が向上し、リスクの軽減が図られたことは価値がある。
(7) 教育の充実（学修環境の整備）について	3.4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今後も施設設備の充実にも努めてください。 ・ 施設・設備の整備は優先順位と予算のバランス、また施設の魅力化の視点があり、選択が難しい。 ・ LED化については維持管理の観点からも整備を急ぎたい。 ・ 施設、設備の整備は計画通りと認められる。改修した学生会館の活発な活用を期待したい。
(8) 研究推進について	3.2	<ul style="list-style-type: none"> ・ 科研費申請件数が長期的に減少傾向にあるなど、研究活動がやや低調で、課題と認識されているようなので、活性化が望まれる。 ・ 減少傾向にある等の高評価に繋がらない表現が目立つ。「学部単位での産学連携研究会の設置」に向けての具体化を期待する。 ・ 研究費の獲得に努めてください。 ・ コンプライアンスが遵守されている環境は大切な視点。当たり前を継続したい。 ・ Webサイトの教員紹介は「高校生へのメッセージ」を全員つけるといいと思う。 ・ 科研費の採択実績があり、研究倫理・コンプライアンスも適切に管理されている点は評価できる。

評点平均 コメント

(9) 大学運営（持続可能性の追求）について	2.8	<ul style="list-style-type: none"> ・ エネルギー消費量の削減は進んでいるが、検討中のことも多数あり、課題解決に向けて改善が望まれる。 ・ 目標設定はよく考えられた内容が準備されているが、点検・評価に検討が複数あり、早期の改善・実施を望む。 ・ SDG'sの目標達成を目指してください。 ・ 全ての教育活動の成果はSDGsに紐づけられると思うので、SDGsあきりでなくてもいいと感じる。EMS活動は学生にも浸透させ、社会人として意識を持たせたい。 ・ SDGsに関する取り組みは進められているが、学生・教職員全体へのさらなる定着が望まれる。
(10) 大学運営（職能開発の強化）について	3.6	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全学研修で生成AIをテーマにしたこともよいと思うし、学科別研修会も特色に合わせた研修となっており、教職員の資質向上に役立っていると思う。 ・ FD・SD研修を確実に実施されていることはよくわかるが、研修の成果の表現が少なく、表記の工夫が望ましい。 ・ 教職員の資質・能力向上に努めてください。 ・ FD・SDの充実はとても重要だと感じた。特に大学は大きい組織なので、他学部の良い取り組みをブランドビジョンの浸透の視点で共有することは参考になった。 ・ 教職員の資質向上・能力開発に向けた取り組みが行われており、今後のさらなる充実を期待したい。
(11) 大学運営（人権・安全への配慮の充実）について	3.6	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特に問題は起きていないので、引き続き法令遵守やハラスメント防止、人権教育など啓発に努めてください。 ・ 「多様な学生を受け入れており、…、差別のない環境づくりが今後の課題となる」とある事への対応を特に徹底して頂きたい。 ・ 引き続き、ハラスメント防止、排除に努めてください。 ・ 学生の多様化が進む中、組織をアップデートし続け、コンプライアンス違反の起きない環境が維持できていることは、当たり前であっても不断の努力の賜物である。 ・ 人権や安全に関する取り組みは一定の水準で実施されており、今後も時代に即した対応が求められる。
(12) 大学運営（法人部門との連携の円滑化）について	3.8	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特に問題を感じません。引き続き、相互のチェックが働こう、適正な運営に努めてください。 ・ 適切に機能していると思う。 ・ 各設置校との連携を行ってください。 ・ 運営管理体制が整っていると感じた。内部統制も含め、ステークホルダーに説明できる環境の構築に引き続き邁進して欲しい。 ・ 法人部門との連携は概ね円滑であり、適切に運営されていると評価できる。
(13) 大学運営（財政基盤の確立）について	3.2	<ul style="list-style-type: none"> ・ 定員確保を目指して学生募集を強化され、財務状況の見通しを明るくものにして頂きたい。 ・ 安定した財政基盤の確立、経営改善に努めてください。 ・ 定員の充足が課題であるものの、外部資金の獲得等を通じて、より良い研究体制、学生の学びの充実を図って欲しい。 ・ 財政基盤の安定に向け、外部資金の獲得と何よりも学生定員の確保が引き続き重要な課題である。
(14) 大学運営（適正な会計処理の実施）について	3.8	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今後も会計基準等の共通認識の徹底に努めて頂きたい。 ・ 適正な会計処理に努めてください。 ・ 適正な会計処理が行われていると感じる。ヒヤリハットの積み重ねが問題に発展するので、効率的なチェック体制の工夫改善を継続すると良い。 ・ 会計処理は関係法令・規程に基づき、適正に行われていると認められる。
(15) 内部質保証について	4.2	<ul style="list-style-type: none"> ・ PDCAサイクルを回して、自己点検等が行われ、徐々に改善が進んでいると思う。 ・ 体制が整い、よく考えられたアセスメントプランが機能していると思われる。アセスメントプランに基づく学修成果の可視化についてさらなる改善を進めて頂きたい。 ・ 確実に改善指示、改善案を実行できるように努めてください。 ・ 内部質保証委員会の審議状況を見ると、様々な面での議論がなされている。また、内容の共有化も図られている。PDCAが回っているかを確認する仕組みがあるとよい。 ・ アセスメントプランが着実に実施され、PDCAサイクルが機能している点は評価できる。
(16) 地域連携・地域貢献の推進について	4.4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 知の地域への還元、地域貢献活動など多くの活動が行われており、評価できる。今後は、教員、センターなど個々の取組に任せるだけでなく、大学として地域に人材を排出することを地域貢献の柱に据えてほしいと思う。 ・ 9つの柱で整理されており、「地域連携・地域貢献の推進」の意気込みがよく読み取れる。「全学科が地域課題解決人材を育成する授業」に期待する。 ・ 地域連携・貢献の推進に一層努めてください。 ・ 様々な面で、地域連携・貢献できているように感じる。高齢化が進む中、健康寿命を伸ばす取り組みや、地域の子供達が支えられている、と感じる取組を続けて欲しい。 ・ 地域連携・地域貢献は継続的に行われており、今後のさらなる充実を期待したい。
(17) 国際化の推進について	3.4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 留学生に対する支援は、丁寧で充実していると思う。海外留学・研修機会や祖の参加者が多くなってほしいと思う。 ・ 8つの柱で整理されており、「国際化の推進」の意気込みがよく読み取れる。しかし、「地域連携・地域貢献」に比べ、市内へのインパクトを弱く感じる。 ・ 国際化に向けたプログラム、交流会など充実して努めてください。 ・ 日本人学生の留学については、全学部学科生対象の仕組みがあっても良いように感じた。また、留学生はどんだん地域に出て行ってお互いの文化を知ると良いと思う。 ・ 異文化に触れる機会となる交流活動が実施されているが、今後はさらなる全学的な取り組みを望む。

2. 令和7年度 学部・学科・研究科の自己点検・自己評価

評点平均

コメント

社会科学部	3.6	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全般的に精神的に広報や学生の支援、地域貢献など活動され、評価できる。資格取得など外向けに発信しやすい特徴が出れば尚よいと思う。 ・ 定員充足率73%、課題は整理されているので、実践あるのみ。 ・ 広報活動の積極性や学術論文の編数の増加を見ても、積極的な取り組みが伺える。退学者減少に向けての取り組み等を地道に続けることが大切だと思う。 ・ 留学生や在学生在が地域と関わる取り組みを通じ、地域活性化につながることを期待したい。
経営社会学科	3.8	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の指導、地域貢献、留学生との交流、研究成果の発表など、全般的によく取り組んでいると思う。 ・ 日本人の入学者がさらに増加していくことを期待する。 ・ 地域連携や、国際交流、社会調査士の資格取得など、学生の活動の様子が分かる。学科の魅力の向上に向けて引き続き努力して欲しい。 ・ 地域貢献の輪が全学生に波及することを期待したい。
スポーツ社会学科	3.8	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高校訪問などの広報活動、地域貢献、学生への指導など活発に動いていると思う。大学の特徴の一つでもある資格取得については、受験者数や合格率向上が課題と思う。 ・ 退学者対策の充実を期待する。 ・ 高梁市内の健康寿命を伸ばす取り組みはとても良いと思う。地域になくはならない存在であり続けて欲しい。教員採用試験(体育)は難易度が高いので目標数値は要検討。 ・ 市民を対象とした健康教室を10年以上継続している点は、地域に根ざした取り組みとして評価できる。
看護学部 看護学科	3.4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国家試験合格率が落ちたことは残念だが、就職率も高く、学生を支援し、地域貢献にも取り組んでいる。定員充足率が一番の課題で、取組の強化が必要と思う。 ・ 県内の看護学科のある高校校長会に出向き、編入制度や各種奨学金制度のPRをすればよいと思う。 ・ 定員充足と国家試験合格率の向上は重要な課題であると感じる。地域貢献も多くされていることが伺えるが、全県に対する広報的視点も必要と感じた。 ・ オープンキャンパス等を通じて、学科の魅力がより伝わり、志願者増につながることを期待したい。
理学療法学科	3.4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の指導、職業に対する意識の醸成に苦労しているように見える。市民と接し、“ありがとう”と言われるような体験を増やしてはどうかと思う。 ・ とにかく国家試験の合格率高め、その結果を最大限アピールして学生募集に繋げて頂きたい。 ・ 国家試験の合格率が全国平均を上回ることを目標にしてはどうか。 ・ 地域貢献も行われているが、他校との差別化(国際化推進等)を強化してはどうか。 ・ 地域貢献の取り組みは評価でき、今後は教育面でも成果の見える取り組みに期待したい。
作業療法学科	4.4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の指導や地域連携・地域貢献、研究推進にしっかりと取り組んでいると思う。 ・ とにかく国家試験の合格率高め、その結果を最大限アピールして学生募集に繋げて頂きたい。 ・ 国家試験の合格率100%は全教員の努力の成果だと感じる。また、地域貢献活動や国際交流も積極的に取り組まれているので、良い状況を維持して欲しい。 ・ 教育の充実、研究推進、地域連携、国際化の推進で評価できる。
心理学部 心理学科	3.2	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域連携・地域貢献の課題にあるとおり、学生の自主的な地域貢献活動や地域に出向く活動が増えるとよいと思う。 ・ 在籍学生への丁寧な教育を卒業されるまで実施して頂きたい。 ・ 学科の変更が行われている中で、環境面等の苦労を感じる。学生の意欲等、難しい問題もあると拝察するが、地域貢献の機会に、学生の意欲が向上すると良い。 ・ 就職率100%を維持している点は、教育およびキャリア支援の成果として評価できる。
農学部	3.6	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実践的な教育活動が推進され、商品開発など地域との連携が取れていることは評価できる。学生主体のマルシェも評価できる。 ・ 定員充足率88.9%、もう一息である勢いを感じる。 ・ 新学科や改名は個人的にはわかりやすいと思う。私立の農学部は選択肢が少なく南あわじ市の地域の良さを生かした広報を推進して欲しい。 ・ 地域連携・地域貢献の取り組みは評価でき、新学科開設を契機とした学部全体での定員充足を期待したい。
地域創成農学科	3.4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実習と座学の連携について学生からポジティブな評価を受けていることや、数多くの地域連携に取り組んでいることは評価できる。学生確保の取組の充実が望まれる。 ・ 学科の情報発信をしっかりと目立つようにされることを期待する。 ・ 地域貢献の取り組みが充実していると感じた。淡路島内の取り組みが地元の中高生にとって憧れになるような見せ方も大切だと思う。 ・ 地域連携事業は評価でき、今後は農業資源生物学科での教育・研究の充実を期待したい。
醸造学科	3.2	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地元企業との連携による新商品開発の取組は評価できる。 ・ 留年・退学者を出されなかったことは素晴らしい。 ・ 閉科に際して、全員卒業できることは大切であり、無事卒業できて安心した。 ・ 醸造分野の教育は農業資源生物学科に引き継がれており、今後の教育内容の充実を期待したい。
海洋水産生物学科	4.2	<ul style="list-style-type: none"> ・ 早い時期から体験や実習を行っていることは評価できる。また、学生確保のアピール材料として活用できている。学生確保については、この学科の取組を他の学科にも広げてみてはと思う。 ・ 研究推進へ力を入れ、そのせいかをしっかりとアピールして更なる学生募集の成果となるよう繋げて頂きたい。 ・ 安定的に定員が充足されていることは、時代のニーズにマッチしているのだと思う。高校の探究活動の補助は他学科とも連携して農学部の認知が広がるといい。 ・ 自治体や漁業関係者等との交流は評価でき、学科のさらなる発展が期待される。

評点平均 コメント

外国語学部 外国学科	3.4	<ul style="list-style-type: none"> ・ アクティブラーニングにより学生が主体的に学習していることは評価できるが、留学の課題改善が望まれる。 ・ 他大学との違い、本学の魅力をさらにアピールし学生募集の成果に繋げて頂きたい。 ・ 学術論文の件数の多さに目が引かれた。国際交流に興味を持つ高校生は一定数いるので、学科の持つコンテンツの見せ方がポイントになると感じた。 ・ 特色ある指導法と国際化・地域貢献への取り組みが行われており、評価できる。
アニメーション学部 アニメーション学科	3.6	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究や地域貢献、国際化が活動として弱いので評価を上げづらいが、東京のアニメスタジオへの就職など実績も出てきており、今後も着実に積み上げてほしいと思う。城南高校との連携は太くしてほしいと思う。 ・ 就職先をしっかりとアピールして学生募集の成果に繋げて頂きたい。 ・ 在学中の資格取得については、積極的に取り組めば、アニメ以外のデザイン系の就職にも強いのではないかと感じる。地域からデザインの依頼を積極的に受けてみては。 ・ 就職を意識した作画力養成のカリキュラムとなっており、今後の成果に期待できる。
人間科学部 人間科学科	3.2	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域に出向き、心身の健康維持や健康寿命の延伸の側面から、地域のひととのウェルビーイング向上に係る取組を充実させてもらえればと思う。 ・ 人間科学科の魅力・アピールをさらに充実して学生募集の成果に繋げて頂きたい。 ・ 学科全体で、特性のある生徒を多く受け入れることになるならば、その前提で自己効力感の得られるカリキュラム編成が必要と感じる。研究活動は盛んな印象。 ・ 地域連携・地域貢献に関する取り組みが継続的に行われており、評価できる。
通信教育部 心理学部 子ども発達教育学科	3.4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今年度末での廃止は残念だが、今までの尽力に対し敬意を表す。 ・ 令和7年度末で廃止になる、とのことで、丁寧な指導をして、退学者や除籍者が出なかったことは良かったのではないかと感じる。 ・ 退学者・除籍者が無かったことは評価できる。
社会学研究科	3.4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生確保に課題があるようなので、改善に向けての取組が望まれる。 ・ 定員確保を意識した取組を確実に継続して頂きたい。 ・ 社会学系の研究科はどの大学も定員充足が難しいのではないかと感じる。地域おこし協力隊を養成するようなカリキュラムを組んでみてはどうか。 ・ 退学者がなく、就職率100%であり、大学院教育の成果として評価できる。
保健科学研究科	3.6	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生確保に課題があるようなので、改善に向けての取組が望まれる。 ・ 定員確保を意識した取組を確実に継続して頂きたい。 ・ 院生との連絡ノートの存在は、学生にとってもありがたい仕組みなのではないかと感じる。全学で取り組んでみてほしいように感じた。 ・ 退学者が発生していない点は、研究指導等が適切に行われていると評価できる。
通信制)保健科学研究科	3.4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生確保に課題があるようなので、改善に向けての取組が望まれる。 ・ 定員確保を意識した取組を確実に継続して頂きたい。 ・ 研究職の育成も研究家の使命だと思うが、学び直しのニーズが取り込めるような取組があってもいいのではないかと感じる。研究推進は進んでいると感じた。 ・ 退学者ゼロを維持しており、地域連携の取り組みも含め評価できる。
心理学研究科	3.0	<ul style="list-style-type: none"> ・ 資格取得への取組の改善が望まれる。 ・ 定員確保を意識した取組を確実に継続して頂きたい。 ・ 定員と実習先の問題や、公認心理士試験の合格率等改善すべき点が多いと感じた。院生の勉強会が活発になるといいと思う。 ・ 博士（後期）定員2名に対し、受験生（合格者）の2名が入学に至らなかった要因について、今後の検証と対応が求められる。
通信制)心理学研究科	3.4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 定員確保を意識した取組を確実に継続して頂きたい。 ・ 通信制はきめ細やかな対応ができているように感じた。実験環境設備の問題はどのような解決策があるのか気になった。 ・ 研究指導の充実とあわせて、学生確保に向けた取組を期待したい。
地域創成農学研究科	3.2	<ul style="list-style-type: none"> ・ 定員確保を意識した取組を確実に継続して頂きたい。 ・ 現在は博士号を取得した人材の需要もあるので、研究の楽しさと共に、研究職の社会における重要性も訴えていくと良いと感じた。 ・ 学部・大学院一貫教育の情報発信を含め、大学院進学者の確保を期待したい。
通信制)連合国際協力研究科	3.4	<ul style="list-style-type: none"> ・ 定員確保を意識した取組を確実に継続して頂きたい。 ・ 国際貢献に興味を持っている人は多くいると思うので、修了生の知見も活かしつつニーズにあった教育活動を進めて欲しい。 ・ Web相談者が入学に結びつかなかった点について、相談から入学に結びつく仕組みづくりと、学術雑誌への論文投稿ができるよう研究指導の一層の充実を期待したい。
留学生別科	4.0	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の確保や教育は評価できる。日本文化や産業を知ってもらい取組を充実させてもらいたいと思う。 ・ 別科の取組はとても大切と思われる。 ・ 応募者が多数いる状況は、別科の存在意義を多くの学生が感じている証だと感じる。日本をもっと好きになる取組に邁進できるといいと感じた。 ・ 内部進学率が増え、退学除籍者が減ったことは大変評価できる。日本語教育に関しては、学生が学部進学後に苦労しない為にも、N3の合格率にこだわっていただきたい。

総評およびご意見・お気づきの点

学生確保や学生への指導、地位医への貢献など、どの学科も意識して充実を図るよう取り組んでいることが伺える。大学全体として、教育目標の具現化に向けて取り組んでいると評価できる。一方、取り組んではいないものの、成果が芳しくないことも見られる。

学生確保は、少子化の影響もあり、大学全入時代の本格化を迎えて、地方の大学には厳しい情勢だが、学部の増設や財務の収支バランスなど大学の運営に影響があることはもとより、大学が存在する地域の活力の維持にも影響を与える。

オープンキャンパスの参加者数と受験者数に相関関係があるといういくつかの学科で示唆されているので、オープンキャンパス参加者数の増加に向けた取組の強化が望まれる。

また、大学内でも海洋水産生物学科では学生確保に成果が出ている。正確な要因は報告書だけではわからないが、学生の体験や活動をSNSでわかりやすく外に向けて発信していることが、入学への関心を高めている一因にもなっていると思う。まだ取り組んでいない学科は同様に取り組んでみてはどうかと思う。

地域貢献・地域連携では、知の還元や地域との連携に教員の方々がそれぞれよく取り組んでおられる印象を持っている。教員だけの活動に偏らず、多くの学生に学生主体で地域での体験や地域に関わる活動に参加していただきたいと思う。

地域貢献については、昨年と同じような成果のまとめであった。2月の地域連携・地域貢献活動報告会で最後のまとめとして言われたように、今後は地域連携から地域共創へ、地域に有益な人材を排出していくことを重視した取組に変化していくことを期待している。

各学部・学科の定員に対する充足率の説明のしかたがまちまちの為、わかりにくい。充足率の表記のしかたを一定にすべき。

取組み状況の表現が、目標に対してどのように実施しどの程度達成されたのかがわかりにくい。また、単年度で達成するものと年度にわたって計画的に実施するものとわかりやすく整理し、例えば、現在何年目、あるいは、現在どの段階に至っており、達成率～%、といったように表現頂きたい。

全体的には、よく考えよく努力され、学内のベクトルの方向性が一致されており、良き方向へ太いベクトルが突き進んでいると思う。これからも高梁市と一緒に力を併せて前進していきましょう。

入学定員充足率の向上に努めてください。充足率100%以上の学科もあり、次年度以降も達成に努めてください。

全学的に改善を目指して様々な取り組みをしていると感じた。地域貢献も多くの事例があり、地域に根付いた大学であることが理解できた。教員の研究活動については、学部学科ごとのばらつきはあるものの、時代と共に変化する多様な学生の対応等で苦慮されている状況の中、大学の役割の重要なパートとして熱心に取り組まれていると感じた。

各学科の取組を見ると、ブランドビジョンの浸透、という視点で書かれているようには見えなかった。学部学科の特性があり、それぞれのディプロマポリシーに従って教育活動が展開されていることと思いますが、ブランドビジョンを意識した記載方法も検討してみてもどうかと感じた。

今年度から本校の探究活動のアドバイスをしていただけること、また、国際交流関係でお手伝いいただけることをとてもありがたく思っている。この活動で、生徒たちが貴学への理解を深め、地域に人材を残す意味でも進学者が増えれば、と考えている。

中期目標・中期計画に基づき、年間を通じてPDCAサイクルを運用し、内部質保証体制の維持・改善に取り組んでいる点は評価できる。

一方で、国家試験の合格率については前年度と比べ課題が見られ、教育成果を安定的に示していくための一層の工夫が求められる。

引き続き、学習成果の可視化や学習支援の充実を図り、ブランドビジョンの達成につなげていただきたい。

また、学生確保については現状を踏まえつつ、教職員が一体となった取組みにより、今後の改善に期待したい。



輝け、自分。羽ばたけ、未来へ。

吉備国際大学

Kibi International University